

# 道後城北遺跡群II

道後今市9次  
道後鶩谷  
祝谷大地ヶ田

1994

松山市教育委員会  
財團法人松山市生涯學習振興財團  
埋蔵文化財センター



1 道後今市遺跡 9次調査地北壁土層



2 道後今市遺跡 9次調査地遺構面4の人と牛足跡

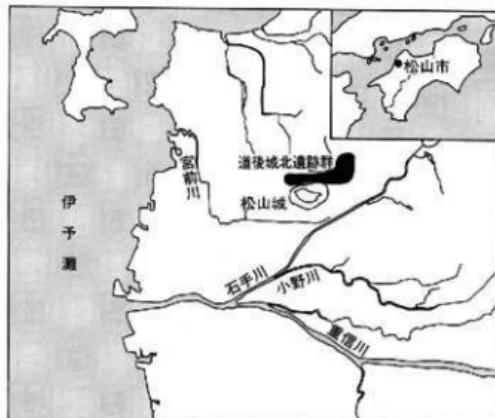
ドウ グ ジョウ ホク

# 道後城北遺跡群II

道後今市9次

道後驚谷

祝谷大地ヶ田



1994

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

# 序

この報告書は、松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが民間業者から委託を受け、発掘調査を実施し、その結果を御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターがまとめたものです。

松山城北面に広がる道後・城北遺跡群には、これまでの報告で縄文・弥生時代の遺跡をはじめとして古墳時代から中世にわたる数多くの遺跡が分布していることが判明しています。昭和50年に調査した愛媛大学構内の『文京遺跡』、同62年の『祝谷六丁場遺跡』、平成元年の『松山大学構内遺跡2次調査』等の報告書が、既に刊行されております。

今回報告しますのは、「道後城北遺跡群」としては第2段となるもので、弥生時代の人面形土製品を出土した「道後鶯谷遺跡」、弥生時代中期から後期にかけての遺物を出土した祝谷人地ヶ田遺跡、中世の生産跡を検出した「道後今市遺跡9次調査地」の3遺跡についてです。これによって、道後・城北地区における丘陵地の開発が弥生時代中期から後期にかけて活発化していることや、生産遺跡の検出が稀薄な当地域において中世の生産地を確認できたことは大きな成果であります。

ここに埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位の方々に心から感謝申し上げ、今後ともご指導、ご助言賜りますようお願い申し上げる次第です。

本書が、埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願うものです。

平成6年2月1日

財団法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田 中 誠 一

## 例　　言

1. 本報告書は、松山市教育委員会・~~側~~松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが昭和62年度と平成4年度に実施した松山市道後北代1292-1他に所在する道後今市遺跡9次調査地、道後鷺谷町5-32に所在する道後鷺谷遺跡、祝谷4丁目964に所在する祝谷大地ヶ田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがい、住居址：S B、土壙：S K、溝：S D、櫛列：S A、性格不明：S Xのように表示し、通し番号を1から付記した。
3. 遺物の実測図は、1/4を基本とするが、一部1/3ないし1/2のものもある。なお、遺物実測図・遺構測量図のスケールドには縮分を付記した。
4. 遺構は担当者の責任のもと調査補助員を中心に測量を実施した。遺物の実測と挿図のトレースは、梅木謙一と橋本雄一の責任のもと、相原秀仁、山之内志郎、水口あさい、山下満佐子、大西陽子、平岡直美、松山桂子、三木和代、渡部美美、兵頭千恵、好光明日香、石丸由利子、松下郁子、高橋睦子、伊藤政志、薬師寺司、内田謙治、小栗圭子が行った。
5. 遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当した。
6. 調査においては、愛媛大学下條信行・田崎博之・平井幸弘、~~側~~愛媛県埋蔵文化財調査センター中野良一・谷若倫郎の諸先生方には御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
7. 本文の執筆は、梅木謙一、橋本雄一、山之内志郎が担当し、証書は生鷹千代が行った。
8. 編集は梅木謙一と橋本雄一が協議し、梅木がこれにあたった。校正においては水口あさいの協力を得た。
9. 本報告書に関する図面と遺物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管・収蔵している。

## 本文目次

第1章 はじめに	【梅木】
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査・刊行組織	2
3. 環境	
第2章 道後今市遺跡9次調査地	【橋本】
1. 調査の経過	9
2. 層位	12
3. 造構と遺物	16
4. 自然科学分析	34
5. 小結	37
第3章 道後鶯谷遺跡	【梅木・山之内】
1. 調査の経過	41
2. 層位	43
3. 造構と遺物	45
4. 小結	56
第4章 祝谷大地ヶ田遺跡	【梅木】
1. 調査の経過	65
2. 層位	67
3. 造構と遺物	68
4. 小結	78
第5章 祝谷地区の弥生時代資料	【梅木】
	85
第6章 調査の成果と課題	【梅木】
	99

## 挿図目次

### 第1章 はじめに

第1図 松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）	3
第2図 道後城北の主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）	4

### 第2章 道後今市遺跡9次調査地

第3図 調査地位図（縮尺1/5,000）	9
第4図 調査区位置図（縮尺1/400）	10
第5図 区割図（縮尺1/200）	11
第6図 調査区北壁土層図（縮尺1/40）	13
第7図 調査区西壁土層図（縮尺1/40）	15
第8図 完掘時見取図（縮尺1/200）	16
第9図 遺構面1 遺構配置図（縮尺1/100）	17
第10図 遺構面1 出土遺物実測図（縮尺1/4）	18
第11図 遺構面2 遺構配置図（縮尺1/100）	20
第12図 S D 1 集石遺構平面図（縮尺1/20）	21
第13図 遺構面2 出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）	22
第14図 遺構面2 出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）	23
第15図 遺構面3 遺構配置図（縮尺1/100）	25
第16図 S D 6 断面図（縮尺1/20）	26
第17図 遺構面3 出土遺物実測図（縮尺1/4）	
第18図 遺構面4 足跡検出状況（1区）（縮尺1/80）	27
第19図 人間と牛の足跡（縮尺1/20）	28
第20図 遺構面5 足跡検出状況（1区）（縮尺1/80）	29
第21図 遺構面6 足跡検出状況（1区）（縮尺1/80）	30
第22図 砂礫層出土遺物実測図（1）（縮尺1/4）	31
第23図 砂礫層出土遺物実測図（2）（縮尺1/4）	32
第24図 その他の遺物実測図（縮尺1/4）	33
第25図 花粉組成図	36

### 第3章 道後鷺谷遺跡

第26図 調査地位図（縮尺1/5,000）	42
第27図 土層図（縮尺1/40）	43

第28図	調査区位置図(縮尺1/200)	44
第29図	S X 1測量図(縮尺1/20)	45
第30図	出土遺物(弥生)実測図(1)(縮尺1/4)	47
第31図	出土遺物(弥生)実測図(2)(縮尺1/4)	49
第32図	出土遺物(弥生)実測図(3)(縮尺1/4)	50
第33図	出土遺物(弥生)実測図(4)(縮尺1/4)	51
第34図	出土遺物(弥生)実測図(5)(縮尺1/4)	52
第35図	出土遺物(弥生)実測図(6)(縮尺1/4)	53
第36図	出土遺物(弥生)実測図(7)(縮尺1/4)	54
第37図	出土遺物(古墳-中世)実測図(縮尺1/3)	
第38図	円形土製品実測図(縮尺1/2)	55

#### 第4章 祝谷大地ヶ田遺跡

第39図	調査位置図(縮尺1/5,000)	66
第40図	土層図(縮尺1/30)	67
第41図	調査区測量図(縮尺1/120)	69
第42図	第Ⅲ層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	70
第43図	第Ⅲ層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	71
第44図	第Ⅲ層出土遺物実測図(3)(縮尺1/4)	72
第45図	第Ⅲ層出土遺物実測図(4)(縮尺1/4)	73
第46図	黒色粘土出土遺物実測図(縮尺1/4)	74
第47図	第Ⅳ層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	75
第48図	第Ⅳ層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	76
第49図	第Ⅳ層出土遺物実測図(3)(縮尺1/4)	77
第50図	表採遺物実測図(縮尺1/4)	78

#### 第5章 祝谷地区の弥生時代資料

第51図	祝谷六丁目遺跡出土遺物実測図(縮尺1/6)	86
第52図	祝谷1丁目出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	88
第53図	祝谷1丁目出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	89
第54図	祝谷1丁目出土遺物実測図(3)(縮尺1/4)	90
第55図	祝谷1丁目出土遺物実測図(4)(縮尺1/4)	91
第56図	道後姫塚遺跡出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	94
第57図	道後姫塚遺跡出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	95

# 写 真 図 版 目 次

- 巻頭図版 1 道後今市遺跡9次調査地北壁土層  
2 道後今市遺跡9次調査地遺構面4の人と牛足跡

## 第2章 道後今市遺跡9次調査地

- 図版 1. 1 調査区北壁土層（南より）  
2 1区ベルト南壁土層（北より）  
図版 2. 1 遺構面1検出状況（北より）  
2 遺構面2完掘状況（北より）  
図版 3. 1 3区遺構面2完掘状況（西より）  
2 4区遺構面2完掘状況（北より）  
図版 4. 1 4区SD1集石遺構（西より）  
2 1区遺構面4検出状況（南西より）  
図版 5. 1 1区遺構面4足跡検出状況（北より）  
2 1区遺構面4足跡検出状況（北より）  
図版 6. 1 1区遺構面4完掘状況（西より）  
2 1区遺構面5完掘状況（東より）  
図版 7. 1 1区遺構面6完掘状況（東より）  
2 完掘状況（北より）  
図版 8. 1 出土遺物

## 第3章 道後鶴谷遺跡

- 図版 9. 1 調査地全景（北西より）  
2 調査区全景（北より）  
図版10. 1 遺物出土状況遠景（西より）  
2 遺物出土状況近景（西より）  
図版11. 1 SX1遺物出土状況（南より）  
2 木杭出土状況（西より）  
図版12. 1 出土遺物①  
図版13. 1 出土遺物②  
図版14. 1 出土遺物③  
図版15. 1 出土遺物④

#### 第4章 祝谷大地ヶ田遺跡

- 図版16. 1 調査地近景（北より）  
2 土層（南より）
- 図版17. 1 遺物出土状況遠景（北より）  
2 遺物出土状況近景（東より）
- 図版18. 1 第Ⅲ層出土遺物
- 図版19. 1 黒色粘土・第Ⅳ層・表採遺物

#### 第5章 祝谷地区の弥生時代資料

- 図版20. 1 祝谷1丁目出土遺物①
- 図版21. 1 祝谷1丁目出土遺物②
- 図版22. 1 祝谷1丁目出土遺物③
- 図版23. 1 祝谷1丁目出土遺物④
- 図版24. 1 祝谷六丁目遺跡壺棺①
- 図版25. 1 祝谷六丁目遺跡壺棺②

## 表 目 次

### 第1章 はじめに

表1 調査地一覧	1
----------	---

### 第3章 道後鶴谷遺跡

表2 出土遺物（弥生）観察表（土製品）	57
---------------------	----

表3 出土遺物（古墳～中世）観察表（土製品）	62
------------------------	----

### 第4章 祝谷大地ヶ田遺跡

表4 第III層出土遺物観察表（土製品）	79
----------------------	----

表5 黒色粘土出土遺物観察表（土製品）	82
---------------------	----

表6 第IV層出土遺物観察表（土製品）	
---------------------	--

表7 表採遺物観察表（土製品）	84
-----------------	----

### 第5章 祝谷地区の弥生時代資料

表8 祝谷六丁目遺跡出土遺物観察表（土製品）	96
------------------------	----

表9 祝谷1丁目遺跡出土遺物観察表（土製品）	
------------------------	--

表10 道後姫塚遺跡出土遺物観察表（土製品）	98
------------------------	----

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

昭和62年度、平成3年度に、松山市道後北代、道後鷲谷町、祝谷4丁目の3ヶ所において埋蔵文化財の確認願いの申請と、遺物発見の届け出が松山市教育委員会文化教育課（以下、本刊では「文化教育課」と記す）にあった。

申請された道後北代1292-1他は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「68 今市遺物包含地」内に、祝谷4丁目964は「53 土居の段遺物包含地」内に、遺物発見の届け出があった道後鷲谷町5-32は「59 桜谷本尊古墳」内にあり、周知の遺跡地として知られている。

申請地の道後・祝谷は、「道後城北遺跡群」と呼ばれるなかにあり、弥生時代における松山平野の主要な遺跡地帯であることが広く知られている。申請及び届け出があった3地点は、道後城北遺跡群の東～北部にあり、特に4地点で23口の平形銅劍が出土しており最も注目される地域となっている。

文化教育課では、確認願いと発見の届け出が申請された3地点について、埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するため、順次事前調査（書類・立会い・試掘）を実施した。

書類審査及び確認調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行った。発掘調査は、遺跡が消失する地点に対し、当該地域における弥生～中世にわたる集落構造の解明を主目的とし、文化教育課及び財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者各位の協力のもと昭和62年度～平成4年度の間に順次調査を実施した。

●表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	期間
道後今市9次	道後北代1292-1 他3箇	652.60	平成4年4月6日～同年9月30日
道後鷲谷	道後鷲谷町5-32	200	昭和62年3月11日～同年5月30日
祝谷大地ヶ田	祝谷4丁目964	303	昭和63年1月11日～同年1月23日

(注) 調査期間は、野外調査と室内調査の期間をいう。

なお、昭和62年度～平成3年9月30日の間は松山市教育委員会文化教育課・松山市埋蔵文化財センターが主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成3年10月1日以降は財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが調査主体となり、野外・室内調査及び報告書刊行事業を実施した。

## はじめに

## 2. 調査・刊行組織 [平成5年8月1日現在]

松山市教育委員会 教育長 池田 尚輔  
生涯教育部 部長 渡辺 和彦  
次長 三好 俊彦  
文化教育課 課長 松平 泰定  
(財)松山市生涯学習振興財団 理事長 田中 誠・  
事務局長 渡辺 和彦  
事務次長 一色 正士  
埋蔵文化財センター 所長 河口 雄二  
次長 田所 延行  
調査係長 田城 武志  
調査主任 栗田 正芳 (文化教育課職員)

## 3. 環境

### (1) 立地

松山平野は、西瀬戸内の南岸にあり、重信川や石手川等の河川により形成された沖積平野である。その広さは、西瀬戸内地方では最も広大な平野であり、古くより西瀬戸内の要衝として発展した土地である。

平野内には、数多くの遺跡が展開し、それ等は幾つかの地域にまとめられる。そのうち、平野の北部、松山城(勝山)から道後温泉にわたる地域は道後城北遺跡群と称されている。この地域は、石手川(重信川に合流し、伊予灘にそそぐ)の旧流路地帯で、扇状地である低地と高鍋山塊に属する丘陵地からなる。遺跡群は、丸山川(平野北部の堀江湾にそそぐ)流域で群内の北にある祝谷地区、宮前川(平野北西部の三津湾にそそぐ)の上流域で群内の東にある道後地区、宮前川上～中流域で群内の西にある城北地区の三地区からなる。

### (2) 歴史的環境

本刊掲載の道後今市遺跡と道後鷺谷遺跡は道後地区、祝谷大地ヶ田遺跡は祝谷地区に属する。ここでは、道後・祝谷地区内の遺跡を概観する。

#### 先土器～縄文時代

古くより、祝谷丸山遺跡出土資料が紹介されているが、近年、多田 仁氏により再検討が行われ、資料評価に進展をみせた(多田 仁 1992)。以降、多田氏や重松 佳久氏(重松 佳久 1992)により平野内の資料についても調査が進み、当該期の石器研究は充実をみせている。



- 道後今市遺跡 9次調査地 ■ 道後鷺谷遺跡 ■ 祝谷大地ヶ田遺跡 ■ 祝谷六丁目遺跡
- 祝谷一丁目出土地(推定地) ■ 道後姫塚遺跡 ④ 文京遺跡 ⑤ 祝谷六丁場遺跡
- ◎ 道後湯月遺跡 ① 樽味立添遺跡 ② 三島神社古墳 ③ 福音寺遺跡 ⑥ 来住庵寺遺跡

第1図 松山平野の主要遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

はじめに



- 道後今市遺跡 9次調査地 ■ 道後篠谷遺跡 ■ 祝谷大地ヶ田遺跡 ■ 祝谷六丁目遺跡
- 祝谷一丁目出土地(推定地) ■ 道後姫塚遺跡 ① 若草町遺跡 ② カキツバタ遺跡
- ③ 松山大学構内遺跡 2次調査地 ④ 松山大学構内遺跡 3次調査地 ⑤ 松山北高遺跡
- ⑥ 道後通又遺跡 1次調査地(RNB) ⑦ 道後通又遺跡 2次調査地 ⑧ 東雲神社遺跡
- ⑨ 祝谷アイリ遺跡 ⑩ 祝谷六丁場遺跡(平形銅剣出土地) ⑪ 祝谷本村遺跡 ⑫ 御幸寺東麓
- ⑬ 土居座遺跡 ⑭ 道後通又遺跡(平形銅剣出土推定地) ⑮ 道後今市遺跡(平形銅剣出土推定地)
- ⑯ 持田遺跡 ⑰ 道後湯蕪(平形銅剣出土推定地) ⑱ 伊佐爾波神社

第2図 道後城北地区の主要遺跡分布図

(S = 1 : 25,000)

## 環境

この地区で、最も古い土器は、土居窪遺跡（岡本 健児 1961）と土居の段遺跡（松山市 1980）より出した後期資料である。縁帯文や注口土器が出土しているが、遺構の検出はなく遺跡の内容は不詳である。ただし、西にある城北地区では、文京遺跡より遺構と遺物が検出され、集落經營が後期にはじまることを確認している（西田 栄 1976、宮本 一夫 1991、栗田 茂敏 1992）。

### 弥生時代

前期 愛媛県の弥生前期前半の持田式の指標となった持田遺跡が知られている。また、平野で最も古い一群の土器に属する綾杉文をもつ壺形土器が採集品として御幸寺山東麓より出土している。前期後半から中期初頭の資料は、道後今市遺跡8次（岡田 敏彦 1985）、道後姫塚遺跡（阪本 安光 1979）より出土している。

中期 谷間の包含層出土資料が数多く知られている。このうち、最も注目されるものは、祝谷六丁場遺跡（宮崎 泰好 1991）で、中期前半の資料が多量に出土している。土器、石器をはじめとし、分銅形土製品、石戈、鉄斧等が出土し、平野の中期前半の基礎資料が得られている。また、土居窪遺跡からは、木製品や土器が出土し、「土居窪式」の標式遺跡として知られている。

後期 最近の調査で、丘陵上や斜面に集落が經營されていることが明らかとなりつつある。祝谷アリイ遺跡（梅木 謙・1992）では前半の住居址が、道後姫塚遺跡では終末の住居址が確認されている。

### 古墳時代

丘陵部に多数の後期古墳が造営されており、御幸寺山・祝谷・常信寺・桜谷・石手伊佐爾波の各古墳群（松山市 1980）が知られるところである。本格的な本調査は、桜谷古墳や祝谷古墳群B区にある数基の古墳で実施されたにすぎず、古墳の詳細は不明であるものが多数を占める。

### 古代

白鳳期の瓦が出土している湯ノ町廃寺、内代廃寺（古田 弘 1986）が知られるが、建物構造等の詳細は未だ明らかではない。

### 中世

道後にある湯築城跡（14世紀、河野氏の築城、平山城）は、現在も調査中であるが、文献史学との共同研究により大きな成果が期待できるものである。

【文 献】

- 多田 仁 1992 「松山平野の石器文化」「祝谷アイリ遺跡」 勅松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 重松 伸久 1992 「右手川水系に於ける旧石器文化」「桑原地区の遺跡」 勅松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 〃 1992 「小野川水系に於ける旧石器文化」「来住・久米地区的遺跡」 勅松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 岡本 健児 1961 「愛媛県土居塙遺跡」「弥生農耕文化の生成」
- 松山市史料集編集委員会 1980 「道後土居塙遺跡と注口上器など」『松山市史料集 第1巻考古編』
- 西田 実・森 光晴・大山 正風 1976 「文京遺跡」 愛媛大学・松山市教育委員会
- 宮本 一夫 1991 「文京遺跡第10次調査」 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 栗田 茂敏 1992 「文京遺跡—第2・3・5次調査」 愛媛大学・勅松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 岡田 敏彦 1985 「道後今市遺跡」 愛媛県教育委員会・勅愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 坂本 安光 1979 「道後塙塙遺跡」 愛媛県教育委員会
- 宮崎 泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター
- 梅木 謙一 1992 「祝谷アイリ遺跡」 勅松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 吉田 弘 1986 「湯之町庵寺」「内代庵寺」「愛媛県史 資料編 考古」 愛媛県史編さん委員会

## 第 2 章

# 道後今市遺跡 ドウゴ イマイチ

— 9次調査地 —



## 第2章 道後今市遺跡9次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯（第3図）

1991（平成3）年7月19日、岡田 孝三氏より松山市道後北代1292-1地内における診療所建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが文化教育課に提出された。当該地は、松山市の指定する『68 今市遺物包含地』内にあたり周知の遺跡として知られている。同包含地内では、これまでに財愛媛県埋蔵文化財調査センターにより道後今市遺跡（岡田 敏彦 1985）として既に5次にわたる調査が行われたほか、松山市教育委員会により6次～8次調査（梅木 謙一他 1992）が実施されており、弥生時代から中世にかけての造構、遺物が多数確認されている。これらのことから文化教育課は当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために1991（平成3）年8月に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、溝及び柱穴などの造構に加え、土師器などの遺物が多数検出された。この結果を受け開発に伴って破壊される造構、遺物に関してその記録保存を行うため文化教育課の指導のもと、朝松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、岡田孝三氏の全面的な協力を得て、1992（平成4）年4月6日に本格調査を開始した。



第3図 調査位置図 (S = 1 : 5,000)

道後今市遺跡 9次調査地

(2) 調査組織

調査地 松山市道後北代1292-1、1292-4、1292-5、1292-7

遺跡名 道後今市遺跡 9次調査地

調査期間 野外調査 1992(平成4)年4月6日～同年7月3日

屋内調査 1992(平成4)年7月4日～同年9月30日

調査面積 652.60m<sup>2</sup>

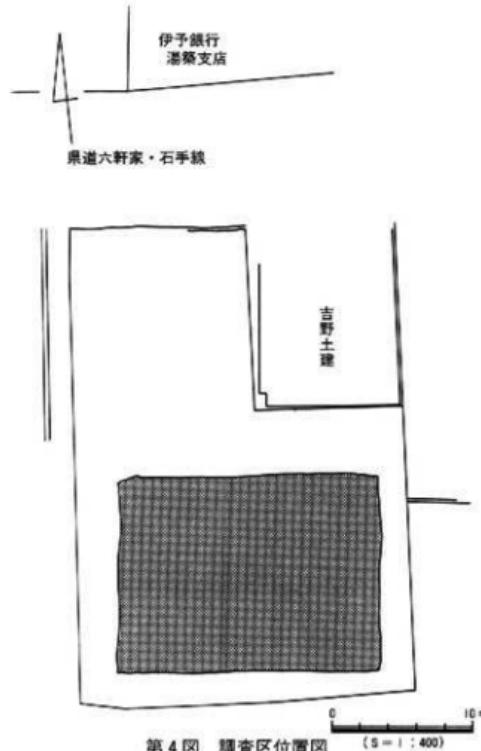
調査委託 岡田 孝三氏

調査担当 橋本 雄一、相原 秀仁

調査作業員 相原 忠重、是沢 嘉明、森 隆、八木 幸徳、宮本 健吉、相原 勇

宮脇 武勇、能田 久士、伊藤 政志、東村智恵子、野口美佐美、薬師寺 司

内田 謙治、小栗 圭子、石丸由利子、高橋 瞳子、松下 郁子



第4図 調査区位置図

## 調査の経過

### (3) 調査の経過

調査対象面積は約652m<sup>2</sup>であったが調査を行っていく都合上、発掘区の一部を排土置き場に使用し、また、調査事務所を設置したため最終的な調査面積は255m<sup>2</sup>となった(第4図)。

1992(平成4)年4月6日より重機を使用して表土及び耕作土の除去作業を始める。

4月9日 作業員を増員してまずグリット設定を行った後、本格的な調査に着手する。

4月16日 銅鑄の痕を検出。

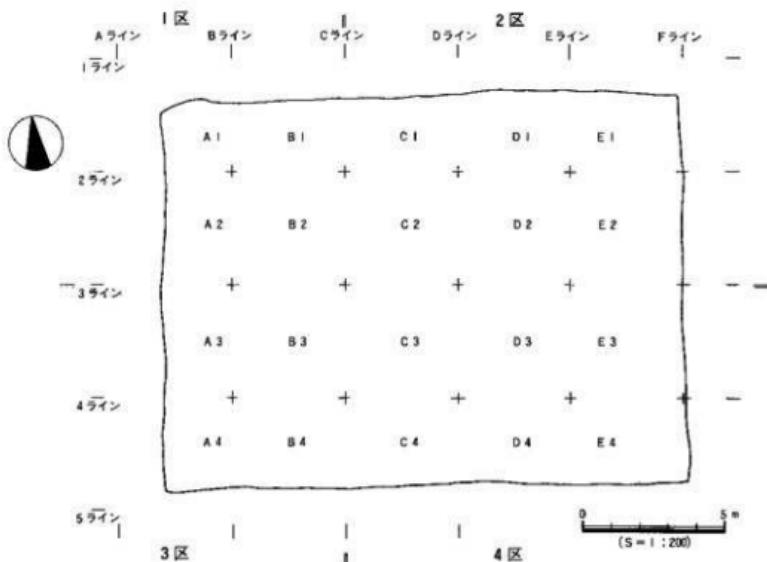
4月26日 2枚目の遺構面を検出する。

5月18日 3枚目の遺構面を検出する。

6月1日 1区で人及び牛の足跡が残る遺構面を検出、その後さらに1区において足跡が遺存する面を2面確認する。

7月2日 現場の作業を終了し、3日にプレハブ事務所を撤去して野外調査を終了。

7月4日から松山市埋蔵文化財センターにて整理作業を行う。



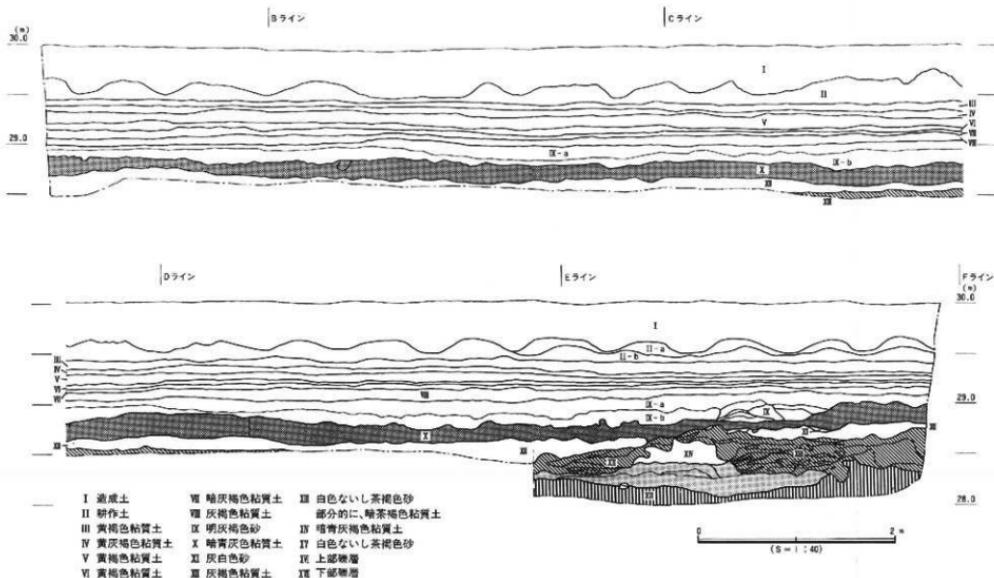
第5図 区割図

## 2. 層位 (第5~8図、図版1)

調査に際して調査区北壁を軸として任意に4メートルグリッドを設定した。南北方向に1~5ライン、東西方向にA~Fラインを設定し西から順にA1、B1、C1…とグリッド名称を決定した。なお、調査区は3ラインとCラインの位置に幅約1メートルの土手を設定することによって1~4区に分割し調査を行った。調査進行の都合上2区は堆土置き場としたため一部を除いてその調査は行わなかった。

本調査区は東西方向はほぼ水平、南北方向は北へ向かって緩斜面をなしている。土層は上から造成土、耕作土、黄褐色粘質土、灰褐色砂、暗青灰褐色粘質土、灰褐色砂、暗青灰褐色粘質土、灰色砂、上部礫層、下部礫層の順に堆積している（北壁東端部分）。黄褐色粘質土はⅢ~Ⅶ層の6層に分層でき、このうちⅢ、Ⅳ層は近世から近代にかけての耕作面と考えられる。Ⅷ~Ⅹ層は中世の耕作面と考えられ13世紀後半から14世紀代の遺物が多数出土している。Ⅺ層（明灰褐色砂）は、中世の洪水に伴う砂層でⅫ層（暗青灰色粘質土）上面で検出された牛と人間の足跡を覆っている。Ⅹ~Ⅺ層にはⅩ層上面も含めて足跡が3面にわたって確認されておりⅨ~Ⅺ層同様中世段階のものと考えられるが、遺物が出土しておらず詳細は不明である。Ⅻ層は灰白色砂で構成されているが極めて堆積が薄く、調査区の全域に安定して分布しているわけではないため、極めて小規模な洪水に起因するものと考えられる。Ⅼ層（茶褐色砂）も洪水に伴う砂礫層であるが、遺物をほとんど含んでおらず時期など詳細は不明である。Ⅽ層（暗青灰褐色粘質土）は、北壁東端部分など調査区の一部分にのみ存在している土層である。Ⅾ層（白色砂）は、Ⅼ層と同様の砂礫層である。Ⅿ層（上部礫層）は、径2~15cm前後の円礫と砂礫から構成される層で弥生時代から古墳時代にかけての遺物を多く含む。なお、このⅯ層についてはその一部が3区において砂礫堆と呼ばれる構造を形成しており、この部分では弥生時代から10世紀にかけての時期の遺物が出土している。ⅰ層（下部礫層）は、直徑15~30cm程度の花崗岩、砂岩及び変成岩で構成され、遺物は出土していない。その礫種、礫径、円磨度から判断して下部礫層の形成は石手川本流の流れによるものと考えられる。ⅰ層（上部礫層）についても、構成礫の内容が下部礫層と同様に石手川上流域の様相を示しているので、ⅰ層同様石手川本流によって形成されたものと考えられる。

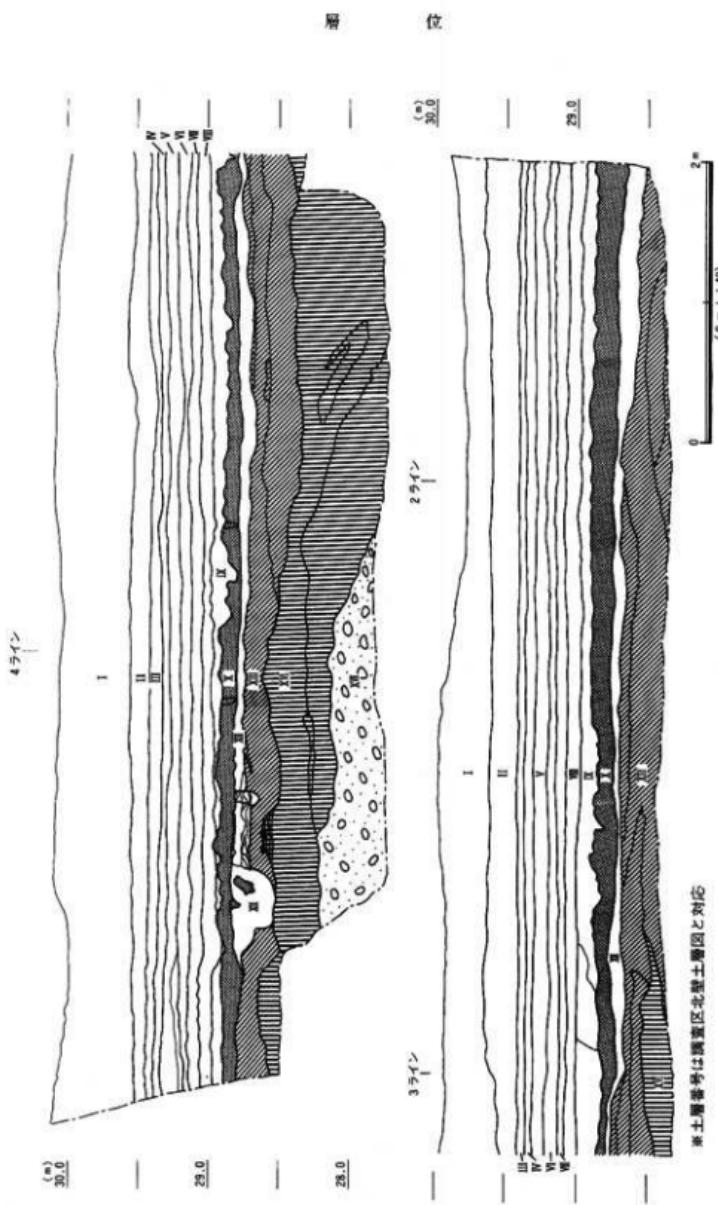
以上が本遺跡の上層の概要であるが、調査区全体の微地形を検討すると北に向かって緩く傾斜していることなどから、調査地のすぐ北側に西に向かって流れる河道の存在が想定できる。一方、東西方向の土層の堆積状況はほぼ水平であることなどから、河道の南側に展開するほとんど水平な面に当遺跡が立地しているものと考えられる。このような立地状況は、後述する中世の耕作面の変遷過程と密接な関係にある。



第6図 調査区北壁土層図

第7図 調査区西壁土層図

測量番号は調査区北壁土層図と対応



### 3. 遺構と遺物

#### (1) 中世の遺構と遺物

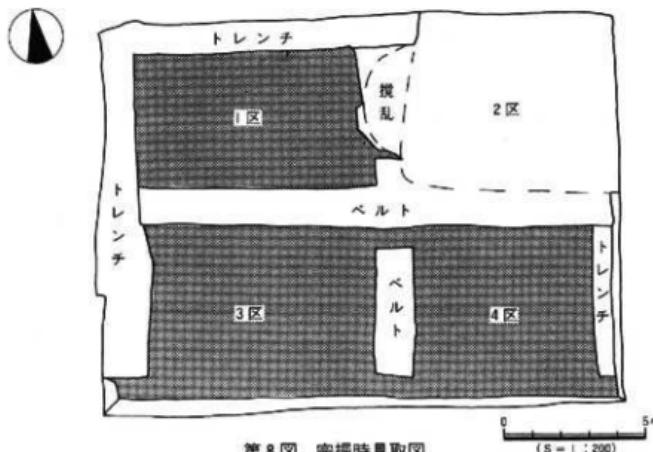
調査を行った1、3、4区のすべてにおいて複数の遺構面が確認され、それぞれ遺物が出土している。調査区のはば全面が中世の耕作面であると考えられるため、各遺構面出土の遺物を厳密に層位的に区分可能かどうかという点については疑問の残る余地もあるが、ここではとりあえず遺構面ごとに各遺物の内容、出土状況等を記述することとした。

当遺跡においては検出範囲が部分的なものも含めて遺構面が計6面検出されている。ここでは任意に上面から順に中世遺構面1～中世遺構面6と呼ぶ。

##### 1) 中世遺構面1（第9～10図、図版2）

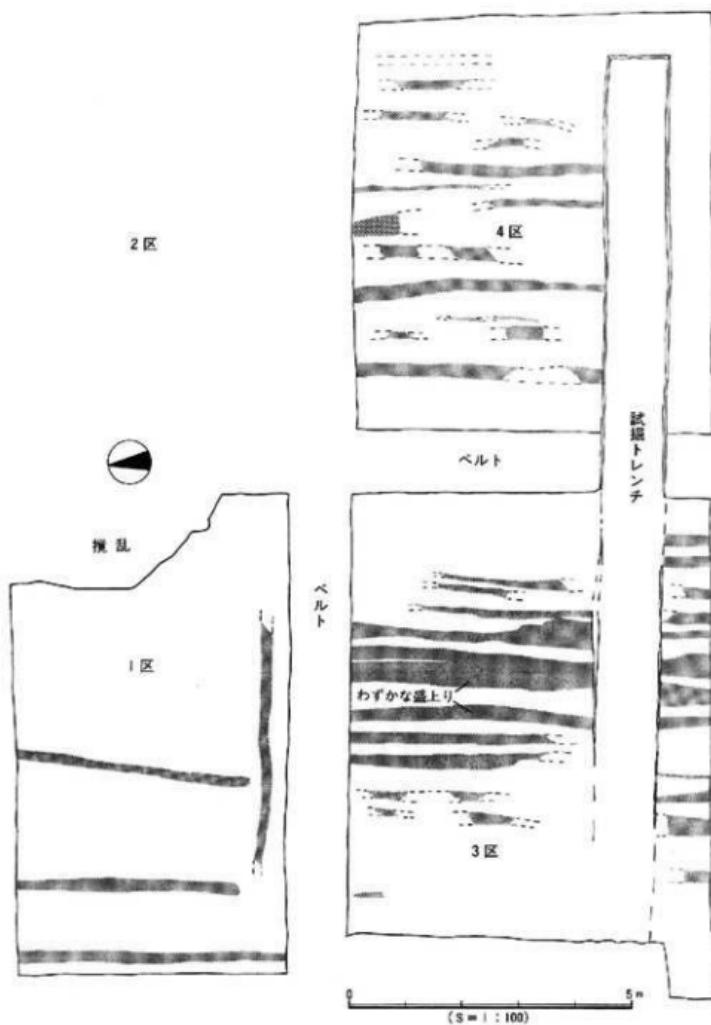
遺構：Ⅶ層(暗灰褐色粘質土)上面において鋤溝の痕跡を確認した。3、4区においては南北方向に22本、1区では東西方向に1本、南北方向に3本、灰白色粘質土のわずかな盛り上がりが検出された。この盛り上がりは一見すると歓状を呈するが、幅5～30cm、間隔は10～50cm程度で歓の痕跡と考えるには貧弱すぎる。よって、この盛り上がりは耕作の際に鋤によって掘り込まれなかった部分が歓状に遺存したもので、その両側の鋤溝の跡に、後世の淡赤褐色粘質土が覆いかぶさることによって前述のような状況に至ったものと解釈される。

1区において1本だけ東西方向の痕跡が認められたが、これは一枚の耕作面を複数の単位に分割して耕す際の境であろうと考えられる。なお、この中世耕作面1については検出時の状況を記録するだけにとどめ、鋤溝の跡を掘り上げる作業は行っていない。



第8図 完掘時見取図

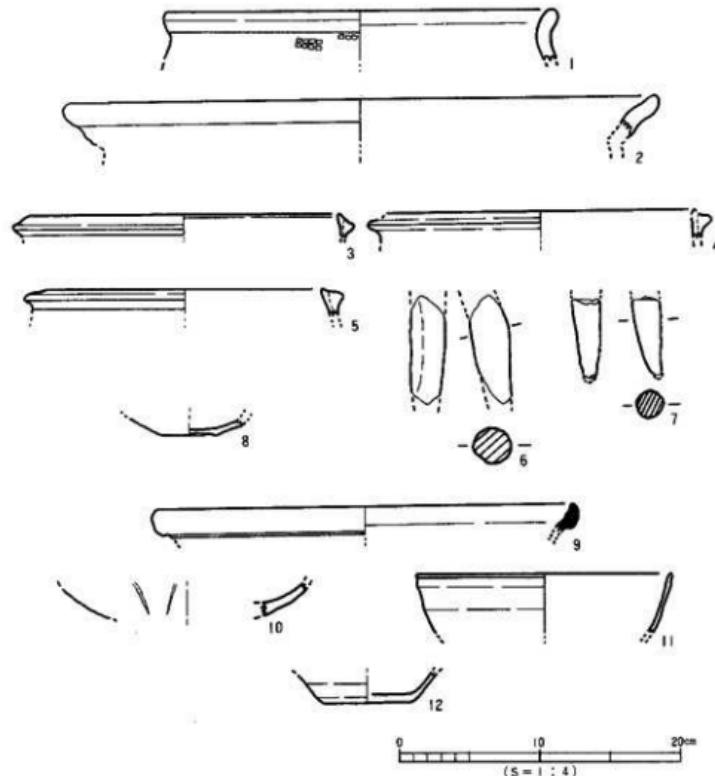
造構と造物



第9図 造構面・造構配置図

道後今市遺跡 9次調査地

遺物：大半のものが焼化し得ない土師器の破片である。水流や耕作の影響のため遺存状態は極めて悪い。1は、瓦質の甕の口縁部と考えられるもので、外面に格子タタキ目が施されている。亀山焼である可能性もあるが磨滅が激しく不明である。2は、土師器鍋の口縁部破片。3～5は、土師器羽釜の口縁部破片で、いずれも縁帶がほとんど口縁端部と一体化しており、耕作面2出土の同器種のものと比べてかなり退化した様相を示す。6と7は同じく羽釜の脚である。3～5のような口縁部に対応する脚がこの6、7のような形状を呈するものと考えられる。8は瓦器檻の底部である。高台はきわめて退化しており痕跡をとどめるのみである。9は、いわゆる東播系須恵器の片口鉢口縁部である。魚住焼最終末段階に属するものである。10は、鍋蓮弁が施された青磁碗の底部付近と考えられる。12は白磁の底部である。



第10図 遺構面I出土遺物実測図

10、12とともに中国龍泉系の流れを引く窯で生産されたものの特徴を示している。

以上が中世耕作面1出土の遺物の内容である。いずれの遺物も14世紀代の特徴を示しており、15世紀代まで下るものは一点も含まれていない。

## 2) 中世遺構面2 (第11~14図、図版2~4・8)

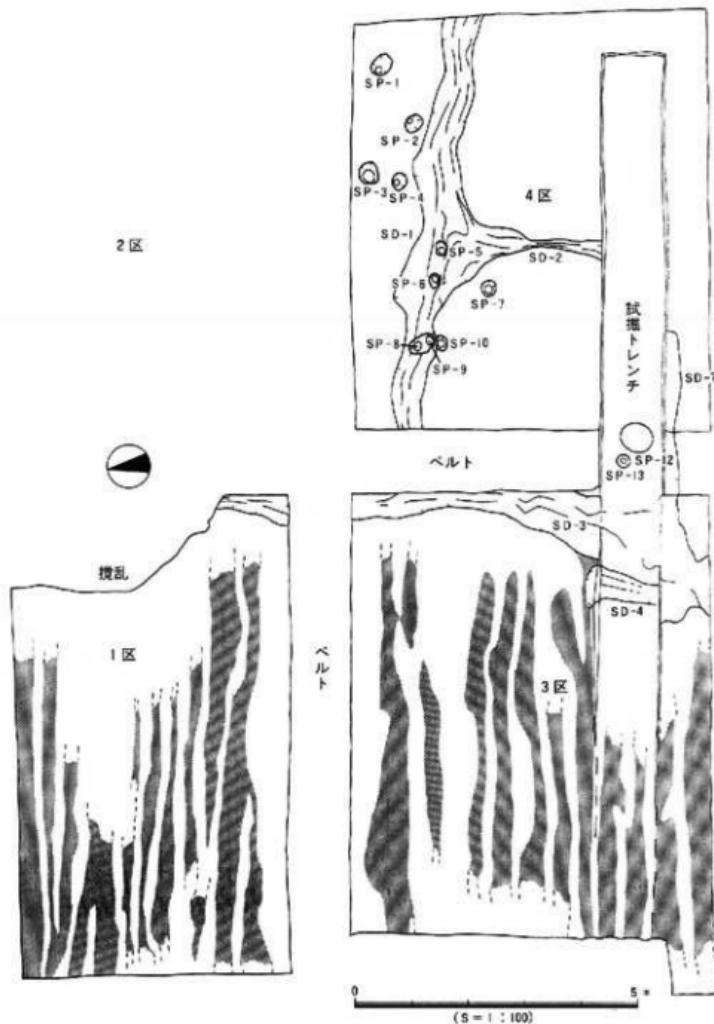
遺構: VII層(灰褐色粘質土)上面付近において溝5条、柱穴10基と鈎溝痕跡を確認した。鈎溝は、1区と3区において東西方向に25本検出された。これらの鈎溝は、発掘区中央部を南北に走るSD3の手前およそ30~50cmのところで止まっており、東側では一本も検出されていない。一方SD3の東側では柱穴10基が確認された。ただし、うち4基については、4区を東西に走りSD3に合流するSD1の底で検出されており、この遺構面に伴うものであるのか不明である。以上の状況から、遺構面2の段階においてはSD3の西側には耕地、SD3の東側には建物の存在が想定できる。SP1、SP4については底に扁平な円碟が置かれているが、他の柱穴には石は存在しない。柱穴の配置状況から判断する限り、どのような形状の建物が存在していたのか復元することはむずかしいが、耕地に隣接した小規模な作業小屋程度の建物を想定しておきたい。

溝はSD1、SD2、SD3、SD5、SD7の計5条が検出された。そのうちSD1~3と7については、連続しており一連の遺構を形成している。試掘トレンチによる削平のためはつきりしないが、SD1、SD3、SD7、SD2によって囲まれた4m四方ほどの空間が存在したこととも考えられる。溝は、そのいずれも多量の炭化物を含む暗灰褐色粘質土で埋まっている。この遺構面出土の遺物の多くのものがこの埋土からの出土である。

溝に関連して、4区SD1において集石遺構が検出された。SD1を中心として東西約1.7m、南北約0.7mの範囲に径10~15cm程度の花崗岩、砂岩、変成岩が集中して分布しているもので溝の中央に石が10個ほど集中する部分がある。この部分では花崗岩の板石が立った状態で検出されたり、扁平な円碟が重なった状態が認められ、さらに上師器小皿や砥石片、くぎなどの遺物が集中するなど人為的な要素が濃厚である。この石の集中部分では、石の下に径10cm程の土師器の皿が伏せた状態で溝底に接する位置に置かれていた(図化不能)。集石は、この皿を覆うように配置されたもので石の集中部分からは離れて検出された。他の石についても元はこの集中部分付近に置かれていたものと考えられる。この遺構は明らかに人為的に形成されたものであるが、いかなる意味を持つものであるのか不明である。周辺からは土師器の羽蓋片がまとめて出土していること、集石部分では炭化物が高密度に存在することなどから火を使用した可能性も考えられる。しかし、このような状況が何らかの祭祀的行為によって形成されたものか、あるいは日常的な行為に伴うものであるのか、現時点では断定することはできない。

4区南端の試掘トレンチに接した部分でSX2が検出された。この土壤の周辺にはSD1

道後今市道路9次調査地

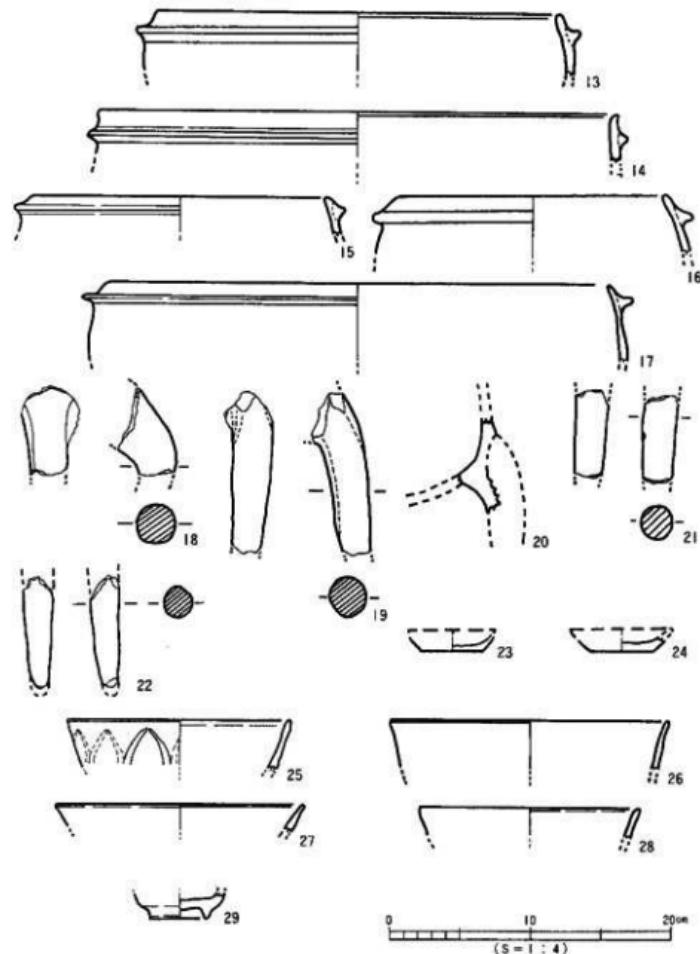


第11図 造構面2造構配置図

同様、炭化物を含む暗灰褐色粘質土が分布しており、羽釜や須恵器片口鉢の破片が出土している。試掘時の削平とSX2の存在によってその形状は不明であるが、4区南端のこの付近に溝が存在していた可能性が高い。なお、このSX2は試掘トレーンによって削平されておりその正確な形状及び埋土の堆積状況等は不明である。

**遺物：**上層の遺構面1に比べて遺存状態は良いものの、その多くが焼化し得ない土師器の破片である。13~17は土師器羽釜の口縁部である。17は土師質、13~16は瓦質を呈している。4点とも降帯が口縁端部から下がったところに貼り付けられており、遺構面1出土の3~5に比べて古相を呈している。18~22は、同じく羽釜の脚である。18と19は太くしっかりしており比較的古相を示す。これら羽釜の胎土には、径0.5~3mm程度の白色砂礫が多い量に含まれている。このことは在地産土師器の特徴の一つと考えられる。23は土師器小皿、24は瓦器小皿である。いずれも磨滅が激しく底部の処理方法等は不明である。25~27は青磁碗口縁部、28は白磁碗口縁部、29は青磁碗底部、25には蓮弁が刻まれているが立体的ではなく鏽も消滅している。31~35は、東播系須恵器の片口鉢である。30はひねりが加えられており片口部分にあたるものと考えられる。これらの須恵器は遺構面1出土の9同様、魚住赤根川支群で焼かれたものと考えられるが、30については赤根川支群のものとはその形態が若干異なっており、別の系統のものである可能性もある。35は石英粗面岩製の砾石である。研磨が進んだため中央部分で折れたものと考えられる。伊予郡砥部町砥山産のいわゆる「伊予砥」の中でも

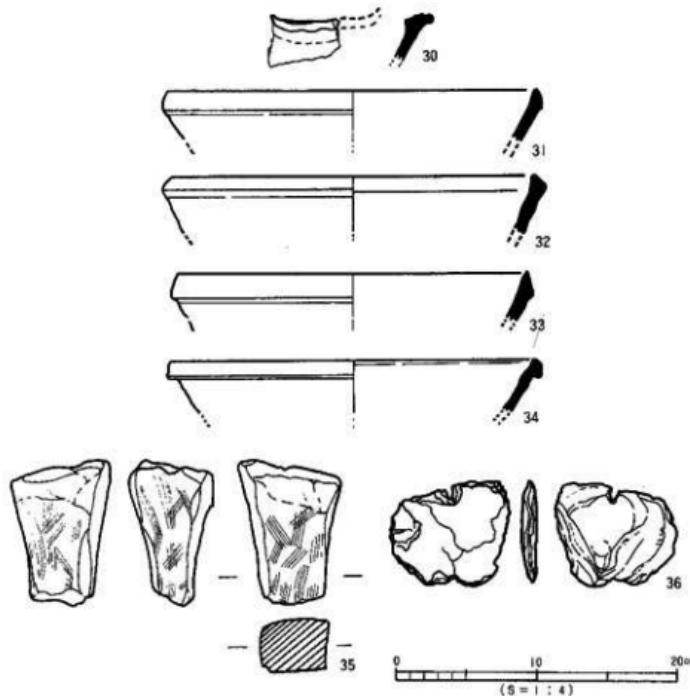




第13図 遺構面2出土遺物実測図(1)

優品と考えられる「シロ」と呼ばれる石材を使用している。砥石はそのきめの細かさのうえで粗砥、中砥、仕上砥の3種類に分類されるが、一般的に伊予砥は中砥に属する。これは農具、刀子などを研ぐ際によく用いられる砥石であることから、本遺跡の立地条件から判断して、農具を研ぐための砥石であったと考えられる。36は緑色片岩の不定形剝片に抉りを2カ所施した「抉り入り状磨滅石器」と呼ばれるものである。弥生時代の石器と考えられるもので、明らかに混入品であると判断される。片面には自然面を残し長辺側に一对の抉りが施されており、抉り部分の形状を観察すると、剝片の剥離面側の抉り部分に磨滅痕跡が認められる。細い棒状のものを削るために使用された石器と考えられている。

以上が遺構面2出土の遺物の内容である。いずれの遺物も13世紀後葉から14世紀前葉にかけての時期に属するもので、遺構面1出土の一群と比較すると、明らかに古い段階のものである。



第14図 遺構面2出土遺物実測図(2)

## 3) 中世遺構面3 (第15~17図、図版8)

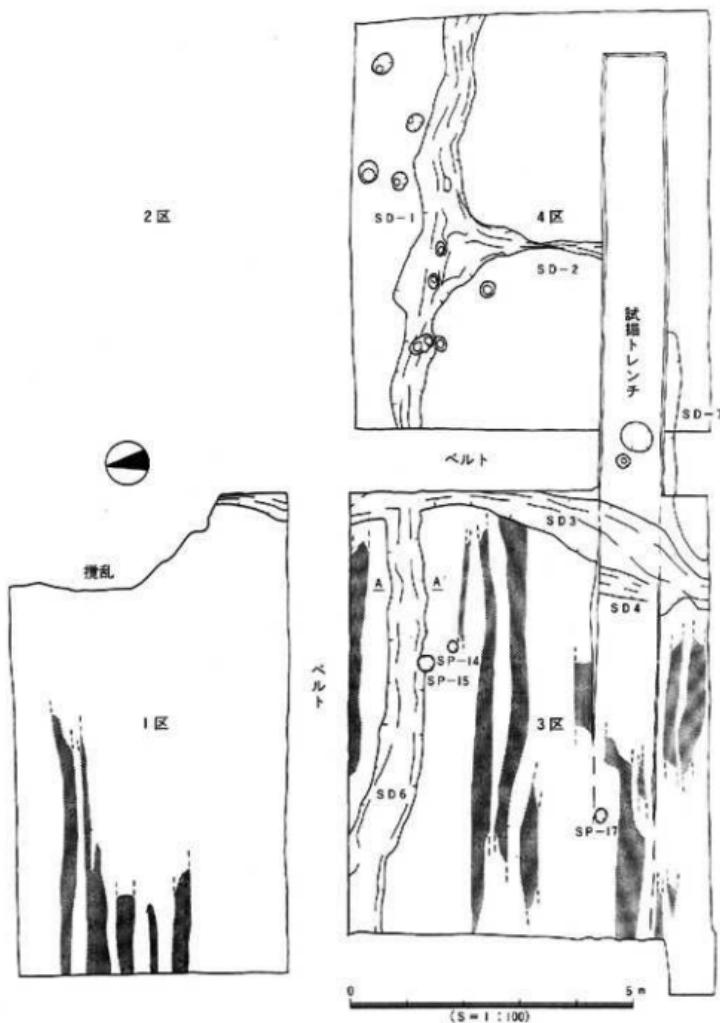
遺構：Ⅳ層(明灰褐色砂)上面付近において溝2条、柱穴11基と鋤清痕跡を確認した。SD4は溝であると考えられるが、試掘トレンチによって削平されているため詳細は不明である。その堀込み面はSD3よりは明らかに下のレベルで検出されており、遺構面3に属するものと判断した。SD6は遺構面2のSD1の延長線上に存在している。東西に走るSD6、SD1とSD4が存在していたものが、つぎの段階に至るとSD6、SD4が廃絶し、SD6の延長のSD1のみが引き続いて使用されるとともに、新たに南北に走るSD3が掘込まれたものと考えられる。SD6、SD4とともにその埋土中には炭化物が多く混じり、土器等の遺物の小片も多く含まれている。この状況は遺構面2のSD1などと同様である。なお、4区については遺構面2の調査終了後にSD1、SD2の下面よりも下のレベルまで掘込んだことにより、3区のSD6の延長に相当する部分の検出はできなかった。よって、SD6の延長部分が4区でどのように展開していたのか現状からは復元し得ないが、おそらくSD1そのものが対応するものと考えられる。

遺構面3では、3区と4区において計13基の柱穴を確認したが、建造物の構造を復元するには至らなかった。SP21から土師器羽釜口縁部破片が出土した。この遺物から、遺構面3の年代を遺構面2とはほぼ同様の13世紀末にあてはめることができる。

上層の遺構面2同様、東西方向の鋤清の痕跡が1区で7条、3区で10条検出された。形状は、上層で検出されたものと同様である。4区にもこの鋤清が及んでいた可能性もあるが、上層の遺構面2同様、4区には柱穴が多く認められることから、耕作面でなく建物が建っていたものと考えられる。

遺物：上層の遺構面1、遺構面2同様、磨滅が激しく図化し得ない土師器破片が大半を占める。37は土師器羽釜、38は瓦器羽釜の口縁部である。ともに遺構面2出土の12~15の形状とほとんど同じで、隆帯が口縁端部から下がった位置に施されている。37はSP21中からの出土で、その遺存状態は、当遺跡出土土師器の中では最も良好である。外面にはススの付着が認められる。胎土中に径0.5~3mm程度の白色砂礫が多く含まれているが、これは当遺跡出土土師器に共通する特徴である。39は土師器羽釜の脚である。これも、遺構面2出土のものと形態上特に差異は認められない。40は土師器鍋の口縁部、41は土師器甕の口縁部である。42~44は土師器小皿、45~47は瓦器小皿である。いずれも磨滅が激しく底部構造は不明である。45は、いわゆる和泉型の瓦器小皿で13世紀代のものと考えられる。48は束縛系須恵器の片口鉢口縁部である。正線状の口縁部の構造は、基本的には上層の遺構面2出土の29~33と変わりはない。49は、須恵器の甕あるいは長頸甕の頸部付近と考えられる。香川の十瓶窯産の藏骨器の可能性もあるが、その詳細は不明である。50は須恵器の大甕の刷部片である。胎土中には、径0.2~1mm程度の白色細砂ないし中砂が多く混じっており、この状況は49も同様である。

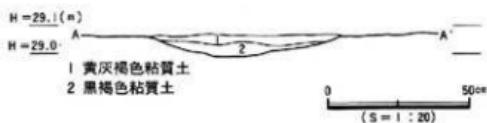
遺構と遺物



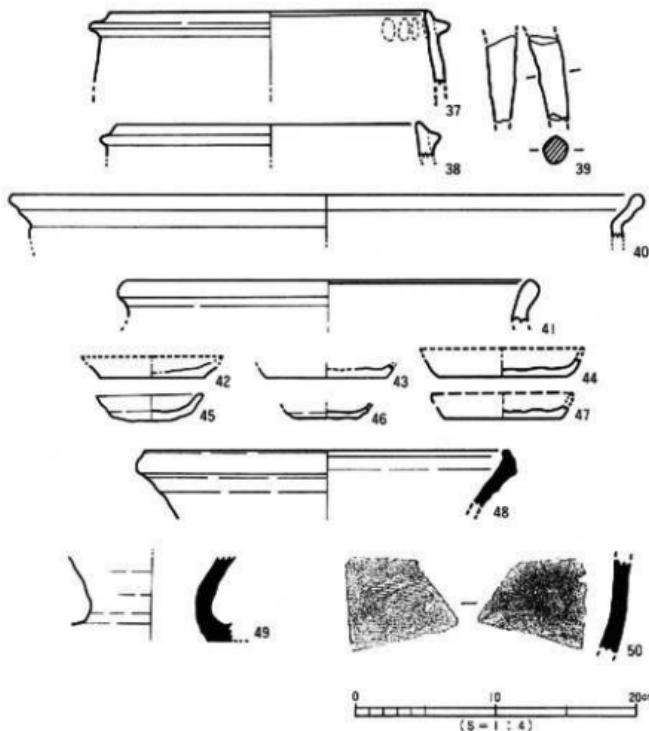
第15図 遺構面3 遺構配置図

道後今市遺跡 9 次調査地

以上が遺構面 3 出土遺物の概要である。年代的には、遺構面 2 とは同時期の13世紀後葉から14世紀前葉に納まるものと考えられる。ただ、遺構面 2 で出土した青磁、白磁が一点も確認されなかったことや、瓦が出土した点など相違点も指摘できるが、基本的には遺構面 2 と遺構面 3 の間には、遺物から見る限り時期差は無いものといえる。



第16図 SD 6断面図



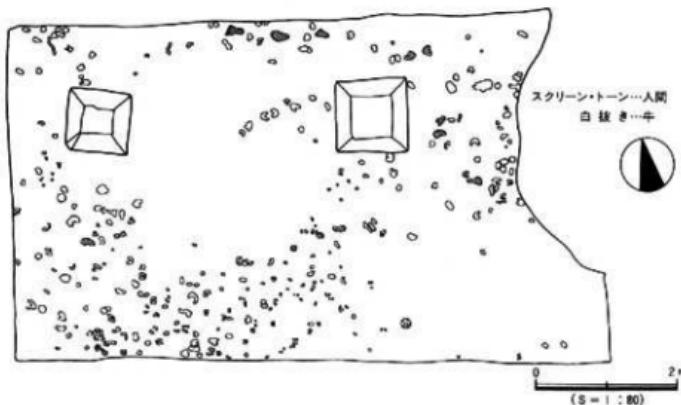
第17図 遺構面 3 出土遺物実測図

## 4) 中世遺構面4 (第18・19図、図版4~6)

遺構：Ⅹ層（暗青灰色粘質土）上面において、人と牛の足跡を検出した。これはⅩ層上面の足跡の直上にⅨ層（明灰褐色砂）が堆積したことにより遺存したものである。足跡は1区のほぼ全面にわたって分布している他、4区の南壁沿いにおいても確認した。なお、3区と4区の大半の部分については当初、これが足跡であることに気付かず掘り下げてしまったため確認できなかった。しかし、2区北壁沿いの試掘トレンチ北壁や4区東壁などで、Ⅹ層上面に足跡とみられる凹凸が明瞭に確認できたことから、発掘区域のほぼ全面にわたって分布していたものと考えられる。

1区では、人のものが10~15個、牛のものが140~160個確認できたが形状が明瞭でないものが多く、正確な数を断定することはできない。足跡は大きく分けて北東寄り部分と南西寄り部分の2カ所で密度が高い状況が認められる。大半の足跡についてはどの方向に歩いたもののか復元し得ないが、1区北沿いに人間が東南東から西南西に向かって歩いていったと考えられる部分がある。この部分では、牛の足跡も同じ方向に向かっている形跡が認められることから、水田の耕作の際に牛に道具を引かせて人間が後からついて行った状況を想定できる。

人の足跡は、完全に遺存しているもので長さ約23cm、最大幅約11cmほどで、長さは現代人と比較するとやや小さいが、つま先の幅がかなり広いことが特徴である。特に親指の大きさは現代人の倍ほどもあり、非常にがっしりとした印象を受ける。裸足で生活していた古代人の特徴を良く表しているといえよう。



第18図 遺構面4 足跡検出状況（1区）



第19図 人間と牛の足跡

遺物：土師器の小片が1点出土しているが磨滅が激しく復元は不可能である。このように遺物を伴わなければ、この遺構面の時期の特定はむずかしいが、後述するようにさらに下層から10世紀に属すると考えられる遺物が出土していることから、10世紀から13世紀末までの間に納まるものと推測できる。

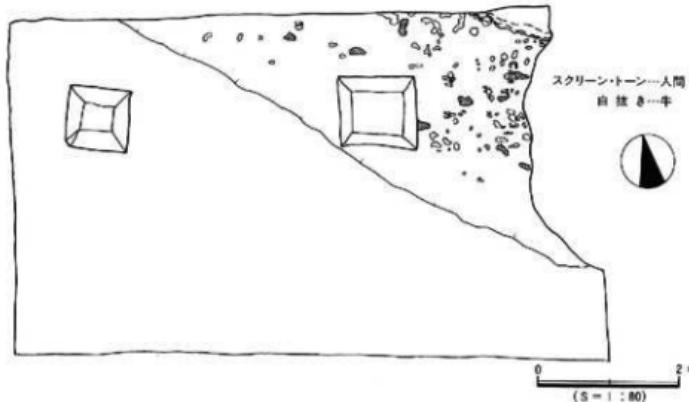
##### 5) 中世遺構面5（第20図、図版6）

遺構：Ⅹ層（灰褐色粘質土）上面において、人と牛の足跡を検出した。これはⅪ層上面の足跡の直上にⅫ層（灰白色砂）が堆積していたことにより遺存したものである。形が明瞭でないものが多く正確な数は決めかねるが、人のものが5～10個、牛のものが20～30個前後遺存している。上層の遺構面4では、1区のほぼ全面にわたって足跡が分布していたが、この段階に至ると北東部分だけにしか認められない。1区の足跡が分布しない範囲は、基本的には粘質土ではあるが、多量の花崗岩の小礫が混じっており、足跡が分布する範囲の灰褐色粘質土とは明瞭に区分できる。風化花崗岩の小礫が混じるため、土壤は酸化して赤褐色を呈する部分もあり、特に灰褐色粘質土に接し北東側へ落ち込んで行く部分では赤化が顕著である。以上の状況から遺構面5においては、水田として耕作が行われていたのは1区の北東の一角だけで、南西側は地山であったと判断した。地山が北へ落ち込んで少し低くなった場所に水田を営んでいたものと考えられる。特に人間のものは、その主軸方向がこの地山の落ち込みのラインに対してほぼ平行の方向に向いていることから、水田の端に沿って歩いた様子がうかがえる。

遺構面5と上層の遺構面4における足跡の分布状況を比較検討すると、遺構面5で地山落ち込みラインよりも北の範囲に足跡が分布している状況が、遺構面4において1区北東部分に足跡集中か所がある

点と一致していることに気付く。足跡の方向も、東南東から西北西に向かっており、両造構面ともに共通である。これらの事実から、造構面5における土地利用形態が、造構面4においても踏襲された状況を想定することができる。畦畔の存在を確認できなかったことから断言はできないが、造構面5で確認された地山落ち込みのラインに平行な何らかの土地を区画する造構が調査区外の至近距離に存在している可能性が高いものと考えられる。

遺物：まったく出土していない。



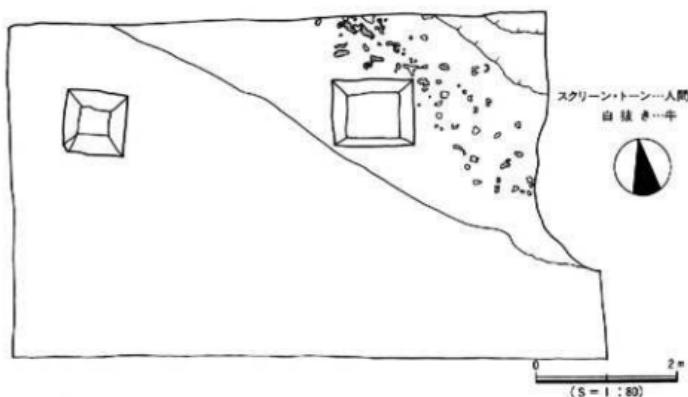
第20図 遺構面5 足跡検出状況(Ⅰ区)

#### 6) 中世遺構面6 (第21図、図版7)

遺構：Ⅲ層（灰褐色粘質土）中において、人と牛の足跡を検出した。上層の造構面4、5同様粘質土中の足跡直上に洪水砂が覆うことによって遺存したものであるが、この造構面6直上の洪水砂は極めて少量で、調査区の全域で安定的に存在しているものではないため、当調査区の壁面において確認するには至らなかった。本来ならば、造構面5とは完全に分層して扱うべきところであるが、以上のような経緯によりⅢ層中の扱いとしておく。基本的な状況は造構面5の様相と同様である。人の足跡が5~10個、牛の足跡が20~25個前後確認できるが、形状が明瞭でないものが多いため正確な数は不明である。造構面4、造構面5同様、人の足跡の主軸は西北西を向いており、この面においても地山落込みのライン沿いに歩いた様子を復元することができる。

遺物：まったく出土していない。

追後今市遺跡9次調査地



第21図 遺構面6 足跡検出状況(Ⅰ区)

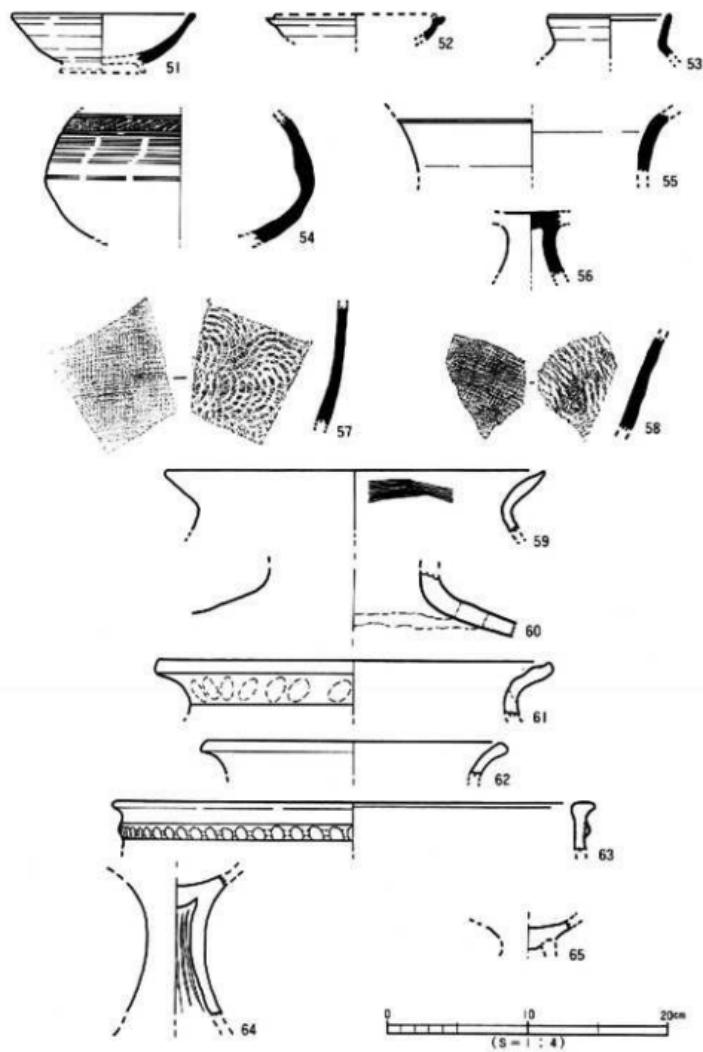
(2) その他の遺構と遺物 (第22~24図)

本調査地は前述の通り基本的には中世の遺跡であるが、下層の砂礫層から、弥生時代から古代に至る時期の遺物が出土している。この砂礫層は水流によってたびたび擾乱を受けており、これらの遺物は層位的に出土しているわけではない。遺構は水の流れによって形成された『砂礫堆』のみで、人為的に造られたものは存在しない。以下、簡単にその概略を記述する。

**遺構：**3区において、川の流れによって形成されたと考えられる砂礫堆が検出された。砂礫堆とは、川の激しい流れの部分で、流されてきた土砂が盛り上がった形で堆積したものである。砂礫堆を形成する礫の礫径平均値は65mmで、50~60mmのものが全体の43%を占める。最大礫の長径は約100mmである。礫種は花崗岩、砂岩及び変成岩から成り、それぞれ52%、27%、21%の割合で構成されている。礫の円磨度は、5.5前後である。これらの状況は、Ⅲ層（上部礫層）とその内容が同じであることから、Ⅲ層が川の流れによって二次的に堆積した結果、この砂礫堆が形成されたものと考えられる。なお、この砂礫堆及びⅢ層の構成礫は、石手川本流の上流地帯から流されてきた状況を示している。

**遺物：**本調査地出土の中世に属さない遺物のすべてが、砂礫堆及びⅢ層（上部礫層）中から出土している。砂礫堆も上部礫層とともに二次的に擾乱を受けていることから、出土遺物の内容も弥生前期から10世紀前後で一致しているので、両者を特に区別することなく記述するものとしたい。

遺構と遺物



第22図 砂疊層出土遺物実測図 (I)

51は、緑釉陶器高台付碗である。暗青灰褐色を基調として、淡緑褐色の釉がかかった硬質の緑釉陶器である。高台付近の形状が明らかでないことから詳細は不明であるが、9～10世紀頃のものと考えられる。51は砂礫堆上面付近から出土していることから、上層の遺構面4～6の年代を考えるうえで、その年代の上限を決める資料となる。この緑釉陶器の年代を10世紀に比定するならば、人と牛の足跡が多数確認された遺構面4～6の年代は、10世紀を上限とし、遺構面3が所属する13世紀後葉を下限とする期間に納まることになる。

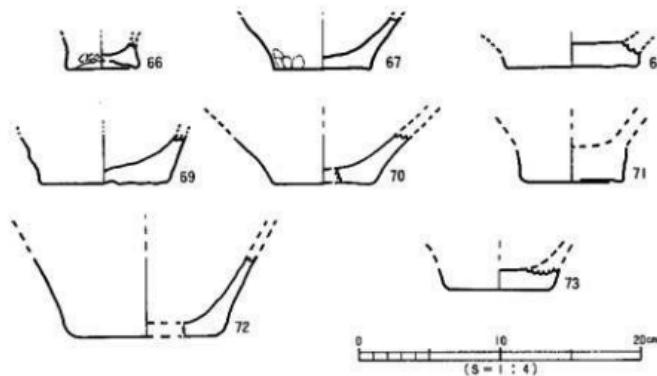
52は須恵器環身の口縁部片、53は短頸壺の口頭部である。52は6世紀中葉、53は7世紀中葉のものと考えられる。54は台付長頸壺あるいは短頸壺の胴部、55は壺の頭部とともに6世紀後葉のものと考えられる。56は高环の脚部である。6世紀後葉ないし7世紀前葉にかけての時期のものと考えられる。57、58はともに大壺の胴部片である。

以上、須恵器はすべて6世紀から7世紀に属するものである。

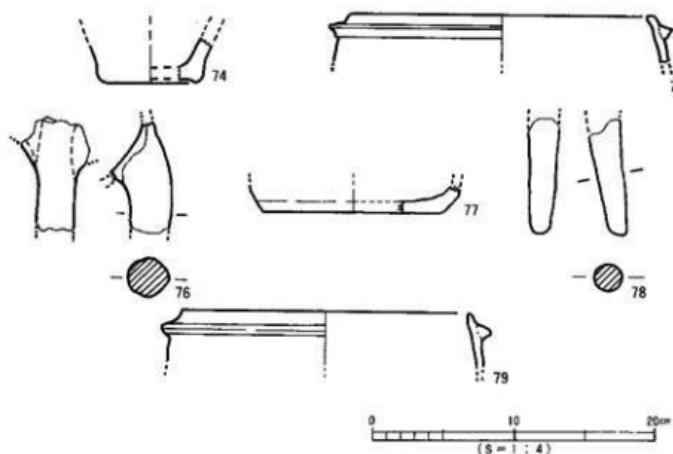
次に弥生土器と土師器の概要を記す。

確実に土師器と判断できるものは59のくの字口縁の1点のみである。外面にはナテ調整、内面には刷毛目調整が施されている。古墳時代中期頃のものと推定される。

弥生土器は、その大半が前期あるいは中期に属するものである。60は壺の頭部である。弥生土器と考えられるが土師器の可能性もある。61は弥生時代前期の壺の口頭部である。頭部の粘土紐接合部分で段を成し、屈曲部分の外面には指頭圧痕が認められる。62は壺の口頭部と考えられる。時期は不明であるが比較的古手のものであろう。63は中期前半頃の壺の口縁部である。64は中期に属する可能性が高い高环の脚、65は高环の脚の基部付近である。



第23図 砂礫層出土遺物実測図(2)



第24図 その他の遺物実測図

66は弥生時代後期初頭の壺の底部で、凹みの度合いはそれほど大きくなないことなどから後期のものと判断した。67は2区北壁沿いの試掘トレンチから出土した弥生前期の壺底部である。比較的径が大きいことから、前期に属するものと判断した。68~70はいずれも平底で壺の底部と考えられる。67同様、前期のものであろう。71~73も壺の底部である。71は側面に指頭圧痕が認められる。74も同じく壺の底部と考えられるが僅かにくほんでいる。

最後に、1991年8月の試掘の際の出土遺物と本調査の際の出土地点が明らかでない遺物について簡単に記す。75は土師器羽釜の口縁部である。隆帯の位置は低く古手の様相を呈する。遺構面2~3に属するものと考えられる。76は土師器羽釜の脚部である。太くしっかりとした造りで古手のものと考えられる。77は備前焼の鉢底部と考えられるが詳細は不明である。本調査では、調査対象としなかったⅢ~V層から出土した可能性が考えられる。以上3点は試掘時の出土遺物である。78は土師器羽釜の口縁部。隆帯の位置は低くしっかりしており、遺構面2~3に属するものと考えられる。79は同じく羽釜の脚部。これらは、おそらく4区から出土したものと考えられる。

### (3) 砂礫層構成疊の状況

今市9次の大発掘調査によって明らかとなった疊層の状況を簡単にまとめておきたい。

今市9次においては、疊層は径20cmほどの巨疊で構成される下部疊層と、径7cm程度の疊及び粗砂ないし中砂から構成される上部疊層の2層に区分される。両層とも、調査範囲のは

は全域にわたって分布しているものと考えられる。上部礫層については、第3章でも述べた通り堆積後もたびたび水による擾乱を受けた状況が認められ、弥生時代の遺物を多く包含している。3区では、この上部礫層の一部が激流によって押し流され土手状に盛り上ったいわゆる砂礫堆と呼ばれる構造が認められた。遺物は特にこの砂礫堆の上部10cm程の部分から集中して検出された。砂礫堆が形成された時期は、これらの遺物の状況から古墳時代後期以降と考えられる。

次に、採集した砂礫層の礫のデータを検討する。まず、礫種についてであるが、花崗岩、砂岩、変成岩の組み合せは、この地域では石手川上流地域に特徴的な礫種構成である。また、下部礫層サンプルの最大礫の長径が、28~33cmと大きいことは、これらの礫が水量の豊富な川の流れによって流されてきたことを示している。以上の事実から、下部礫層構成礫は石手川本流によって運ばれてきたものと考えられる。また、上部礫層サンプルについても、その礫種が基本的に下部礫層のものと共通しており、石手川上流から運ばれてきたものとみられる。おそらく、一度堆積した下部礫層が二次的に洗い流されて、再度堆積したものが上部礫層であろうと考えられる。弥生土器などの遺物は、その際に混入したものであろう。以上、今市9次の礫層の状況を検討した。今後は、市内一円にわたってこのような松山平野に関する地質学的情報を蓄積することによって、各遺跡の立地環境を有機的に結び付けていく作業をおこなう必要がある。

#### 4. 自然科学分析（第25図）

本調査に際して、土壤サンプルを採取して、(株)古環境研究所（埼玉県大宮市上屋1795-24）に委託してプラント・オパール分析と花粉分析を行った。

以下、分析結果の概要をその報告の一部を抜粋する形で提示しておく。

##### 〔1〕プラント・オパール分析（抜粋）

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後世のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準に基づいて、稻作の可能性について検討を行った。

1区の西壁地点では、V層、VI層、VII層、VIII層、IX層、X層について分析を行った。その結果、すべての試料からプラント・オパールが検出された。このうち、V層、VII層（鉄溝痕跡検出）、X層下部では密度が6,600~9,200個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

X層上部（足跡検出）でも密度が3,900個／gと比較的高い値であることから、稲作の可能性は高いと考えられる。その他のVI層、VII層（跡溝痕跡検出）、X層（足跡検出）では、密度が3,000個／g以下と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

足跡が検出されたX層では、4区の東壁地点、1区の西壁地点、南壁地点、北壁地点、北西壁地点についても分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オバールが検出された。密度はいずれも4,000個／g前後と比較的高い値である。これらのことから、X層の時期には調査区の比較的広い範囲で稲作が行われていたものと推定される。

なお、イネのプラント・オバール密度が低い層については、その原因として上記の混入によるもの以外にも、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②洪水などによって耕作土が流出したこと、③土層の堆積速度が速かったこと、④稲藁の大部分が水田外に持ち出されていたこと、⑤採取地点が畦畔など耕作地以外であったこと、⑥稲の生産性が低かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

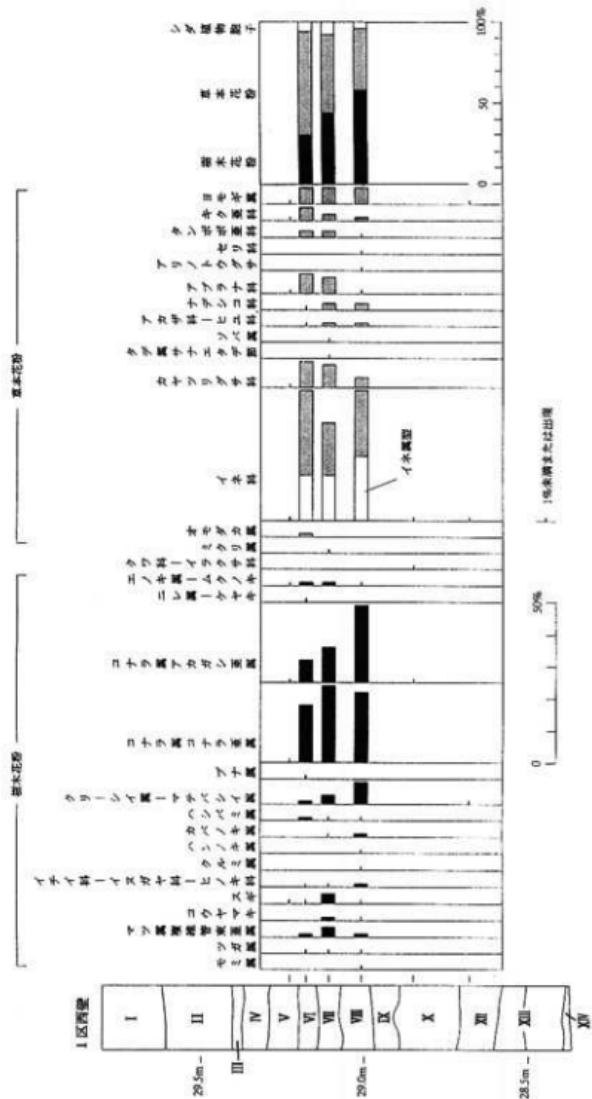
## [2] 花粉分析(抜粋)(第25図)

以下、花粉粒が比較的多く検出された1区西壁地点のVI層、VII層、VIII層を主に考察する。VIII層では比較的森林が多く、周辺地域にはナラ林（コナラ属コナラ亜属）・カシ林（コナラ属アカガシ亜属）・シイ林（クリーシイ属一マテバシイ属、ここでは地域的なことを考慮するとシイ林が妥当）の森林が分布していたとみられる。カシ林とシイ林は自然林とみなされ、VII層、VI層にかけて上位に向かって減少する。ナラ林は変化せず、二次林であったと推定される。

農耕的要素としては、III層ともイネ属型の花粉が約15~20%の出現率を示しており、VI層、VII層、VIII層が水田作土の累積とみなされ、これらの層が水田であったとみなされよう。VI層、VII層ではアブラナ科の花粉が出現し、アブラナ科などの畑作も示唆される。コナラ属アカガシ亜属・クリーシイ一マテバシイ属の花粉の減少に呼応して、アブラナ科とカヤツリグサ科・キク科が増加するため、VI層、VII層では自然林が減少し、アブラナ科の植物栽培に示される畑地が増加したと推定される。

残る1区西壁地点のV層、X層、XII層及び4区東壁地点のX層の各層は花粉遺体がほとんど含まれておらず、土壤生成作用のために花粉粒が分解したか、堆積速度が速かったか、堆積時に淘汰されたかのいずれかであろう。なお、乾田や畑地においても土壤生成作用のため、植物遺体は分解しやすい。

道後今市遺跡 9次調査地



## 5. 小 結

今回の調査によって、中世段階の道後城北地区の景観を復元するための資料をまたひとつ加えることとなった。調査結果から、この付近が当時、水田あるいは畠であったことが想定でき、さらにそれら耕作地に隣接した小規模な小屋の存在も復元し得る。この結果は、過去に行われた8次にわたる調査の成果とも一致するものである。今回の調査に際しては、自然科学分析を併せて行ったが、下層から上層に向かうにつれて樹木花粉の量が減少する一方、イネ科が優占し、さらに栽培植物であるアブラナ科、キク科が徐々に増加する状況が明らかとなった。この結果は、道後城北地区に13世紀ころから本格的に人の手が入ることによって、生産基盤としての開発が進められたことを示すものと評価できる。このようなことを背景として、14世紀にいたって河野氏が当地域に移り、道後湯築城に拠点を設ける事となるものと理解できよう。

### 【文 献】

- 松山地学会 1980 「松山市付近の地質図」 務トモエヤ商事
- 岡田 俊彦 1985 「道後今市道路」 関愛媛県埋蔵文化財センター・愛媛県教育委員会
- 宮本 一夫 1989 「鷹子・樽味遺跡の調査」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 宮本 一夫 1990 「文京遺跡第8・9・11次調査—文京遺跡における繩文時代遺跡の調査—」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 愛媛大学法文学部考古学研究室 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 梅木 謙一 1991 「松山大学構内遺跡—第2次調査」 松山市文化財調査報告20 松山大学 松山市教育委員会 松山市立埋蔵文化財センター
- 上田 真 1991 「南江ノ瀬遺跡」 松山市文化財調査報告22 松山市教育委員会 松山市立埋蔵文化財センター
- 宮本 一夫 1991 「文京遺跡第10次調査—文京遺跡における弥生時代遺跡の調査—」 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 栗田 茂敏 1991 「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」 松山市教育委員会 松山市立埋蔵文化財センター
- 梅木 謙一 1992 「祝谷アイリ遺跡」 松山市文化財調査報告書25 関松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 梅木 謙一、宮内 慶一 1992 「道後城北遺跡群」 松山市文化財調査報告書30 関松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター



### 第 3 章

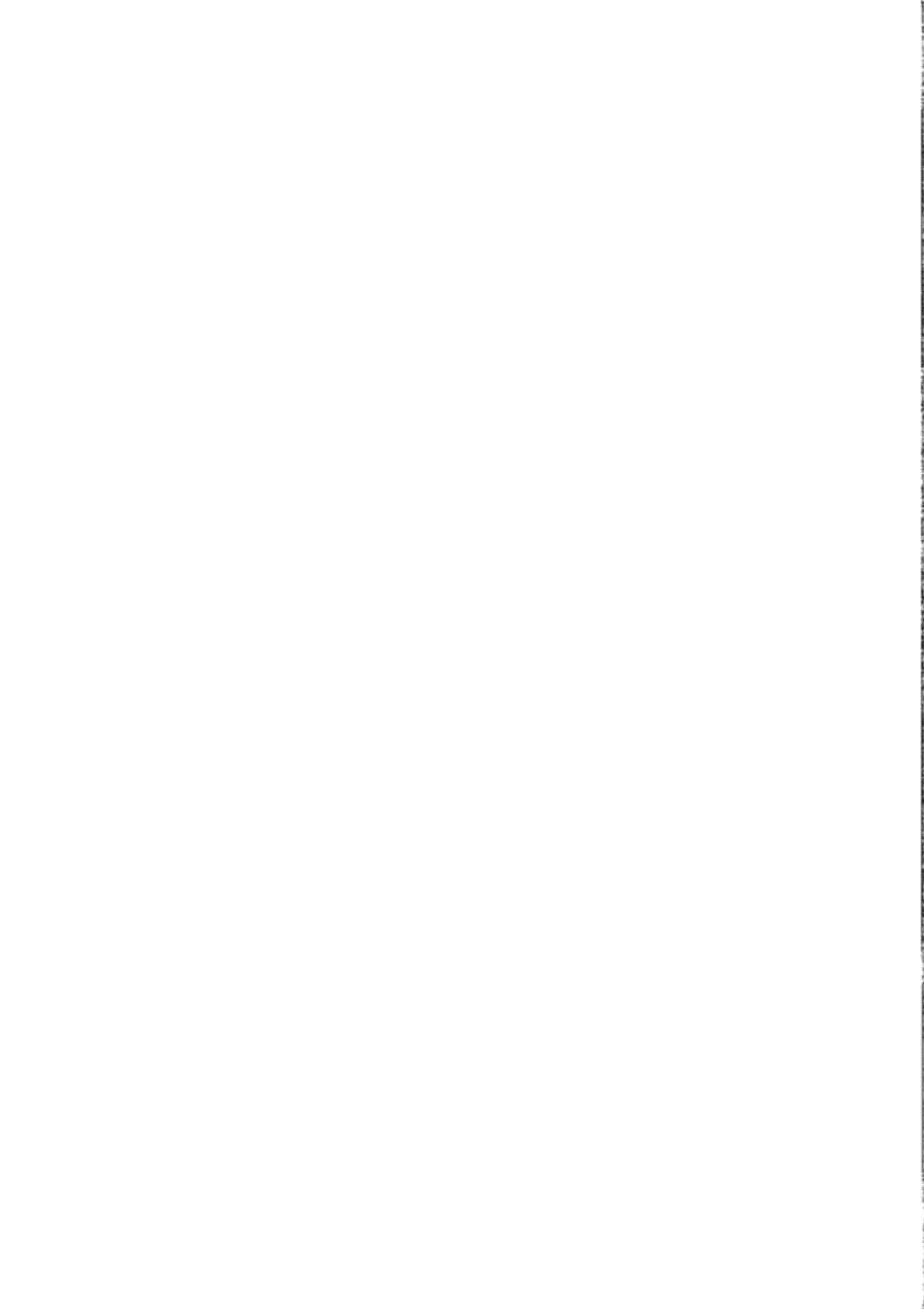
# 道後鷺谷遺跡

ドウ

ゴ

サギ

ダニ



## 第3章 道後鷺谷遺跡

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯 (第26回)

1987(昭和62)年、道後鷺谷町5-32において宿泊施設建設に伴う工事を実施中に(図版9)、弥生時代中期の土器が発見され、松山市教育委員会文化教育課に届け出があった。文化教育課は、ただちに現地にて立ち会い調査を行った。調査の結果、表土下約16mまで開発が進んでいたが、その下は遺物包含層が一部残存しており(弥生土器を包含する土層を検出)、当地に遺跡が存在することを確認した。立ち会い調査の結果を受け、文化教育課と原団者は発掘調査について協議を行った。発掘調査は、遺跡が消失する地域に対し、当該地の遺跡の性格と周辺地域を含めた弥生集落の構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、原団者各位の協力のもと昭和62年5月に調査を実施した。

調査地は、既に土壤の剥ぎ取り作業が行われ、建設工事が進行するなか実施された。よって、残存する土壤を対象に遺構・遺物の検出を行ったため、地表下約16mの間にについての資料は得ることができなかった。

なお、本調査に関する報告は「松山市埋蔵文化財調査年報II」(松山市教育委員会 1989)にて概要報告されているが、その後の室内調査による検討より一部変更した部分がある。ただし、出土遺物の詳細についての変更であり、その他の事項については変更はない。

#### (2) 調査組織

調査地 松山市道後鷺谷町5-32

遺跡名 道後鷺谷遺跡

調査期間 1987(昭和62)年5月11日～同年5月30日

調査面積 200m<sup>2</sup>

調査協力 勝ホテル椿館

調査担当 宮崎 泰好(現 伊予郡砥部町教育委員会)

調査作業員 相原 浩二(現 勝松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター)

高尾 和長(現 )

大森 一成(現 )ほか

(註) 本文の執筆は、3-(2)-7)は山之内が、その他は椿木が担当した。なお、本文執筆にあたり西尾幸則、相原浩二、高尾和長、大森一成の各氏には助言をいただいた。

道後鷲谷遺跡



第26図 調査地位置図

(S = 1 : 5,000)

## 2. 層位 (第27図)

本調査地は、丘陵地帯の狭谷地にあり、標高59mに立地する。調査は、遺物が主に含まれる地表下16mの地点より開始した。よって、調査は地表下16mにある暗青灰色粘土層を1層とし、以下岩盤までにある3つの層に対し調査を実施し層位名を付した。

調査では、岩盤を含め5つの層位を確認した。

1層：暗青灰色粘土で、50cm以上の堆積を測る。土層下面是凹凸が著しく、本層堆積時は現地表以上に開析が進んでいたことが分かる。

2層：黒色粘土で10~25cmの堆積を測る。一部に堆積が確認できない地点がある。

3層：暗茶褐色細砂で20~45cmの堆積を測る。

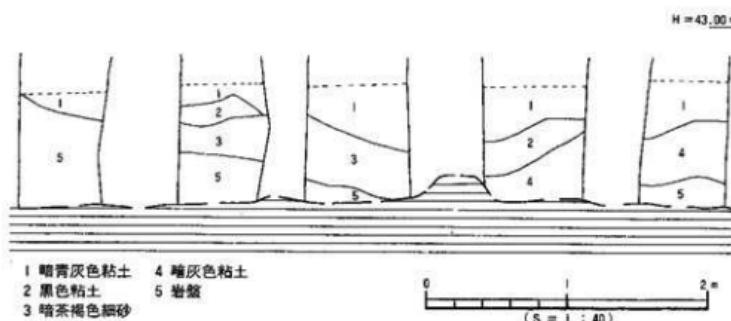
4層：暗灰色粘土で10~50cmの堆積を測る。第3層と第4層は、堆積地点を異にする。

5層：岩盤である。凹凸を示し、開析が著しかったことが分かる。

遺構は、確実なものは検出できなかった。ただし、調査地南西部の岩盤上の凹地(S X 1)より木製品が出土している。

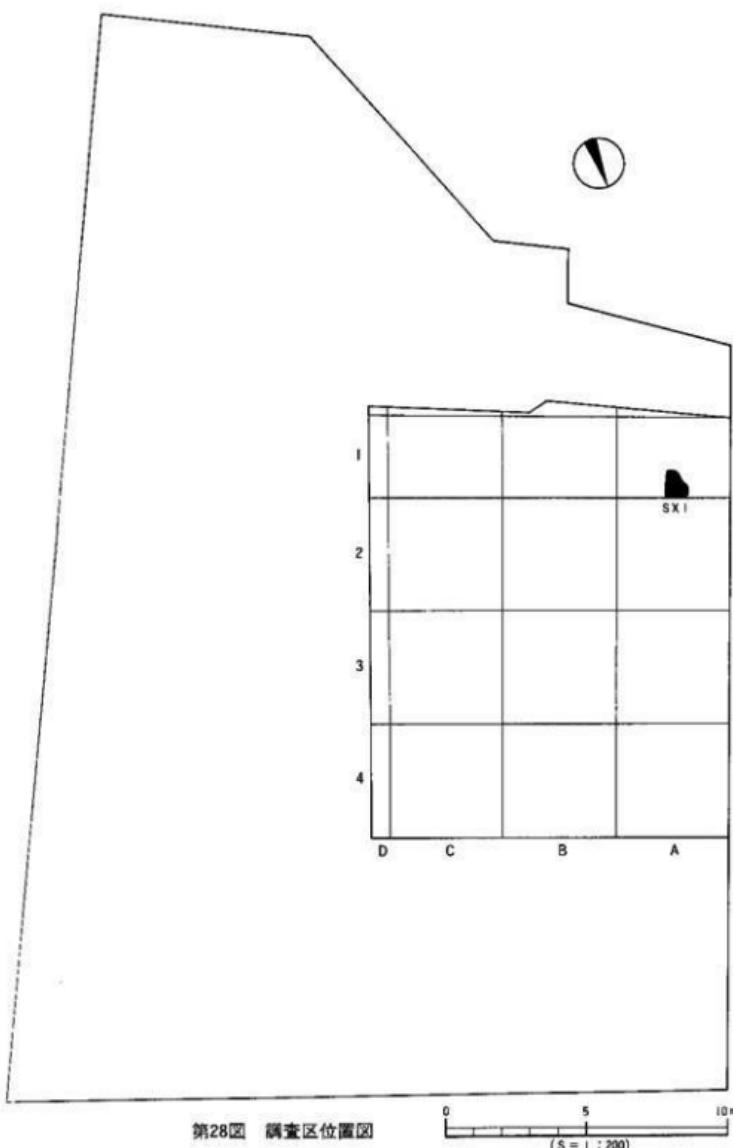
遺物は、第1層~第4層にわたり弥生時代遺物を包含する。ただし、層位間に明確な時期差をもとめることはできなかった。

なお、調査にあたり調査地内を4m四方のグリッドにわけた。呼名称は、第28図に示す。



第27図 土層図

道後鶴谷遺跡

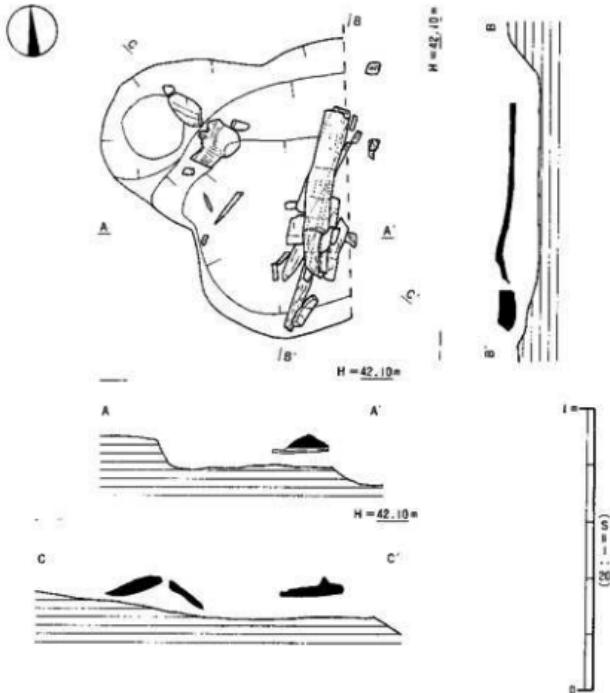


### 3. 遺構と遺物

遺構は、人為的であると断定可能なものは未検出である。ただし、南面隅の凹地（S X 1）より木製品が検出している（第28図）。また、調査地南隅の壁にて木枕を検出したが（図版11）、その時期は特定できなかった。

#### (1) S X 1 (第29図、図版11)

調査地南西隅A 1区で岩盤上より検出した。平面形態は不整で、断面形態は北側では急傾斜をもち落ち込むが、他はゆるやかな傾斜をとる。東側は未調査である。北西—南東で約1m、東端で約1mを測る。基底部より10cm程遊離し、落ち込みの肩部と同レベルで木製品が出土している。木製品は遺存状況が不良で器種等は確定できない（実測図未掲載）。



第29図 SX 1 測量図

SX 1は、人為的な振り込みであるかは断定できなかった。加えて、木製品は特別な加工もなく、木製品と本構の関係も定かではない。時期はSX 1と木製品に伴う遺物はなく特定できないが、SX 1を覆う4層に弥生時代遺物が多いことより、弥生時代に属するものと考えられる。

## (2) 包含層出土物

遺物は1～4層で出土し、弥生時代遺物を多く包含している(図版10)。古墳時代や中世・近世の遺物も少量出土しているが、出土層位は明確な判断ができなかった。

### 1) 弥生時代遺物 一前期一 (第30図、図版12)

變形土器(1～6) 1は折り曲げによる短い口縁部をもつものである。口縁部下外面に指頭痕を著しく残す。2～6は粘土紐の貼り付けによる口縁部をもつものである。口縁部内面は、やや突出ぎみに仕上げられる。2・3は無文、4～6は胴部にヘラ描き沈線文を施す。5は沈線文間に刺突文をもつ。なお、3は鉢形土器になる可能性もある。

壺形土器(7～12・15・16) 7は大型品である。口縁部内面は貼り付けによる段をもつ。口縁端面にはヨコ沈線文と刻み目文を施す。さらに口縁部外面には削り出しによる段をもつ。8・9は直立する頸部に外反する口縁部をもつものである。8は、頸部にヘラ描き沈線文を5条以上を施す。9は内面に凸帯文を施す。10～12は頸部片である。10はヘラ描き沈線文を6条、11は内面に凸帯文と刺突文を上下2段に施す。12は凸帯文上に刻み目文を施す。刻み目文は、二重の刻み目(名本二六雄1990)となる。15・16は底部片で、やや立ち上がりをもつもので、外面中央がやや凹むものとなる。

鉢形土器(13) 13は中～大型品の小片である。折り曲げは弱く、胴部の張りはない。

蓋形土器(14) 14は變形土器の蓋である。中型品で、内面の外縁部に蝶が付着する。

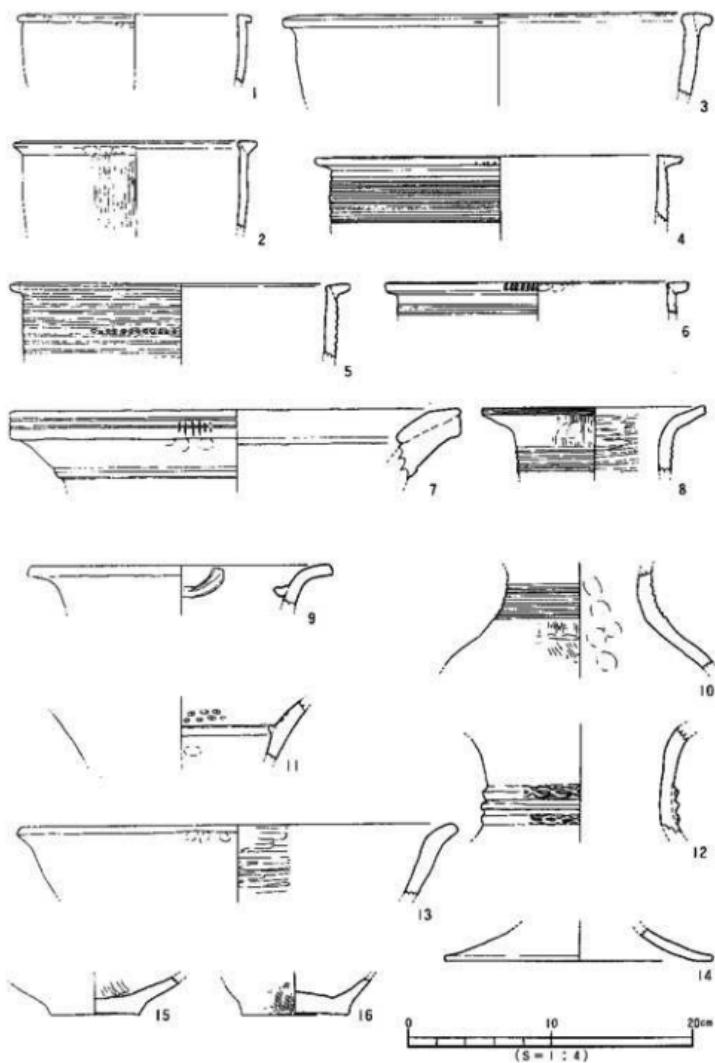
弥生前期と思われる1～14は、7が前期中～後葉、その他は後葉から中期初頭に比定されるものである。

### 2) 弥生時代遺物 一中期前半一 (第31～33図、図版12・13)

17～45は、中期前半に比定される土器である。

變形土器(17～21) 17は貼り付け口縁となるものである。胴部に刺突文と思われる施文をもつ。18は折り曲げ口縁をもつものである。内面にヨコ方向のヘラ磨きをもつ。19・20は、大型品である。口縁端面に刻み目文、口縁部下に指頭押圧による刻み目凸帯文をもつ。21は底部片で、やや上げ底となる。

造構と造物



第30図 出土遺物(弥生)実測図 (I)

壺形上器 (23~36) 22・23は短頸壺である。22は直口口縁で、直径 6 mm人の円孔を穿つものである。23は短い口縁部をもつものである。24・25はやや太い頸部に、短く外反する口縁部をもつものである。体部の法量に比べ、やや大きめの平底をもつ25。26~31は外傾する頸部に外反する口縁部をもつもので口縁端部が拡張され、著しく垂下するもの31もみられる。26・27は断面三角形の貼り付け凸帯文をもつ。28・29は口縁端部上端に刻み目文をもつ。29は口縁内面に直径 2.6 cm人の円形浮文をもつ。30・31は口縁部の外反が大きく、口頸部の境が不明瞭なものである。口縁端面に山形文をもつ。32は細頸長頸壺となる。口縁部はやや膨らみをもつ。33・34は頸部片である。多重の凸帯をもち、33は内面に凸帯、34は外側の凸帯上に逆「U」字状の棒状浮文をもつ。33は、凸帯文の頂部と頸部外面（凸帯文の上位にあたる）との高さが同じで、一見凹線文状となる。35は胴部片である。「コ」字状の凸帯文は、刻み目文をもつ。なお、凸帯文の上位には、ヘラ描き沈線文ないしナデによる線が看取される。36は小型品で、ミニチュア品に属する可能性があるものである。口縁端部は拡張され、頸部に直径 7 mmの円孔を穿つ。

鉢形上器 (37~39) 37・38は小型品、39は中~大型品となる。37~39は折り曲げによる口縁部をもち、38・39は内面に弱い稜を有する。

高杯形土器 (40~45) 40・41は杯部片で口縁端部を内外方に拡張するものである。42・43は脚部高が低く短いものである。42は脚端面がわずかに拡張される。杯部は円板充填技法で、脚部内面側では円板部が大きく看取できる。43はやや異形品である。杯部の光暈は、脚部内面側では大きく垂れ下がるものとなる。44・45は長脚で、内面にシボリ痕が看取される。

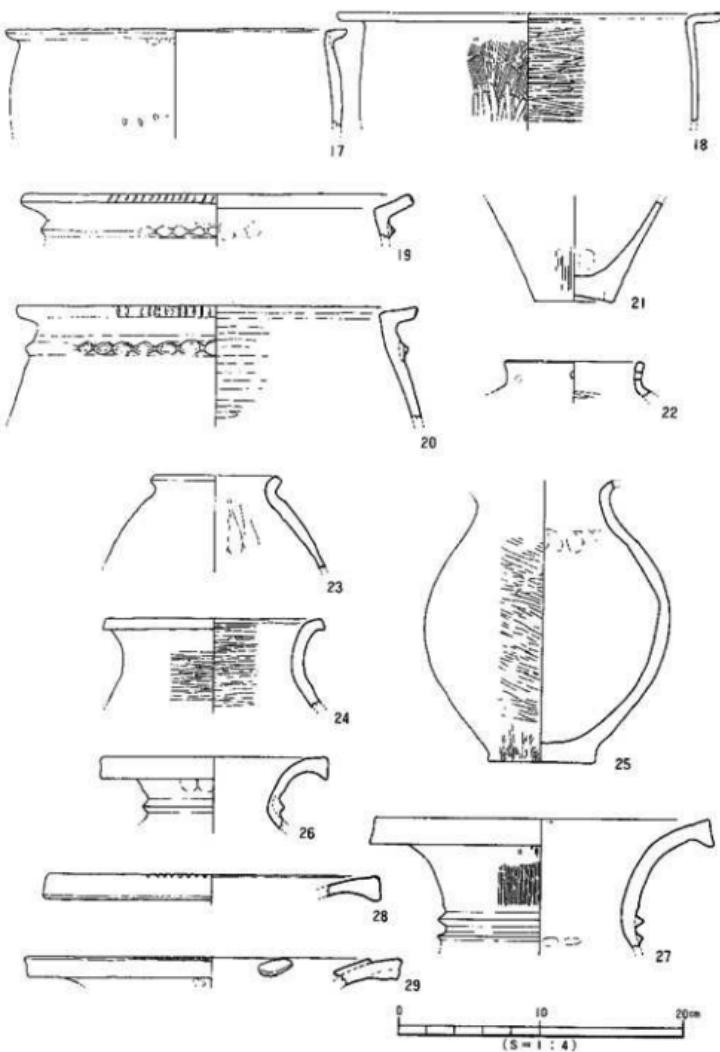
土製品 (46) 46は斐形土器の胴部片を再利用した、円盤形の土製品である。紡錘車の木製品と考えられる。

### 3) 弥生時代遺物 —中期後半— (第34図、図版14)

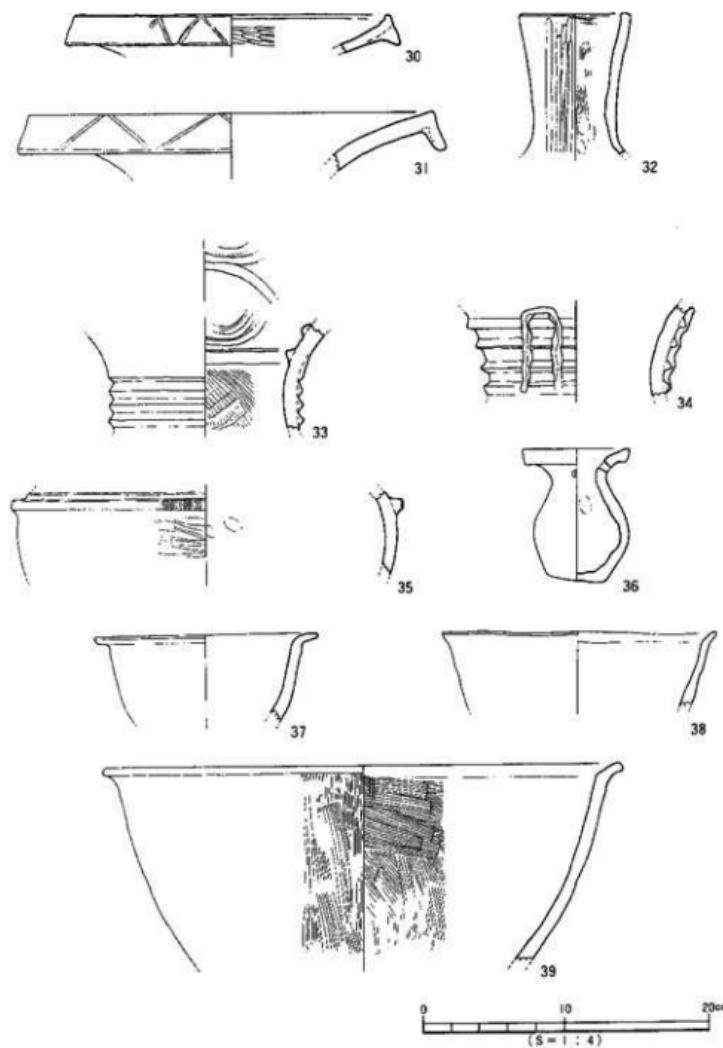
47~62は、中期後半に比定されるものである。

斐形土器 (47~52) 47は口縁部直下に押圧の凸帯文をもつものである。屈折部上面には1条の沈線文をもち、口縁端部は上方に小さく突出し、端面は太い沈線文をもつ。48~50は胴部の張りがやや強いものである。48は口縁部が小さく湾曲する。49は口縁端面にナテ凹みをもつ。50は屈曲する口縁部をもつ、肩部の張りが弱いものである。51・52は底部で、51はくびれの上げ底で、48や50の口縁部をもつ斐形土器につくものである。52は器壁が薄い平底で、49の口縁部をもつ斐形土器につくものである（東田 茂敏 1992）。

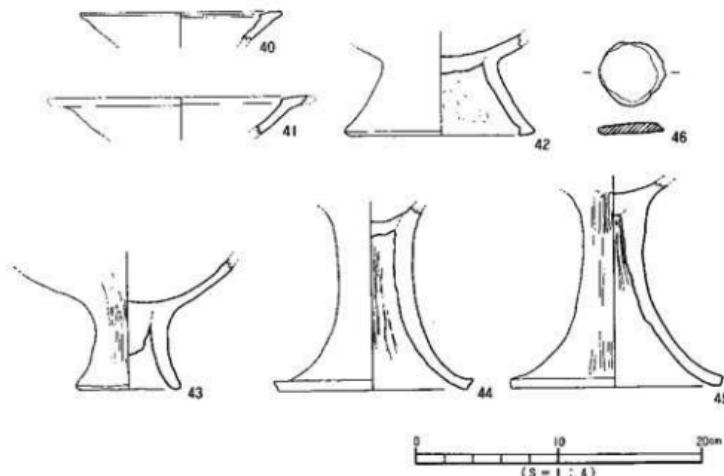
壺形土器 (53~58) 53~58の口縁端部には凹線文が施される。53は短かく外反する口縁部をもつもので、頸部に押圧による刻み目をもつ貼り付け凸帯文を施す。54・55は大きく外反する口縁部をもつものである。56~58は口縁端部の上方への拡張が著しいものである。53~55は中期後半でも古い時期に、56~58は新しい時期にみられるものである。



第31図 出土遺物(弥生)実測図(2)



第32図 出土遺物(弥生)実測図(3)



第33図 出土遺物(弥生)実測図(4)

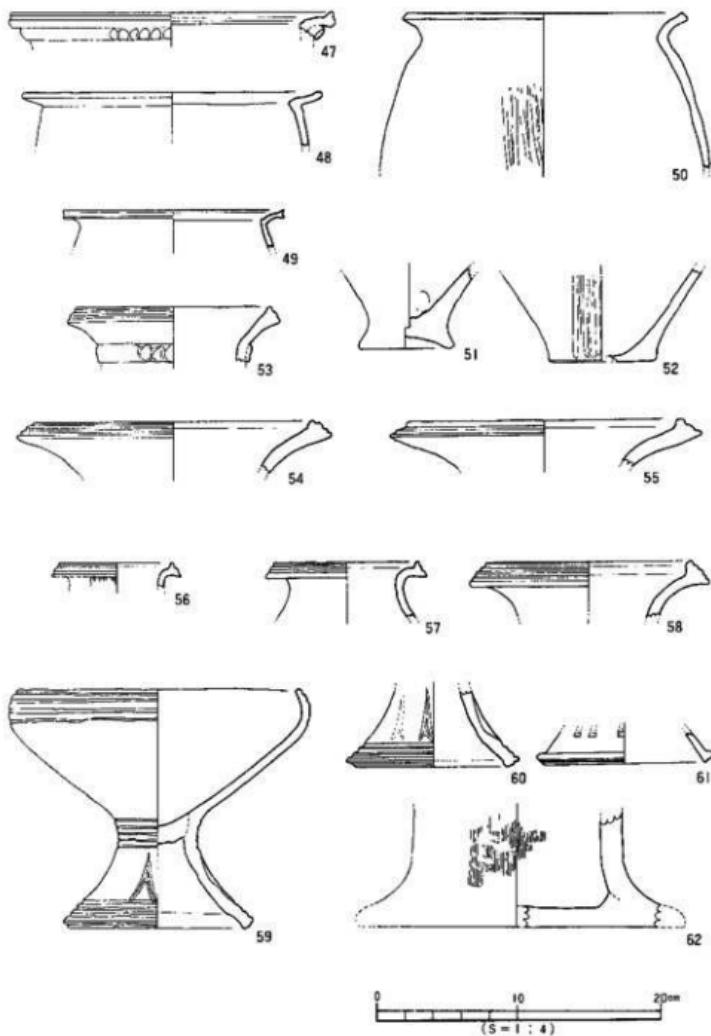
高環形土器 (59~61) 59は復元完形となるものである。環部は内湾する口縁部で、外面に4条の凹線文をもつ。脚部は柱上部に5条の沈線文、裾部に3条、脚端面に1条の凹線文をもつ。裾部には矢羽根透かし(未貫通)を施す。60は脚部小片である。裾部と脚端面に沈線文をもつ。61は器壁が薄く脚端面に2条の沈線文をもつ。透かしは、下部が残存するだけであるが、三角形を呈するものと考えられる。形態や色調等より東部瀬戸内地方のもの可能性が高い(梅木謙一 1993)。

器種不明品 (62) 62は器種不明品で、回転台状土器と呼称されるものに属するものと考えられるものである。大きく突出する部位をもつ。器壁が著しく厚い。

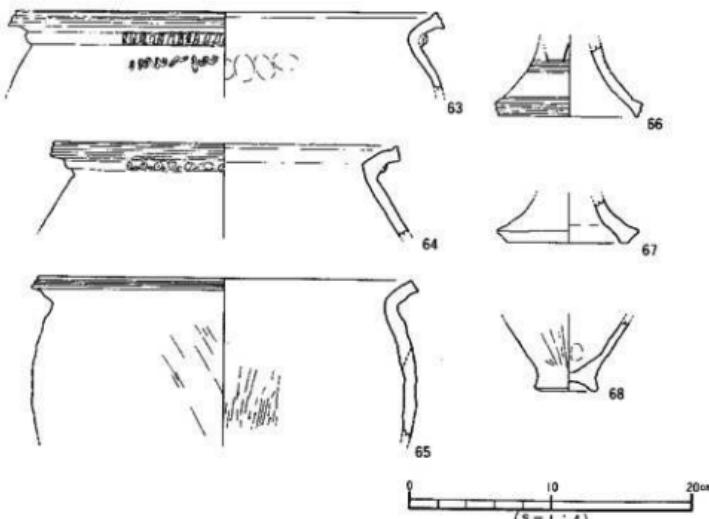
#### 4) 弥生時代遺物 一後期前半一 (第35図、図版15)

菱形土器 (63~65・68) 63・64は肩部が強く張るもので、口縁端部の拡張は弱いが、端面に2条の沈線文(窓凹線文)を施す。また、頸部に刻み目をもつ貼り付け凸帯を施す胴部には波状文をもつ。65は63・64と同じく口縁端部を拡張させ、沈線文を2条施す。68は小型品の底部片である。小さいくびれの上げ底となる。

高環形土器 (66・67) 66・67は脚部片である。66は上部より山形文状の沈線文→ヨコ沈線文3条→裾部外面に1条の沈線文を施し、さらに脚端面に2条の沈線文を施す。67は脚端部をわずかに拡張し、脚内面はナデによる大きな凹みをもつ。



第34図 出土遺物(弥生)実測図(5)



第35図 出土遺物(弥生)実測図(6)

## 5) 弥生時代遺物 —後期後半— (第36図、図版15)

菱形土器 (69・70) 69は肩部が強く張り、「く」の字状で長い口縁部をもつものである。

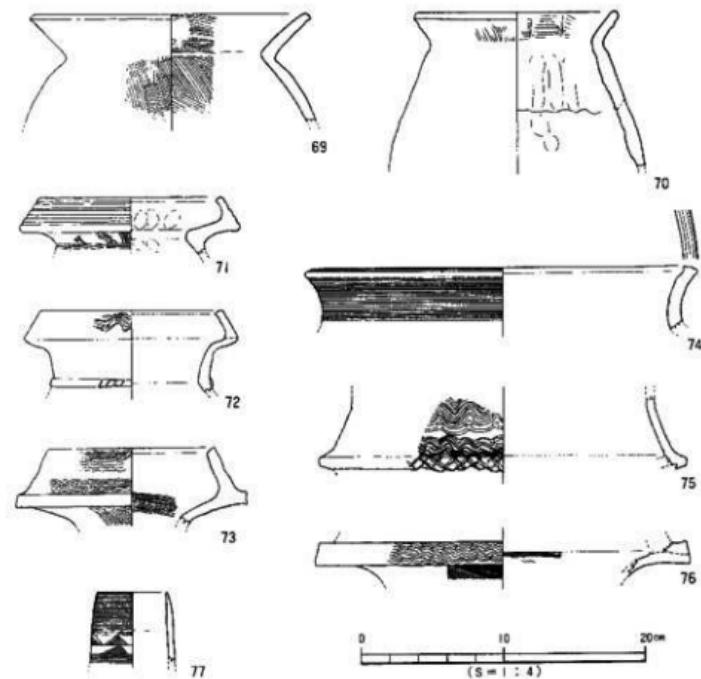
70はやや異形品で、短い口縁部と張りの弱い胸部をもつものである。

壺形土器 (71~77) 71~76は複合口縁壺である。71・72は中型品、73~76は大型品である。71は口縁部外面に4条の沈線文、頸部に3条の沈線文を施す。72は、短めの頸部に「く」の字状の口縁部をもつ。複合口縁の接合部（以降、「接合部」と記述する）には稜をもつ。口縁部外面には櫛描き波状文（4条）をもち、頸部には刻み目凸帯を施す。73は接合部は「コ」字状に突出し、口縁部外面には上下二段に櫛描き波状文（6条1組）を施す。74は口縁部外面に細沈線文（櫛描き文18条以上を確認）をもち、口縁端面にも2条の沈線文を施す。75は接合部は「コ」字状に突出し、突出面には斜格子目文を施す。また、口縁部外面には上下二段に波状文（6条1組）を施す。76は接合部分の破片で、疑口縁が看取される。接合部は「コ」字状で、波状文（6条1組）が施される。77は細頸長頸壺の口縁部片である。ヨコ方向の細沈線文間に斜線により中実された三角形文様が二段に施される。

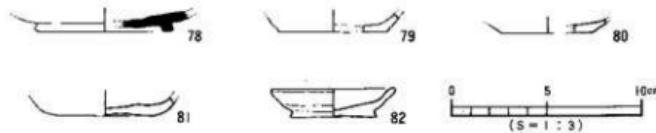
## 6) 古墳～中世 (第37図)

78は高台付坏である。接地面はほぼ略平となる。79はロクロ成形痕を看取する。80は底部小片で、わずかに立ち上がるるものである。81は底部片で、回転糸切りを看取する。82は高台付皿で、回転糸切りとなる。

道後鷺谷遺跡



第36図 出土遺物(弥生)実測図(7)



第37図 出土遺物(古墳～中世)実測図(8)

## 7) 円形土製品（第38図、図版15）

当遺跡からは円形の土製品が出土している。形態上はいわゆる分銅形ではないが、後述するところより、顔面表現方法が分銅形土製品のそれを踏襲していると考えられるため、分銅形土製品の範疇におさめ、資料名は従来どおり「鶯谷」とした。

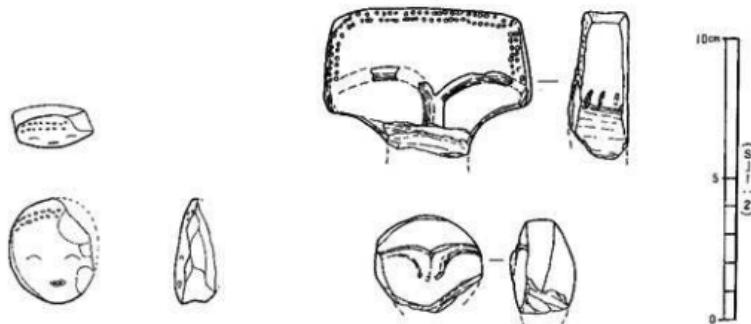
**出土状況** この土製品は、包含層中から出土しており、その出土状況などは不明であるため、土製品埋没時期の決定は困難である。

**形態** 平面形は、一部を欠失しているものの、上下に長い楕円形である。また、顔面を表現した表面は、中央部分がややふくらむ傾向がみられる。また、下端部をナテにより凹ませ、表面を強く突出させた形態になっている。裏面部分は欠失しているため、形態は不明である。剥離した裏面部分は、同遺跡内から検出されなかった。

**顔面表現** 頭髪は表面上半部にみられ、外周に沿って2列の刺突によって表現される。目は、半裁竹管状の施文具により半月形に線刻されており、両目とも同一工具によるものと考えられる。口は、ヘラ状の施文具による刺突の痕跡がみられる。なお、眉・耳の表現はみられない。

**色調** 表裏面ともに黄褐色である。ただし、裏面中央付近には焼成を受けた痕跡がないため、黄白色を呈しており、焼成後に剥離した可能性がある。胎土は、細かい砂粒を含むものの密である。焼成は良好で、朱彩の痕跡はみられない。

**寸法** 残存長3.7cm、残存幅2.9cm、最大厚1.5cmを計る。



第38図 円形土製品実測図

（「井上山」井上山遺跡発掘調査団1979より再トレス）

この円形土製品と形態・寸法などで類似するものが、山口県防府市井上山遺跡で出土している。これは、谷若氏の分類により資料名が「井上山E」とされているもので、表面資料である。後者の形態はほぼ円形で、表面よりも裏面中央部が大きく突出している。裏面表現は粘土紐の張りつけにより、眉を鼻と一緒に隆起させているのみである。これに対して「鶴谷」は、表面が剥離しているためその形状を知ることができないが、この「井上山E」を例にするならば、同様な形態であったことが可能性としてあげられる。いわゆる「周防型」と呼ばれる、やや厚手の方形をしたタイプの分銅形土製品が、松山及び周防平野において中期中葉以降にその広がりをもち、また同時期の弥生土器の壺の形態に類似点を見いだすことができるなど、円形土製品においても、その有機的な関係を積極的に認めてよいのではないかと考えられる。

#### 4. 小 結

本調査では、弥生土器、須恵器、中世土師器が包含層より出土した。調査地は谷部にあたり、よってこれ等の遺物は調査地の東部にある丘陵地からの流入品と考えられる。道後地区の丘陵地には、弥生前期の冠山遺跡、弥生中期後半の伊佐爾波神社遺跡、弥生前中期～中期初頭・後期末の道後姫塚遺跡がある。今回の資料は中期前半や後期前半といったこれまで資料数の少ない時期のものが出土しており、道後地区的丘陵地が弥生前期後半以降連鎖と集落經營がなされたことを立証する一つの資料となるものと考える。また、この丘陵地帯の集落經營のあり方は、西接する祝谷地区においても同様な傾向がみられることが明らかとなリつつある。ただし道後・祝谷地区では、低地の集落状況が明らかでなく、今後の調査事例を期待するとともに、加えて同時期における丘陵地と低地集落個々の集落構成のあり方と、両者の交流のあり方を解明していかなければならないと考える。

次に、今回の調査において出土した、注目される遺物を2点取り上げる。1：人の顔面を模した凹形を呈する土製品があげられる。これは山之内により詳細な観察と分析がなされている。分銅形土製品を含め、人面を土製品のモチーフとしている点で興味深く感じられる一方、その分布が中期後半の凹線文や後期の平形銅削分布域と同じひろがりをもつて注意を要するものである。2：東瀬戸内地方の高环形土器と考えられる61（P52・第34図）は、形態・調整・文様において平野出土のものとは異なり、東瀬戸内地方、特に吉備地方を中心多くみられるものに類似する。さらに、胴部に波状文を施す變形土器63（P53・第35図）は、平野の後期前半には波状文を施すことは基本的に認められることより外米の要素と考えられる。地域は、広島県鏡西谷遺跡（藤野 次史 1984）等に類似がある。これ等注目される2件の資料は中期後半～後期における瀬戸内地方の交流を解明する一つの資料であるといえる。

以上、本調査では、道後地区の弥生時代における丘陵地での集落經營の継続性を立証する資料と、瀬戸内地方の交流を示す資料を得たことで、目的の一部は果たせたものと考える。

## 【文 献】

- 名本二六雄 1990 「冠山」「遠跡32」 遠跡発刊会
- 栗田 茂敏 1992 「V 出土弥生式土器の検討」『文京遠跡－第2・3・5次調査－』  
愛媛大学・財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 梅木 謙一 1993 「3-1 伊予の土器と東・南九州の土器」 古代学協会中国・四国支部合同大会資料
- 鹿野 次史 1984 「広島大学統合移転埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ」

## 遺物観察表—凡例—(梅木謙一・山下満佐子)

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

**法量欄** ( ) : 復元推定値**形態・施文欄** 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胸部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胸部～底部。

**胎土・焼成欄** 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) 多→「1~4 mmの大石英・長石を多く含む」  
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表2 出土遺物(弥生)観察表 土器品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色刷 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(16.4) 底高 4.0	口縁部は短く折り曲がる。 口縁下に施文有。	マメツ	ナテ	暗褐色 口縁色	石-山口-3.9 ◎		12
2	甕	口径(17.0) 底高 5.2	折り付け口縁。 口縁下に折り付けの複合底 (脚)有り。	⑪ ココナテ ⑫ ハケ(タチ-4cm/m)	ナテ	暗褐色 底黄色	石-山口-2.5 ◎		12
3	甕	口径(20.4) 底高 5.0	脚の可能性もある。折り付 け口縁。底口縁有取。	⑪ ココナテ ⑫ マメツ	⑪ ココナテ ⑫ マメツ	乳黄色 乳黄色	石-山口-0 ◎		
4	甕	口径(22.0) 底高 1.8	折り付け口縁。口縁には刻 み目。ヘラ沈縫9条以上。	⑪ ココナテ マメツ	ココナテ マメツ	底黄色 底黄色	石-山口-2.2 ◎		12
5	甕	口径(24.0) 底高 5.2	折り付け口縁。ヘラ沈縫5 条→刻文→ヘラ沈縫3条 →刻文	⑪ ココナテ	ミガキ(ココ・マメツ)	乳白色 乳白色 底黄色	石-山口-3 ◎		
6	甕	口径(21.0) 底高 2.3	折り付け口縁。口縁斜み口。 ヘラ沈縫3条以上。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石-山口-0 ◎		12

## 道後駁谷遺跡

出土遺物(弥生)観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	陶 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	壺	口径(31.8) 残高 5.0	口縁に沈縫 2 条と組み目。 側縫頸に施し凸部。口縁内面貼付有り。	ナテ	ナテ	灰黃茶色 灰黃茶色	石灰(1-0)	◎	12
8	壺	口径(18.5) 残高 4.7	底部へ沈縫文 5 条以上。	ハケ(タテ)	ミガキ(ヨコ)	青白灰黃色 白灰黃色	石灰(1-0)	◎	1
9	壺	口径(21.0) 残高 3.0	口縁内面に溝双文の貼付 付凸部。	ヨコナテ	ナテ	淡乳黃色 乳黃茶色	石灰(1-0) 金	◎	12
10	壺	残高 6.5	側縫下半にヘラ花彌文 6 条。	マメツ ミガキ(マメツ)	ナテ(マメツ)	乳黃茶色 乳黃褐色	石灰(1-0)	◎	
11	壺	残高 4.6	口縁内面に貼付凸部と 斜突文 2 段。	マメツ	ヨコナテ(マメツ)	淡灰茶色 淡灰茶色	石灰(1-0) 金	◎	12
12	壺	残高 7.5	幅広の内面・沈縫 2 条+接 押し→組み目。	マメツ	ミガキ(ヨコ・マメツ)	乳灰黃色 乳灰黃色	石灰(1-0)	◎	12
13	井	残高 5.0	ゆるやかに折り曲がる口縁 面。	マメツ	ミガキ(ヨコ・マメツ)	乳白色 乳白色	石灰(1-0)	◎	
14	壺	口径(18.8) 残高 2.3	受部内面、船約 3 cm で焼が 付着。	マメツ ナテ	◎ マメツ ◎ ナテ	灰黃色 淡灰黃色 褐紅色	石灰(1-0) 金	△△△番	12
15	壺	底径 6.2 残高 2.6	平底の底部は、わずかに凹 みをもつ。	マメツ	丁目模	黃褐色	石灰(1-0)		
16	壺	底径 7.8 残高 2.5	平底の底部は、わずかに凹 みをもつ。	ハケ+ナテ ミガキ	ナテ(マメツ)	黃褐色 黑色	石灰(1-0)		
17	壺	口径(24.0) 残高 7.0	貼り付け口縁。側縫に斜突 文。	ナテ(マメツ)	ナテ(マメツ)	乳黃褐色 乳黃褐色	石灰(1-0)		
18	壺	口径(27.0) 残高 7.7	折り曲げ口縁。内面に縫を もつ。	ヨコナテ ハケ(タテ) ハケ(ヨコ)→ミガキ(ヨコ)	ヨコナテ ミガキ	黑色 淡乳黃色 黃褐色	石灰(1-0) 金(1-2)		
19	壺	口径 26.9 残高 3.1	口縁周部剥む目。表面によ る剥む目内帶。	マメツ	マメツ	褐紅色 黃褐色	石灰(1-0) 金(1-2)		
20	壺	口径(28.3) 残高 7.9	口縁周部剥む目。表面によ る剥む目凸部。	ヨコナテ ハケ(マメツ)	ヨコナテ ミガキ(ヨコ)	淡灰黃褐色 黃褐色	石灰(1-0)	◎	12
21	壺	底径 (5.6) 残高 7.2	小さい底部。小さい上げ底。	ミガキ(マメツ)	マメツ	乳黃褐色 淡黃褐色	石灰(1-0)	◎	
22	壺	口径 (9.0) 残高 2.5	直徑 6 mm の円孔 1 ヶ。本貫 通の円孔 1 ヶあり。	ナテ	ヨコナテ ナテ ミガキ(ヨコ)	暗黃褐色 黃褐色	石灰(1-0) 金	◎	12
23	壺	口径 (8.5) 残高 6.5	口縁下外縁、ナカ凹みあり。	ヨコナテ マメツ	ヨコナテ ナテ	乳黃褐色 乳黃褐色	石灰(1-0) 金	◎	

## 小 結

出土遺物(弥生)観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
24	盃	口径(15.0) 残高 5.2	口縁端面はナテにより下端 はわずかに尖出する。	⑩ヨコナテ ⑪ミカキ(ヨコ)	⑫ヨコナテ ⑬ミカキ(ヨコ)	brunet brunet	石灰白(1~3) ○		
25	壺	直径 7.9 残高 19.2	球形の側部と大きめの平底。 側部の側面と大きめの平底。	⑭ミガキ(ナチメ) ⑮ハケ(ナチ)	⑯ミカキ(マメツ) ⑰ナテ(指印跡) ⑱ナテ(マメツ)	暗黄茶色 暗灰茶色	石灰白(1~3) ○		12
26	壺	口径(16.0) 残高 5.1	口縁端下方に盛り。瓶部貼 り付け凸部。	ナテ ⑩ヨコナテ	マメツ	brunet 黄褐色 黄褐色	石灰白(1~3) 長(1~2) ○		
27	壺	口径(23.0) 残高 9.0	口縁端下方に凹下。瓶部貼 り付け凸部 2 本。	⑪マメツ ⑫ハケ(ナチ)	マメツ	茶色 蓝色	石灰白(1~4) ○		
28	壺	口径(23.0) 残高 1.7	口縁端下方にやや軽便。 口縁上端部に組み目。	⑩ヨコナテ ⑪ハケ(3本/cm)	ナテ	乳白色 乳灰色	石灰白(1~2) ○		
29	壺	口径(26.6) 残高 1.8	口縁端部や瓶底、 口縁上端部組み目。内面内 部浮文。	ヨコナテ	マメツ	深茶色 黑色、深灰色	石灰白(1~3) ○	黒斑	12
30	壺	口径(22.0) 残高 2.7	口縁端上下に板張。下方は 貼り付け。端面に山形文。	ヨコナテ	⑨ヨコナテ ⑩ミカキ(ヨコ)	暗灰褐色 暗灰褐色	石灰白(1~2) 長(1~2) ○		
31	壺	口径(28.3) 残高 4.2	口縁端下方に盛り。 端面に山形文。	マメツ	マメツ	深灰茶色 深灰黄色	石灰白(1~3) ○		13
32	壺	口径 7.8 残高 9.9	瓶頸長脚・直口口縁。	ミガキ(ナチ)	⑦ヨコナテ ⑧ハケ→ナテ	茶褐色 茶褐色	石灰白(1~3) ○		
33	壺	残高 8.3	瓶部に凸筋 3 本。口縁内側 凸筋 3 本(湖底丸)。	ヨコナテ	⑩ナテ ⑪ハケ(ナチメ)	暗灰茶色 暗茶色	石灰白(1~3) ○	黒斑	13
34	壺	残高 6.5	瓶部に貼り付け凸筋 4 本以 上、延「U」字状の棒状浮文。	マメツ	マメツ	深灰色 深灰色	石灰白(1~3) ○		13
35	壺	残高 5.8	瓶部に凸筋 4 本。瓶部内側 凸筋 3 本(湖底丸)。	ヨコナテ ⑩ミカキ(ヨコ)	マメツ	暗灰褐色 暗灰褐色	石灰白(1~3) ○		13
36	壺 (13.5×17.7)	口径 7.5 底径 4.4 残高 9.4	瓶部に凹孔(直径 7mm)2 個。	⑫ヨコナテ ⑬ナテ	ナテ	黄褐色 深灰色 深灰色 深灰色	石灰白(1~3) ○	黒斑	13
37	鉢	口径(12.0) 残高 6.2	ゆるやかに折り曲がる口縁 部。	マメツ	マメツ	茶色、茶褐色 茶褐色	石灰白(1~3) ○		
38	鉢	口径(19.2) 残高 5.2	弱い棱をもたらす折り曲がる口 縁部。外面剥離。	剥離	⑫ナテ ⑬ナテ→ミガキ	深灰茶色 暗灰茶色 深灰茶色	石灰白(1~3) ○		
39	鉢	口径(36.4) 残高 13.8	弱い棱をもたらす折り曲がる口 縁部。	ハケ(ナチ)	⑪ヨコナテ ⑫ハケ(3本/cm) ⑬ハケ(ナチ)→ミガキ	乳灰茶色 乳灰茶色 乳灰茶色	石灰白(1~4) ○		
40	高杯	口径(14.0) 残高 1.95	环部小片。口縁端面は内外 に粘着。	マメツ	マメツ	浅灰褐色 浅灰褐色	石灰白(1~3) ○		

## 道後覺谷遺跡

出土遺物(弥生)観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外因) 色膜 (内面)	胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面				
41	高环	口径(18.0) 残高 2.7	片脚小片。口縁端部は内外に被裂。	マメツ	ヨコナデ	乳灰茶色 乳灰黄色 乳灰黃色	石・長(1-3)		
42	高环	直径 13.3 残高 7.1	円盤光環状法。周縁部内面に細土塗り出す。	ヨコナデ	ナデ	暗灰茶色 暗灰褐色 暗灰褐色	石・長(1-4) ○		13
43	高环	直径 7.4 残高 9.0	低脚。円盤光環状法。	ミガキ(タテ・マメツ)	マメツ	乳灰黄色 乳灰褐色	石・長(1-4) ○		13
44	高环	口径(13.1) 残高 7.8	長脚。円盤光環状法。	ミガキ(タテ・マメツ)	④シボリ底 ⑤ヨコナデ(マメツ)	乳灰茶色 乳灰褐色	石・長(1-5) ○	黒底	
45	高环	直径(14.6) 残高 9.4	長脚。円盤光環状法。	⑥ミガキ(タテ) ⑦ヨコナデ	⑧シボリ底 ⑨ハケ→ヨコナデ	乳灰茶色 乳灰褐色	石・長(1-6) ○		
46	土製品	口径 4.6	堅い土製部片を有利用したもの。防衛車の未製品か。	マメツ	マメツ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1-3) ○		
47	甕	口径(22.5) 残高 1.3	口縁端部上方に被裂。 指輪底をもつ凸巻。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 白灰色	石・長(1-2) ○		
48	甕	口径(20.8) 残高 3.8	口縁は海曲して立ち上がる。	⑩ヨコナデ	⑪ヨコナデ ⑫ナデ	出色 黄茶色	石・長(1-3) ○	スズ留番	14
49	甕	口径(15.6) 残高 3.8	口縁上方に被裂。 口縁端部ナデ凹巻。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石(1-4) 瓦(1) ○		14
50	甕	口径(19.2) 残高 11.0	ゆるやかに折り曲がる口縁。 鋸歯底。	⑬ヨコナデ ⑭ハケ(タテ・マメツ)	マメツ	暗赤茶色 赤茶色	石・長(1-3) ○	スズ留番	
51	甕	直径(6.3) 残高 5.7	くびれの上げ底。	ヨコナデ	ナデ	淡灰褐色 黄褐色	石・長(1-3) ○		
52	甕	直径(7.4) 残高 6.5	器壁の薄い平底。	ミガキ(3-4本/cm)	ナデ	乳灰褐色 乳灰褐色 乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1-2) ○		
53	甕	口径(13.6) 残高 3.9	口縁端部わずかに被裂し。 2条の凹巻。	マメツ	マメツ	淡茶色 淡灰褐色	石・長(1-3) ○		14
54	甕	口径(19.5) 残高 3.7	口縁端部わずかに被裂し。 3条の凹巻。	⑮ヨコナデ ⑯マメツ	ヨコナデ(マメツ)	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1-2) ○		
55	甕	口径(21.9) 残高 3.3	口縁端部上方にわずかに被裂し。 2条の凹巻。	マメツ	マメツ	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1) ○	黒底	14
56	甕	口径(8.0) 残高 1.8	口縁端部上方に被裂。 2条の凹巻。	⑰ハケ(タテ+3本/cm) ⑱ヨコナデ	ヨコナデ マメツ	黑褐色 黑褐色	長(1) ○		14
57	甕	口径(11.4) 残高 4.0	口縁端部下方に被裂。 2条の凹巻。	ヨコナデ	ヨコナデ	火茶色 火茶色 灰茶色 灰茶色	石・長(1) ○		

## 出土遺物(弥生)觀察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外画) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
58	壺	口径(14.0) 残高 4.0	口縁部上方に板張、4条の回転文。	ヨコナテ	ナテ	灰黄色 灰黄色	石塗(1~3) ◎		14
59	高环	口径(19.7) 底径(13.0) 残高 16.65	口縁部4条の回転文。柱部 沈縫 6条。尖弱相連し3ヶ 以1。西跡文3条。	マメツ	⑪ヨコナテ ⑬マメツ	乳灰黄色 乳灰黄色	石塗(1~3) ◎		14
60	高环	底径(12.4) 残高 5.1	通し2ヶ以上。沈縫4条。 縦縫3条の沈縫。	マメツ	ナテ	灰褐色 灰褐色	石塗(1~3) ◎		14
61	高环	底径(11.0) 残高 2.1	通し3ヶ以上。地面2条の 沈縫。	マメツ	マメツ	乳黄白色 黄褐色	石塗(1~3) ◎		14
62	不明	残高 8.0	器壁は薄しく厚い。 大きさと突出部をもつ。	⑨⑪ハケ(タチ) ⑩ナダ ⑫ナテ	⑪⑫ハケ(タチ) ⑬ナテ	乳黄灰色 乳灰黄色	石塗(1~3) ◎	黒面	14
63	甕	口径(29.4) 残高 5.5	口縁部回旋文2条。 刻み口凸。2~3本の構 成波状文。	⑭ヨコナテ ⑮マメツ	⑪ヨコナテ ⑭ナテ(指頭痕)	灰黄褐色 灰黄色	石塗(1~3) ◎		15
64	甕	口径(24.0) 残高 6.4	口縁部回旋文2条。 指頭による刻み口凸。	⑫ヨコナテ ⑬ハケ(タチ)	マメツ	灰褐色 灰褐色	石塗(1~3) ◎		15
65	甕	口径(26.0) 残高 11.2	口縁部回旋文2条。 周面部ナテ凹む。	⑭ヨコナテ ⑮工具痕	⑪ヨコナテ ⑯ケズリ	淡茶褐色 淡黄褐色	石塗(1~3) ◎		
66	高环	底径(9.7) 残高 5.3	底部山形文。沈縫文3条→ 沈縫文1条。縦面沈縫2条。	ナテ	⑭ナテ ⑮ヨコナテ	乳黄色 黑色	石塗(1~3) 金 ◎		15
67	高环	底径(8.8) 残高 3.0	端面と内面はナテ凹む。	ナテ	⑭⑮ケズリカ(マメツ) ⑯ヨコナテ	灰黄色 灰黄色	石塗(1~3) ◎		
68	甕	底径(3.6) 残高 4.9	小さいくびれの上げ窓。	ヨコナテ	マメツ	乳黄茶色 淡茶色	石塗(1~3) ◎		
69	甕	口径(19.7) 残高 7.6	長く伸びる口縁部。内面に 縞をもつ。	⑪ナテ ⑫ハケ(タチ)	⑪ハケ(ヨコ) ⑫ハケ(ナナメ)	乳灰黄色 乳灰黄色	石塗(1~3) ◎		
70	甕	口径(13.4) 残高 11.0	やや無形感。内面に弱い板 をもつ。成形時の接合部あ り。	⑪ハケ(7本/cm) ⑮マメツ	⑪ハケ(4~5本/cm) ⑯ナテ(指頭痕)	黄茶褐色 黄茶褐色	石塗(1~3) ◎		
71	甕	口径(15.6) 残高 4.1	口縁部上方に板張。 口縁部に回旋文4条。 底部沈縫文3条。	⑭ヨコナテ ⑬ハケ(タチ)	ヨコナテ	暗不和色 乳灰茶色 暗褐色 乳灰茶色	石塗(1~3) ◎	黒面	15
72	甕	口径(12.8) 残高 5.8	複合口縁。4条の構成波状 文。頭部に刻み口凸文。	マメツ	⑭ヨコナテ ⑮マメツ	暗茶色 灰茶色	石塗(1~3) 金 ◎		
73	甕	口径(11.7) 残高 5.4	複合口縁。口縁部に沈縫 2条。口縁外縁に回旋文18 条以上。	⑪ヨコナテ+施文 ⑬ハケ	⑪ヨコナテ ⑬ハケ(ヨコ)	暗茶色 暗茶色	石塗(1~3) ◎		15
74	甕	口径(25.6) 残高 4.5	複合口縁。口縁部に沈縫 2条。口縁外縁に回旋文18 条以上。	不明	⑪ヨコナテ ⑮マメツ	黄茶色 乳黄色	石塗(1~3) ◎		15

## 道後聲谷遺跡

出土遺物(弥生)観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	回版
				外 面	内 面				
75	壺	残高 5.0	複合口縁。6条の櫛目波状文2段。斜縦子目文。	不明	ナテ	灰黃褐色 灰黃色	石・土(1-3) ○		15
76	甌	口径(26.4) 残高 2.6	複合口縁。6条の櫛目波状文。縦口縫香取。	⑩ハケ(日本/cm) —部ヨコナテ	ハケ	乳灰黃色 乳灰黃色	石・土(1-3) ○		15
77	壺	口径(5.0) 残高 5.0	輪状文38条→二角文内斜縫10条→沈縫1条→二角文→細充縮文9条。	不明	ナテ(工具痕)	乳黃褐色 乳黃色	土 ○		15

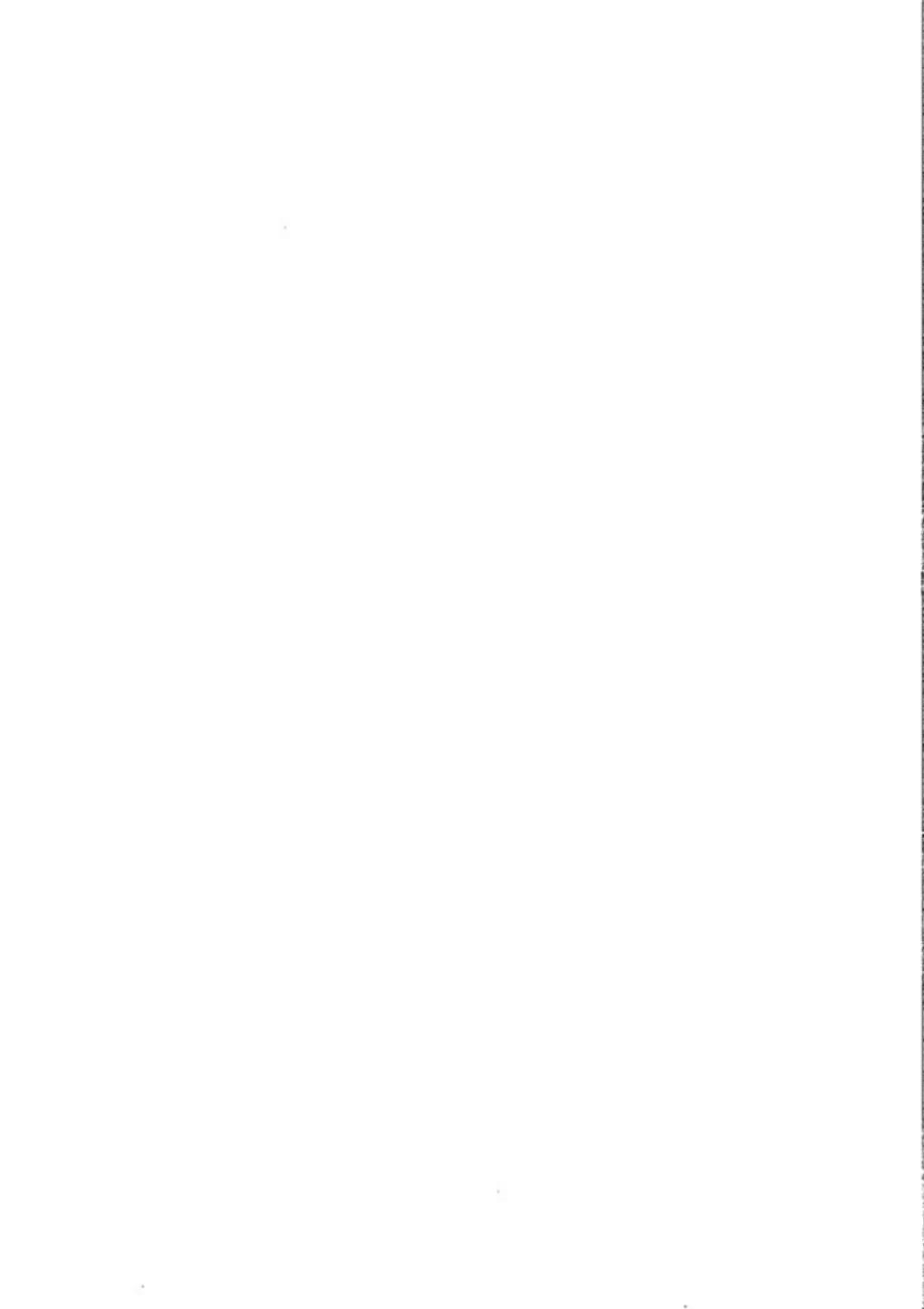
●表3 出土遺物(古墳～中世)観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外)色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	回版
				外 面	内 面				
78	壺	底径(9.0) 残高 1.4	底内斜不規則な2ほ本 甲。	ヨコナテ	ヨコナテ	暗灰色 淡灰色	石・長(1) ○		
79	土師瓶	底径(7.6) 残高 1.3	ロクロ皮形模香取。	マメツ	ナテ(マメツ)	黄白色 黄白色	土 ○		
80	土師瓶	底径(6.6) 残高 1.0	わずかに立ち上がりのある 底部分。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	土 ○		
81	土師瓶	底径(6.0) 残高 1.4	同軸ヘラ切り。	マメツ	回軸ナテ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・土(1) ○		
82	土師瓶	底径(6.0) 残高 2.0	高台付き瓶。回軸未切り。	回軸ナテ	回軸ナテ	灰黃色 灰黃色 灰黃褐色	石・土(1) ○		

## 第 4 章

イワイ ダニ オオ チ ガ タ

# 祝谷大地ヶ田遺跡



## 第4章 祝谷大地ヶ田遺跡

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1987（昭和62）年12月、野本正弘氏（松山市道後姫塚212-105）より、松山市祝谷4丁目964における住宅建築にあたって、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地の『53 土居の段遺物包含地』内にあり、周知の遺跡として知られている。周辺には、弥生時代遺跡で平形銅劍が出土した祝谷六丁場遺跡（北西320m）や後期古墳が群集する祝谷古墳群（東北及び西北500m）等があり、弥生時代～古墳時代の遺跡が密集する地域である（第2図）。

これらのことより、文化教育課は当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺物の範囲や性格を確認するために、1988（昭和63）年1月8日に確認調査を実施した。確認調査の結果、遺物包含層を検出した。この結果を受け、文化教育課と原団者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺跡について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、当地域の弥生時代～古墳時代における集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、原団者の協力のもと1988（昭和63）年1月11日に調査を開始した。（岡版16）

なお、昭和63年6月～同年7月の間、本調査地北100mの地点で、徳島県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施している。さらに、平成元年3月に同調査の報告書を刊行し、「祝谷大地ヶ田遺跡」として報告がなされている。本報告書では、徳島県埋蔵文化財調査センター調査地を「祝谷大地ヶ田（県埋文）」として記述する。

#### (2) 調査組織

調査地 松山市祝谷4丁目964

遺跡名 祝谷大地ヶ田遺跡

調査期間 1988（昭和63）年1月11日～同年1月23日

調査面積 303m<sup>2</sup>

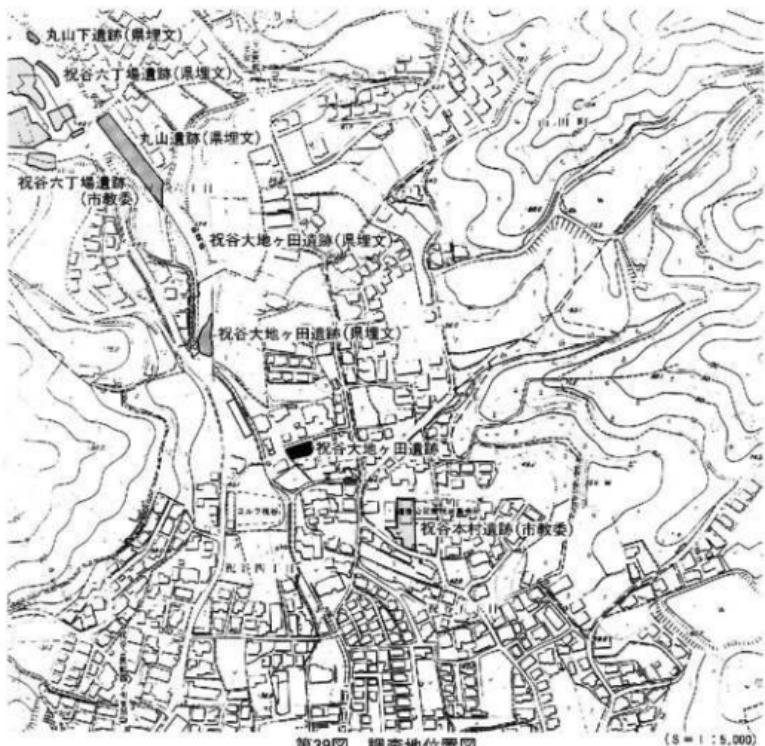
調査協力 野本 正弘、野本 級

調査担当 宮崎 泰好（現 伊予郡砥部町教育委員会）

調査作業員 相原 浩二（現 徳島市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）ほか

（註）本文執筆にあたり相原浩二氏の助言をいただいた。

### 祝谷大地ヶ田遺跡



第39図 調査地位置図

(S = 1 : 5,000)

### 【文 献】

松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター調査資料

宮崎 泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

梅木 譲一 1992 「道後城北遺跡群」 勝松市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

勝愛媛県埋蔵文化財調査センター調査資料

梅木 寛 1989 「一般国道「芦沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書 I」 勝愛媛県埋蔵文化財調査セ  
ンター

小林 一郎・小原佐代子 1990 「一般国道「芦沢—松山線」埋蔵文化財調査報告書 II」 勝愛媛県埋蔵  
文化財調査センター

## 2. 層位 (第40図、図版16)

本調査地は、祝谷地区を流れる丸山川の氾濫原、標高42mに立地する。現在の丸山川までの距離は40mと近隣する土地である。

層序は、4層を検出した。ただし、調査は安全対策等の関係より最下層を10~40cm検出した地点までにとどめた。よって、第IV層の堆積値と以下の層序については不明である。

**第I層 表土 (耕作土) で40~50cmを測る。**

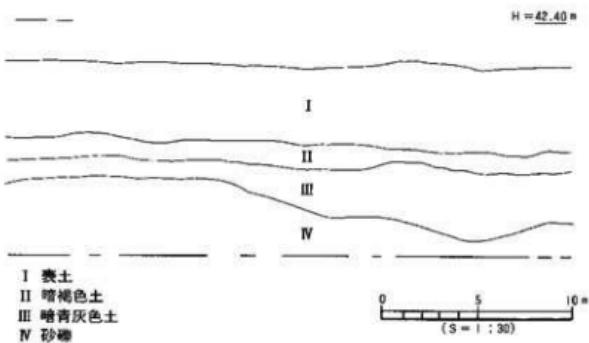
**第II層 暗褐色土で8~14cmを測る。無遺物層である。**

**第III層 暗青灰色土で10~36cmを測る。弥生~古墳時代・中世の遺物が出土する。ただし、中世遺物については、本層に伴うものかは疑問の残るものである。**

**第IV層 砂礫層で10~40cm以上を測る。弥生時代~中世の遺物が出土する。古墳時代・中世の遺物については出土状況に課題をもつものである。**

第III層と第IV層は、わずかに中世の遺物を含んでいるが、いずれの遺物も第III・IV層が堆積した後に混入した可能性が高いと考えられる。第III・IV層は氾濫地での堆積層でもあること、課題を残す遺物の出土もあることより、本論では第III・IV層についての時期特定はさけるものとする。

なお、遺構は未検出であったが、第IV層上面にて凹地を一部（調査地内南側）確認した（第41図）。凹地は、黒色粘土を埋土にもち、弥生中期の遺物を含んでいる。人为的な掘り込みではなく、自然形成の凹地と考えられた。



第40図 土層図

### 3. 遺構と遺物

本調査の遺物は、第Ⅲ層暗青灰色土上、第Ⅳ層上面の凹地に堆積した黒色粘土、第Ⅳ層砂礫より出土したものに分けられる。

#### (1) 第Ⅲ層暗青灰色土出土品 (第42~45図、図版18)

弥生時代中期の遺物が主体で、後期に比定されるものをわずかに含む。

##### 1) 弥生中期土器 (1~41)

変形土器 (1~11) 1~5は中型品、6・7は大型品である。1~4は折り曲げにより口縁部を形成するものである。2は内面に小さい突出部をもち、口縁端面には刻み目文をもつ。3は口縁部はやや渋曲して立ち上がり、口縁端部は先細りする。4は肩部の張りが強く、屈曲部内面には弱い稜をもつ。5は貼り付けによる口縁部をもつもので、口縁端面にはヨコ沈線文1条と刻み目文をもつ。胴部にはヘラ描き沈線文を5条以上もつ。平野内でも数少ない形態である。6・7は口縁部下に指頭圧による刻み目凸帯文をもつ。8~11は中一大型品の底部片である。くびれの上げ底を呈するものである。

1・2・5~7は中期前半、3・4は中期後半の特徴をもつものである。

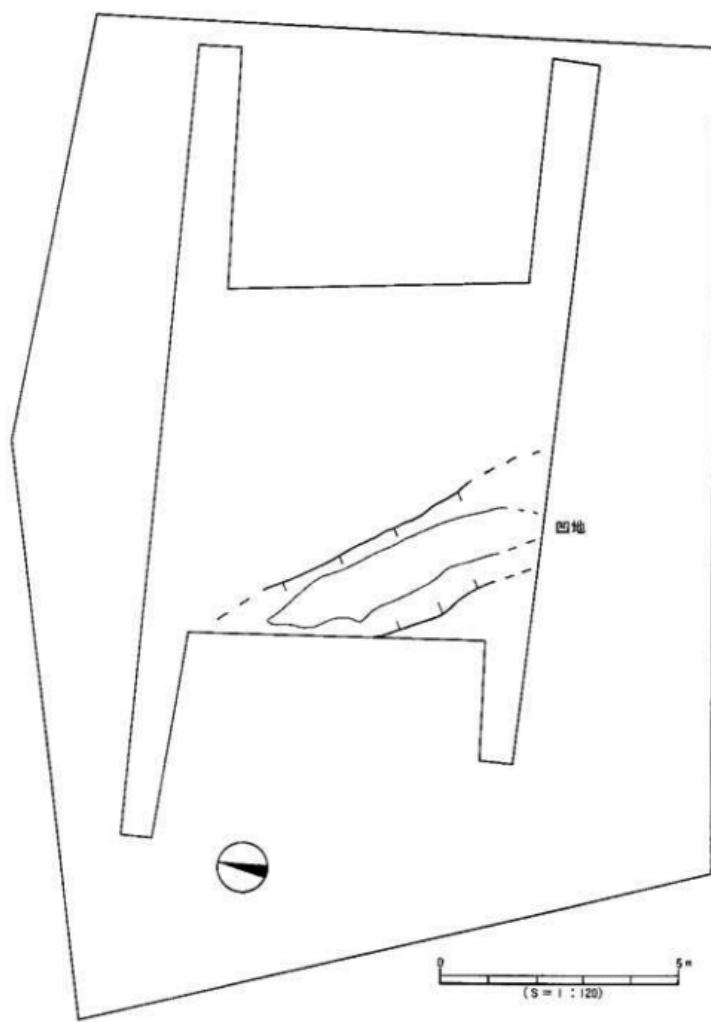
変形土器 (12~31) 12は外反する口縁部に、指頭圧による刻み目凸帯文を施すものである。13・14は直立する頸部に、短く外反する口縁部をもつものである。15~20は大きく外反する口縁部をもつものである。16・18は口縁部内面に円形浮文、19・20は凸帯による渦双文をもつ。また、口縁端部は下方に拡張させ、端面には山形文16・18・20や上端部に刻み目文を施すもの16・17がある。21・22は凸帯を施す頸部片である。21は指頭痕を、22は6本以上の凸帯とタテ方向の棒状浮文をもつ。23~25は大型品で口縁端部を拡張し、端面に斜格子目文、頸部には指頭圧による刻み目凸帯文を施すものである。26は大型品で、拡張した口縁部には5条の沈線文と円形浮文を施すものである。口縁端面にも1条の沈線文をもつ。27~29は中型品の口縁部片で、口縁端部に2~3条の沈線文を施すものである。30は細長頸壺の体部片である。器壁はやや薄く、大きい平底をもつ。31は厚い平底をもつものである。

12~25・30は中期前半、26~30は中期後半の遺跡を中心に出土するものである。

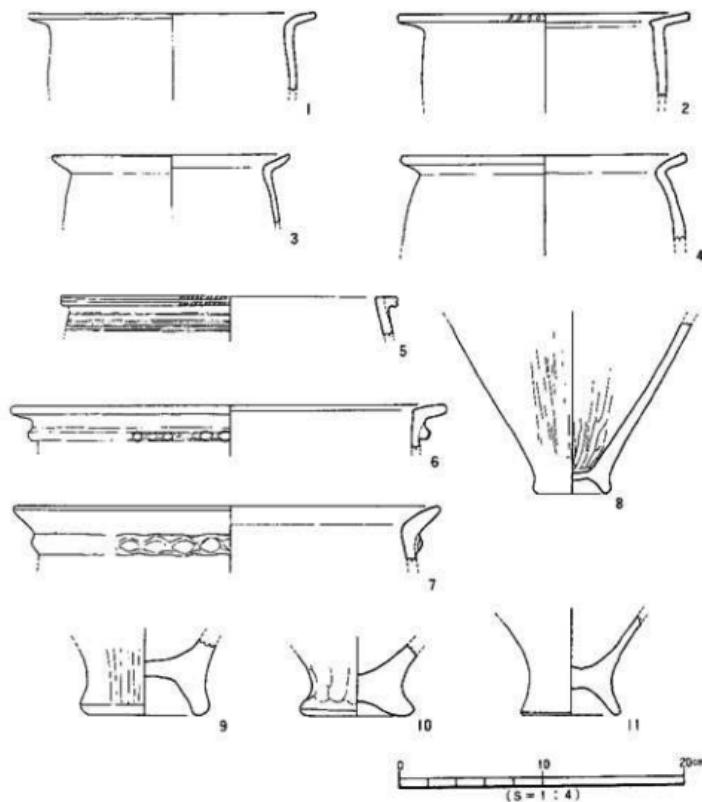
高坏形土器 (32~37) 32~34は円板充填技法をもちいるものである。長脚で、坏部は深く、「L」字状の口縁部をもつ高坏形土器になるものである。35は中実のものである。36はやや異形であるが、脚端部の内面がナデにより凹んでおり、端面に拡張傾向がうかがえるものである。37は坏部の円板充填部分が欠損しているものである。脚柱部には細沈線文と矢羽根透かしが交互に組み合うものである。

32~36は中期前半に、37は中期後半に属するものである。

ショッキ形土器 (38・39・41) 38・39は中型品で、39は直径4mmの小円孔が穿たれる。41は把手の破片である。



第41図 調査区測量図



第42図 第4層出土遺物実測図(I)

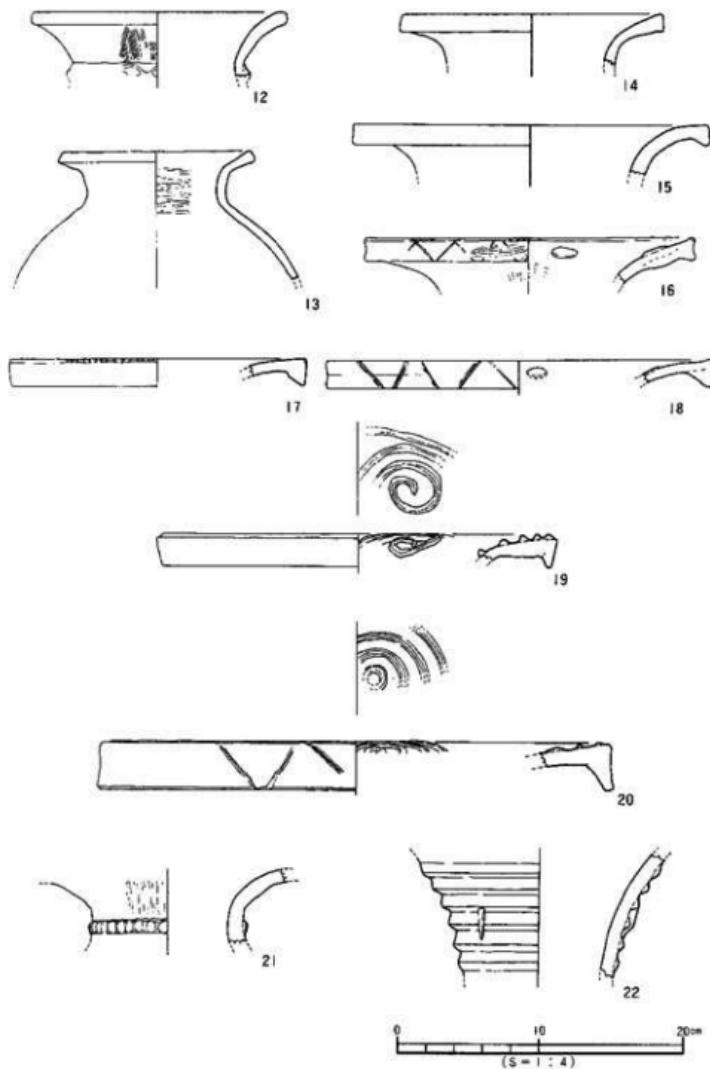
器種不明(40) 40は大型品で、一部で回転台状土器と呼ばれているものに近いものである。

## 2) 弥生後期土器(42~45)

變形土器(42・43) 42は「く」の字状の口縁部を呈し、口縁端面に2条の沈線文をもつものである。43は異形品である。著しく肩部が張るものである。

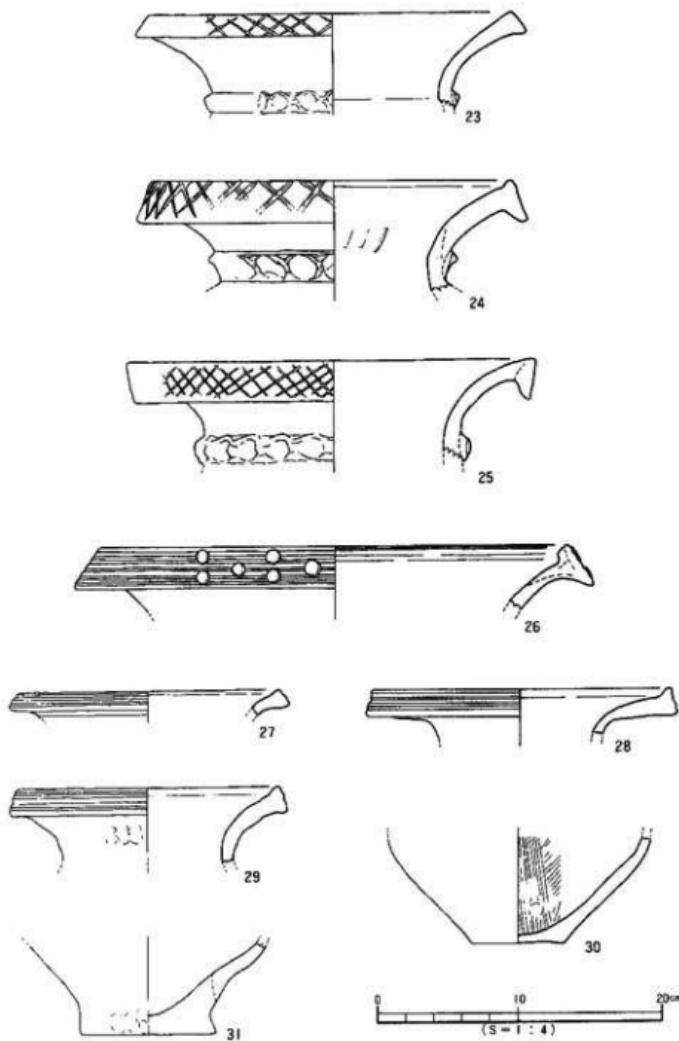
高坏形土器(44・45) 44は脚部片で、柱上部に6条、裾部に2条、脚端面に1条の沈線文をもつものである。脚内面はケズリ技法となる。45は柱部が短く、やや異形品である。

遺構と遺物



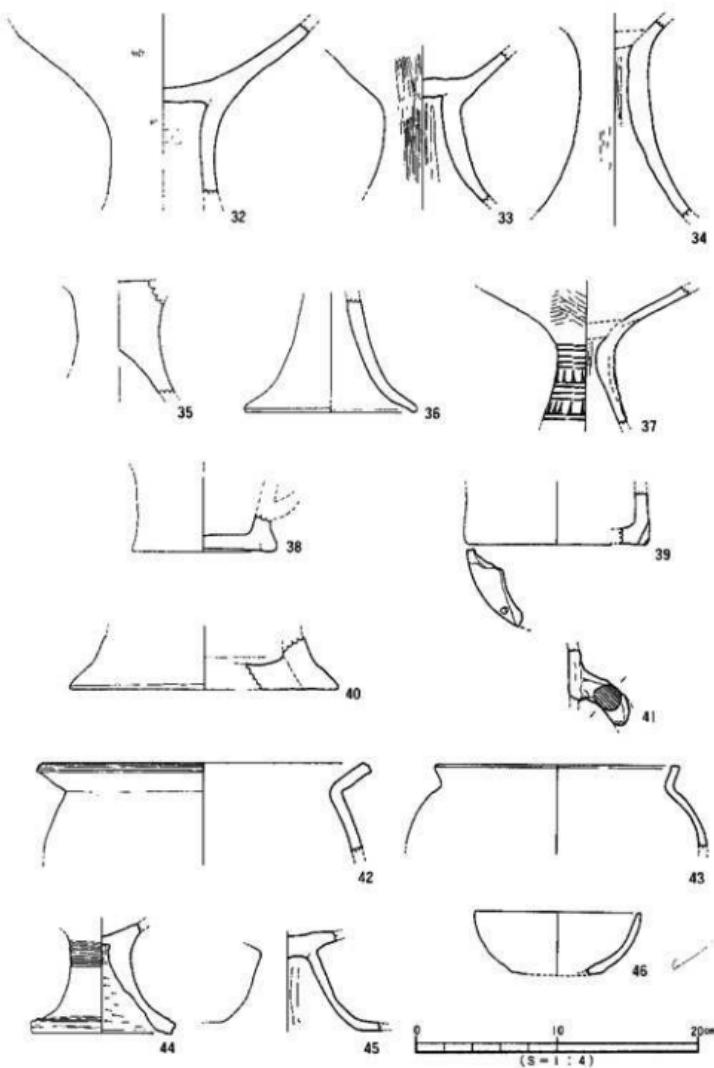
第43図 第III層出土遺物実測図(2)

祝谷大地ヶ田遺跡



第44図 第III層出土遺物実測図 (3)

造 構 と 遺 物



第45図 第III層出土遺物実測図(4)

## 3) 中世

46は土師器の环である。口径復元11.6cm、器高3.9cm、底部は摩滅して切りはなし技法は看取されず。

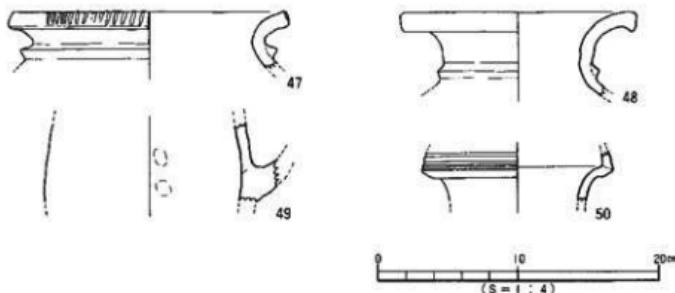
## (2) 黒色粘土出土品 (第46図、図版19)

菱形土器 (47) 47は中～大型品である。口縁端面に刻み目文、口縁部下に断面三角形の凸帯文をもつ。

壺形土器 (48・50) 48は中型品で、直立する頸部に外反する口縁部をもつものである。頸部に断面三角形の凸帯文をもつ。50は口縁部上端を大きく拡張させるものである。口縁部には沈線文を3条以上もつ。形態は平野出土のものに比べると異形となる。

ショッキ形土器 (49) 49は中型品である。把手がつく。

47～49は中期前半に属するもので、50は中期後半～後期初頭に比定されるものと考えている。



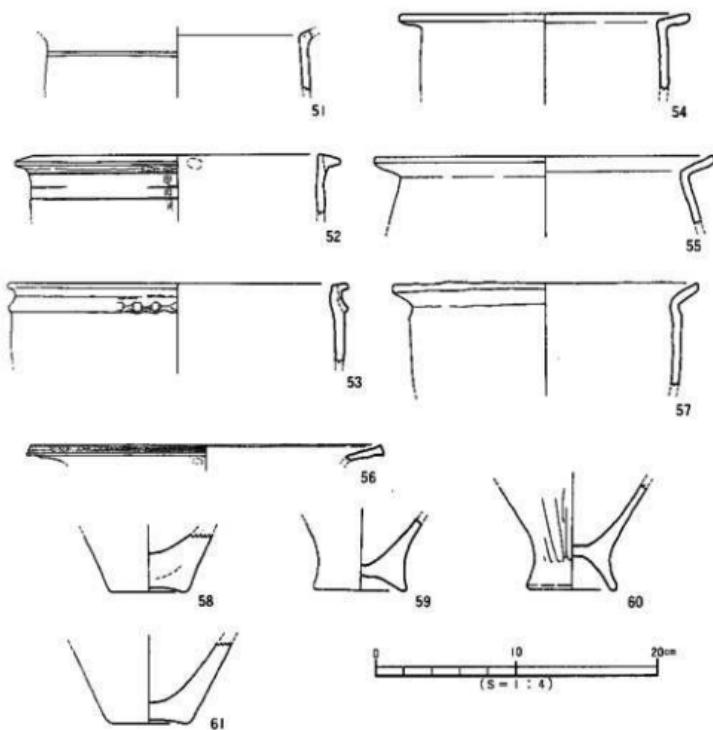
第46図 黒色粘土出土遺物実測図

## (3) 第IV層砂礫層出土品 (第47～49図、図版19)

## I) 弥生時代

菱形土器 (51～61) 51は稜を持って折り曲がる口縁部をもつものである。口縁部下にヘラ描き沈線文を1条もつ。52・53は貼り付けによる口縁部をもつものである。52は口縁部下にヘラ描き沈線文3条以上、53は指頭圧の刻み目をもつ凸帯を施す。54～57は折り曲がる口縁部をもつものである。56はナデによりわずかに拡張される口縁端面には沈線文を2条もつ。57は口縁屈曲部の外面は、ナデによる凹みをもつ。58～61は底部片である。58・61は小さい上げ底で、59・60はくびれの上げ底である。

51・52は弥生前期、53～55・58・61は弥生中期前半、56・57・59・60は弥生中期後半～後期初頭に属するものである。



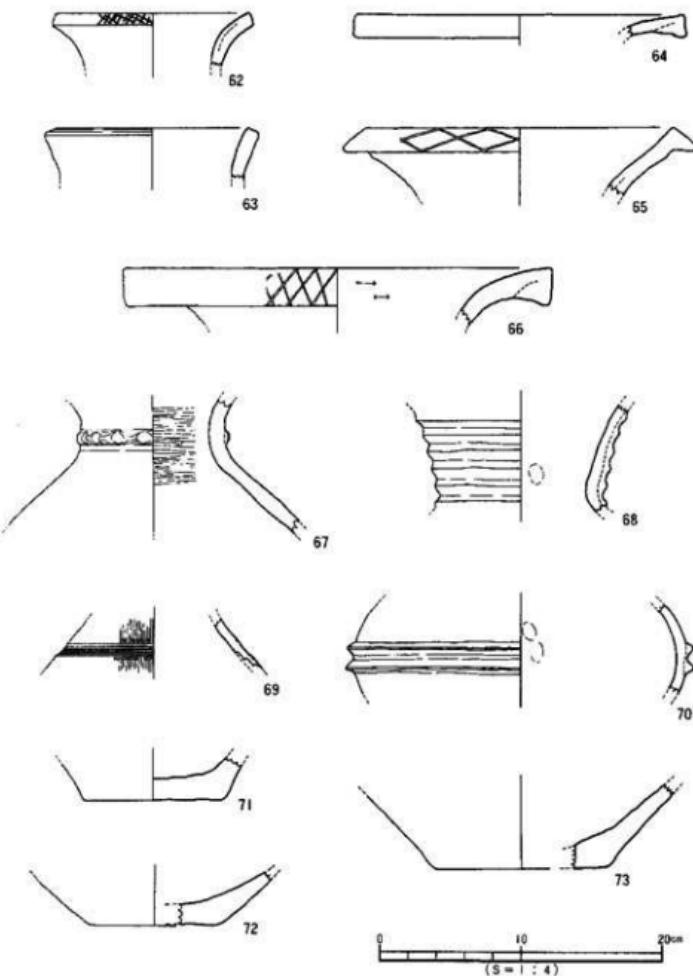
第47図 第IV層出土遺物実測図 (I)

壺形土器 (62~73) 62・63は外反が弱い口縁部をもつものである。62は口縁端部にヘラ書き斜格子目文をもつ。63は口縁端面はナデによる凹みをもつ。64~66は口縁部が大きく外反し、口縁端部が下方に拡張するものである。65・66は口縁端面に斜格子目文を施す。67・68は頸部片である。67は指頭圧による刻み目凸帯、68は断面三角形の凸帯を施す。69・70は体部片で、69は5条の櫛描き沈線文と2ヶ1組の刺突文、70は刻み目をもつM字状凸帯を施す。71~73は底部片で、大きい平底を呈する。

62~73は弥生時代中期前半に属するものである。

鉢形土器 (74) 74は内湾して立ち上がる口縁部をもつものである。古付鉢になるものと思われる。

祝谷大地ヶ田遺跡



第48図 第IV層出土遺物実測図(2)

高環形土器 (75~80) 75~79は環部、80は脚部である。75~77は口縁端部を内外に拡張し、断面形態が三角形を呈するものである。口縁外面に刻み目文を施す。78は外方への拡張が著しいものである。79は4条以上の凹線文をもつものである。80は円板充填が欠損するもので、75~77の環部形態をしたもののがつくものと思われる。

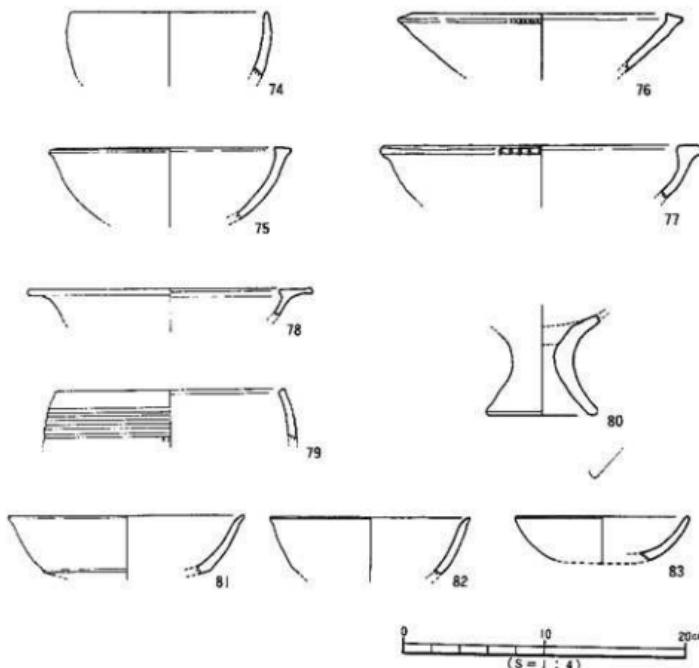
74~78・80は弥生中期前半、79は弥生中期後半に属するものである。

## 2) 古墳時代

高環 (81・82) 81・82は5世紀後半のものである。口縁部はゆるやかに外反し、環部の接合部には弱い段をもつ。

## 3) 中世

土師器環 (83) 83は13世紀代に属する環部片である。口径復元10.1cm、残高3.1cmである。

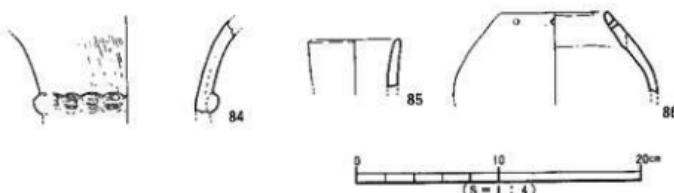


第49図 第IV層出土遺物実測図(3)

## (4) 表採品 (第50図、図版19)

壺形土器 (84~86) 84は頸部下端部に刻み目のある凸帯を施すものである。刻み目文は二重に押圧され、さらに内側では上下二段の刻み目となる。85はやや長い頸部で、直口口縁となるものである。86は無頸壺で、直径5mmの円孔が2ヶ穿たれる。

84~86は弥生中期前半に属するものと思われる。



第50図 表採遺物実測図

## 4. 小 結

今回の調査は、祝谷地区の弥生時代～古墳時代の集落構造解明を主目的とし、特に調査地が集落とどのような関係にあった土地かを明らかにしようとするものであった。

調査では、包含層を二層と一部分に堆積する黒色土壌（遺物を含む）を検出した。その一方では、遺構は検出されなかった。包含層では時期特定はできなかったが、第IV層は砂砾層であり、当地が第IV層堆積時まで河川であったことが明らかとなった。また、第III層が青灰色土層であるため、第IV層堆積後は湿地帯であったことが分かる。第III・IV層間に堆積する黒色土壌については、人為的な開発跡は検出できなかった。以上のことより、当地は第III層堆積までは居住としては適地でなく、当地が集落内の居住地として使用し始めたのは遅くとも近現代になってからとの想定ができる。

次に、出土遺物について分析する。出土遺物は、弥生時代中期前半に属するものが大多数を占め、弥生時代中期後半～後期初頭、古墳時代中期、中世の遺物が少量出土している。調査地の周囲には弥生中期前半は祝谷六丁場遺跡、同中期後半～後期初頭は祝谷六丁目遺跡、古墳時代中期～後期は祝谷アリ遺跡、中世は祝谷本村遺跡と、当地より100～650mの近隣地に集落関連遺構が確認されている。今回の遺物はそれ等が帰属する集落に関連するものと考えられる。特に、本調査地出土の弥生中期前半の土器と石器（未掲載）は、祝谷六丁場遺跡出土品と器種や器形・胎土・石材・焼成において酷似しており、祝谷六丁場遺跡と当地が密接な関係にあると想定されるものである。

## 小 結

以上、本調査における成果の一部を記述した。弥生～古墳時代において祝谷地区の集落は丘陵地上や傾斜地を居住地として利用し、谷部内にある微高地への居住化は、中世以降に徐々に開始され、本格的には近現代になり開始されることを本調査及び過去の調査により想定したい。本想定を提示し、本調査のまとめとする。

## 遺物観察表一凡例一（梅木謙一・水口あそい）

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

**法量欄** ( ) : 復元推定値

**形態・施文欄** 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胸部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部～底部。

**胎土・焼成欄** 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1～4) 多→「1～4 mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表4 第Ⅲ層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		<外面> 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径(30.2) 底高 5.5	ゆるやかに折り曲がる口縁部。 内面に縫をもつ。口縁端面刻み目。	マメツ	マメツ	乳白色	石英(1～5)		
						乳白色	◎		
2	甕	口径(20.4) 底高 6.0	折り曲げ口縁。内面に縫をもつ。口縁端面刻み目。	マメツ	マメツ	黄茶色	石英(1～3)		
						赤茶色	◎		
3	甕	口径(16.2) 底高 4.9	ゆるやかに折り曲がる口縁部。	マメツ	マメツ	黄褐色	石英(1～2)		
						黄褐色	◎		
4	甕	口径(19.8) 底高 5.4	折り曲げ口縁。内面に縫をもつ。	マメツ	マメツ	幼茶色	石英(1～4)		
						乳白色	◎		
5	甕	口径(23.0) 底高 2.8	折り付け口縁。口縁端に割み目とヘラ沈織1条。網形ヘラ沈織5条以上。	不明	ナシ	黄褐色	石英(1～2)		
						黄褐色	◎		18
6	甕	口径(30.4) 底高 3.1	内面に縫をもつ。指頭による割み目内凹。	マメツ	マメツ	乳白色	石英(1～4)		
						乳白色	◎		18
7	甕	口径(29.0) 底高 3.3	内面に弱い縫をもつ。指頭による割み目凸巻。	マメツ	マメツ	褐色	石英(1～4)		
						赤褐色	◎		

## 祝谷大地ヶ田遺跡

第三層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	箇 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼	備考	図版
				外 面	内 面				
8	甕	底径(5.6) 残高 12.2	小さいくびれの上げ底。 中形品。	ミガキ	ミガキ→ナテ	灰茶褐色 淡褐色	石灰(1~4) 金ウンモ	◎ スズ留置	
9	甕	底径 9.1 残高 5.5	大きな上げ底。大形品。	ミガキ	マメツ	灰黃褐色 灰黃褐色	石灰(1~4)		
10	甕	底径(8.1) 残高 5.1	くびれの大きな上げ底。 やや奥部品。中一太形品。	ナテ	ナア	紫褐色 淡茶褐色	石灰(1~4) 金ウンモ	◎	
11	甕	底径(6.0) 残高 7.1	くびれの上げ底。中形品。	マメツ	マメツ	淡茶褐色 淡褐色	石灰(1~4)	◎	
12	甕	口径(17.8) 残高 4.7	口縁による割み目のある内 唇。	ハケ→ナテ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石灰(1~4)	◎	
13	盃	口径(12.5)	口縁端面はナテにより、や や粗張される。	マメツ	⑫ マメツ ⑬ ミガキ(ヨコ) ⑭ マメツ	黄茶色 黄茶色	石灰(1~4)	◎	
14	甕	口径(18.0) 残高 3.6	口縁端面はナテにより、や や粗張される。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石灰(1~4)	◎	
15	盃	口径(24.0)	口縁端面は下方にやや張張 される。	ナテ	マメツ	淡茶褐色 淡灰茶色	石灰(1~4) 金ウンモ	◎	
16	甕	口径(23.0) 残高 3.5	口縁端面は下方にやや張張 し、端面に内形浮文(φ1.8cm)	ヨコナテ	マメツ	灰黃褐色 黃褐色	石灰(1~4)		
17	盃	口径(20.7) 残高 1.9	口縁端面は下方に張張。 上端面に割み目。	マメツ	マメツ	黃褐色 黃褐色	石灰(1~4)	◎	
18	盃	口径(21.2) 残高 2.0	口縁端面は下方に張張。 横2条の内形浮文。内唇に同 形浮文(φ1.7cm)	ヨコナテ	マメツ	黃褐色 黃褐色	石灰(1~4)	◎	
19	盃	口径(29.2) 残高 2.2	口縁端面は下方に張張。 内唇凸唇(淡双文)。	マメツ	マメツ	黃褐色 黃褐色	石灰(1~4) 金ウンモ	◎	18
20	甕	口径 36.0 残高 2.5	口縁端面は底下、端面は「ハ 」字文。内唇内壁(淡双文)。	ナテ	ナテ	淡灰褐色 淡灰褐色	石灰(1~4) 金ウンモ	◎	18
21	甕	残高 5.2	端面による割み目のある凸 唇。	ハケ(タテ)→ヨコナテ	ナテ(マメツ)	灰黃褐色 灰黃褐色	石灰(1~4)		
22	甕	残高 8.7	貼り付け凸唇 1本。 棒状浮文 1本。	マメツ	ナテ	灰茶色 暗褐色	石灰(1~4) 金ウンモ	◎	18
23	甕	口径(27.5) 残高 6.8	口縁端面はやや張張。 端面は斜格子目文。指痕によ る割み目凸唇。	マメツ	ミガキ(ヨコ・マメツ)	黃褐色 黃褐色	石灰(1~4)	◎	
24	甕	口径(25.2) 残高 7.5	口縁端面は底下。端面は斜 格子目文。指痕による割み 目凸唇。	ヨコナテ	⑪⑫ ヨコナテ ⑬ ハケ(ヨコ)→ヨコナテ	淡茶褐色 淡茶褐色	石灰(1~4)	◎	

第三層出土遺物觀察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面)色調(内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
25	壺	口徑(28.8) 残高 7.2	口縁部は膨らみ、縁部に斜めに凹凸。	ヨコナタツ	ミガキ(ココ・マツツ)	乳灰黄色 乳灰黄色	胎土(1~6) ◎		
26	壺	口徑(22.0) 残高 4.5	口縁部は上下に膨張。縁部に斜めに凹凸。	マメツ	マメツ	淡青茶色 淡青茶色	胎土(1~6) ◎	18	
27	壺	口徑(18.2) 残高 1.7	口縁部は上下にわざかに膨張。縁部に斜めの凹陥文。	ヨコナタツ	マメツ	茶褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎		
28	壺	口徑(20.9) 残高 3.4	口縁部は上下にわざかに膨張。縁部に2~3条の凹陥文。	マメツ	マメツ	茶褐色 暗褐色	胎土(1~6) 金ウシモ ◎		
29	壺	口徑(18.3) 残高 5.4	口縁部は上下にわざかに膨張。縁部に2~3条の凹陥文。	ナテ	マメツ	淡青茶色 灰褐色	胎土(1~6) ◎		
30	壺	底径 6.1 残高 7.5	幅広細底の体部。平底。	マメツ	ハテ(タテ)	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎		
31	壺	底径 9.4 残高 6.5	厚い大きな平底。大型品。	マメツ	ナテ	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) 組版		
32	高杯	残高 12.1	粗粒の厚い火焔品。内板充填技法。	マメツ	タテ ナテ	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎		
33	高杯	残高 10.6	長脚の中形品。内板充填技法。	ミガキ(タテ)	タテ レボリ版	暗茶褐色 暗茶褐色	胎土(1~3) ◎		
34	高杯	残高 8.4	長脚の中形品。内板充填技法。	ミガキ(タテ・マメツ)	シボリ版	乳灰黄色 乳灰色	胎土(1~3) ◎		
35	高杯	残高 8.0	粗文で、組み合せ技法。中形品。	マメツ	マメツ	乳灰褐色 乳灰褐色	胎土(1~3) ◎		
36	高杯	底径(12.2) 残高 8.1	脚部欠損。縫合部はわずかに突出する。	マメツ	マメツ	乳灰黄色 乳灰黄色	胎土(1~3) ◎		
37	高杯	残高 10.1	内板充填欠損。沈量5~6mm。内板充填技法以上。	ミガキ	タテ レボリ版	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎	18	
38	ジョッキ	底径(10.3) 残高 6.5	把手部欠損。中形品。	ナテ	ナテ	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎	18	
39	ジョッキ	底径(13.0) 残高 3.8	把手部欠損。中形品。	ナテ	マメツ	灰褐色 乳灰褐色	胎土(1~3) ◎	18	
40	不明	底径(18.0) 残高 3.6	ジョッキ形に形態は似る。器盤厚く、大きな突出部をもつ。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎	18	
41	把手	残高 5.0	ジョッキ形土器の把手部分。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	胎土(1~3) ◎		

## 祝谷大寺ヶ田遺跡

第三層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
42	甕	口径(22.8) 残高 6.4	口縁部に2条の沈縞文。	マメツ	マメツ	茶褐色 灰茶色	赤土(1-2) ◎		
43	甕	口径(15.6) 残高 5.2	ゆるやかに外反する腹かい。 内縫跡。	マメツ	マメツ	茶褐色 褐色	赤土(1-2) ◎		
44	高杯	底径 9.9 残高 7.8	柱部に沈縞 6条。底部に沈縞 2条。表面に沈縞 1条。	ナデ	④⑤ケズリ	淡茶色 暗茶褐色	赤土(1-2) ◎		18
45	高杯	残高 7.0	ゆるやかに大きめくぼく模様。	マメツ	④⑤ケズリ	乳白色 乳黃色	赤土 ◎		
46	杯	口径(11.6) 残高 3.9	丸みがあり、やや厚い底部。	マメツ	マメツ	乳黃褐色 乳黃褐色	赤土(1-2) ◎		

●表5 黒色粘土出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
47	甕	口径(20.0) 残高 4.1	折り曲げ口縫。口縁部斜め上。貼り付け凸巻。	ヨコナデ	ナデ	灰青褐色 灰黃褐色	赤土(1-2) ◎		19
48	甕	口径(17.0) 残高 6.0	口縁部曲がり下方に折返。腹部に貼り付け凸巻。	ナデ	マメツ	灰黃茶色 灰黃茶色	赤土(1-2) ◎		
49	手取鉢	残高 6.1	把手部既存。	マメツ	マメツ	淡褐色 茶褐色	赤土(1-2) ◎		
50	甕	残高 3.6	口縁部は上方に折返。沈縞文 3条。異形底。	ナデ	ナデ	暗灰色 灰茶色	赤土(1-2) ◎		19

●表6 第四層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
51	甕	残高 4.3	折り曲げ口縫。ヘラ化縞 1条。	ヨコナデ	ナデ(マメツ)	暗灰褐色 暗茶褐色	赤土(1-2) 金ウンモ ◎		19
52	甕	口径(20.4) 残高 4.6	貼り付け口縫。ヘラ化縞 3条以上。(マメツで不明)。	ヨコナデ	ナデ	灰褐色 灰茶褐色	赤土(1-2) 金ウンモ ◎		19
53	甕	口径(21.2) 残高 5.7	側面による割込み凸巻。	マメツ	ヨコナデ(一部マメツ)	灰褐色 灰茶色	赤土(1-2) 金ウンモ ◎		19
54	甕	口径(20.7) 残高 5.4	折り曲げ口縫。内縫に後もつ。	マメツ	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	赤土(1-2) 金ウンモ ◎		

## 小 結

第IV層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	重量(cm)	形態・施文	調 整		(外観) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
55	甕	口径(24.2) 底高 4.9	折り曲げ口縁。内面に接し つ。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 淡灰黄色	石・土(1~3) ○		
56	甕	口径(25.0) 底高 1.1	口縁端面はわずかに拡張。 端面に斜縮文。	ヨコナデ	マメツ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		
57	甕	口径(21.7) 底高 7.3	ゆるやかに折り曲がる口縁 部。圓曲部外側ナデ凹み。 ④ヨコナデ ④ナデ	④ヨコナデ ④ナデ	マメツ	灰茶色 灰黄色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		
58	甕	底径 5.5 底高 4.1	器壁の厚い口付甕。中形品。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		
59	甕	底径 5.1 底高 6.2	くびれの口付甕。中形品。	マメツ	マメツ	灰茶色 灰褐色	石・土(1~3) ○		
60	甕	口径 6.4 底高 7.5	大きくくびれる口付甕。 中形品。	ミガキ(タテ)	ミガキ(マメツ)	淡黄色 暗灰色	石・土(1~3) ○	スヌ付番	
61	甕	底径 5.7 底高 5.7	小さい口付甕。中形品。	マメツ	マメツ	淡茶色 淡茶色	砂粒 ○	黒度	
62	甕	口径(13.6) 底高 3.8	口縁端面に斜縮子目文。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 淡灰黄色	蜜 ○		19
63	甕	口径(15.3) 底高 3.7	口縁端面はナデ凹む。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		
64	甕	口径(13.8) 底高 1.6	口縁端面は下方に拡張。	ヨコナデ	ナデ	灰茶褐色 淡黄褐色	石・土(1~3) ○		
65	甕	口径(25.1) 底高 4.8	口縁端面は下方に拡張。 端面に斜削子目文。	マメツ	マメツ	淡灰色 淡灰色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		19
66	甕	口径(30.6) 底高 4.0	口縁端面は拡張。 端面に斜削子目文。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰黄色	石・土(1~3) ○		
67	甕	底高 9.6	折頭による折み目凸巻。	マメツ	④ミガキ(ヨコ) ④ナデ	灰褐色 黄褐色	石・土(1~3) ○		
68	甕	底高 7.7	折り付け凸巻 6本。	ナデ	ナデ	灰茶褐色 淡黄褐色	石・土(1~3) ○		19
69	甕	底高 4.0	断續さ文 2条。2ヶ1組の 側突文。上下2段。	ミガキ(タテ)→施文	マメツ	淡黄色 乳白色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		19
70	甕	底高 6.0	貼り付け凸巻。凸巻上に小 さい割み目。	ナデ	ハゲーナデ	灰褐色 暗灰褐色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		19
71	甕	底径 10.0 底高 3.1	大きく器壁の厚い平底。 中形品。	ナデ	マメツ	黑灰褐色 淡灰褐色	石・土(1~3) 金ウンモ ○		

第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
72	壺	口径(9.2) 残高 3.7	小さい土口底。 口縁はやかに外反。	マメツ	マメツ	暗茶褐色 灰褐色	石・長(1-4) ◎		
73	壺	口径(12.5) 残高 5.5	器壁の厚い平底。中軸部、 底口口縁で、瘤部丸い。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1-3) 金・シ・ンモ ◎		
74	鉢	口径(13.2) 残高 4.7	台付になる可能性あり。 底口口縁で、瘤部丸い。	マメツ	マメツ	黄茶色 黄茶色	石・長(1) ◎		
75	高杯	口径(17.0) 残高 5.1	口縁端裏面内外に彫刻。 端部外側に刷込み目。	ナテ	ナテ	灰褐色 暗茶褐色	石・長(1-3) ◎	スズ留	
76	高杯	口径(20.0) 残高 4.2	口縁端裏面内外に彫刻。 端部外側に刷込み目。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1-3) ◎		
77	高杯	口径(22.0) 残高 3.8	口縁端裏面内外に彫刻。 端部外側に刷込み目。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長(1-3) ◎		
78	高杯	口径(20.0) 残高 2.1	口縁端裏面内外に大きめ彫刻。	ヨコナテ	ヨコナテ	暗褐色 灰褐色	石・長(1-3) ◎	回頭	19
79	高杯	口径(16.4) 残高 3.7	口縁外側に圓錐文 4 条以上。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰茶色 灰茶色	石・長(1-3) 金・シ・ンモ ◎		19
80	高杯	口径(7.9) 残高 7.3	円板充填部分欠損。	ミガキ(マメツ)	ナテ(マメツ)	灰褐色 灰褐色	石・長(1-3) 金・シ・ンモ ◎		
81	高杯	口径(16.8) 残高 4.1	口縁部はゆるやかに外反。 接合部にわずかに段をもつ。	マメツ	マメツ	青褐色 青褐色	石・長(1-3) ◎		
82	高杯	口径(14.0) 残高 4.0	口縁部はゆるやかに外反。 接合部にわずかに段をもつ。	ナテ	ナテ	灰褐色 灰褐色	青 ◎		
83	环	口径(10.1) 残高 3.1	開口して立ち上がる口縁部。	ナテ(マメツ)	ナテ(マメツ)	白茶色 灰褐色	石・長(1-3) ◎		

●表7 表探遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
84	壺	残高 6.5	取手付け凸唇。凸唇は押抜 し一枚に刻み目。	ハケ(タテ2~3本/1cm)	ミガキ(ヨコ・マメツ)	灰茶色 灰茶色	石・長(1-4) ◎		19
85	壺	口径(6.0) 残高 3.1	灰口口縁。	マメツ	マメツ	明茶色 黄褐色	石・長(1-3) ◎		
86	壺	口径(7.0) 残高 5.9	無底壺。底径 5 mm 大の円孔 2ヶ1組。	マメツ	ナテ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1-3) ◎		19

## 第5章 祝谷地区の弥生時代資料

### 1. はじめに

松山平野の北に位置する道後城北遺跡群は弥生時代において、平野の主要な地域として機能していた（下條 信行 1991）。この遺跡群からは平鋼銅劍、前漢鏡、破鏡、仿製鏡、ガラス製品等が出土し、遺跡の重要性を立証している。

道後城北遺跡群は東側の道後地区、北側の祝谷地区、西側の城北地区の3つの地区からなる。各々が一貫し弥生時代において集落を經營している。

本稿では、祝谷地区的集落解明のため、過去に調査及び採集された資料を提示し、祝谷地区的資料充実につとめるものである。

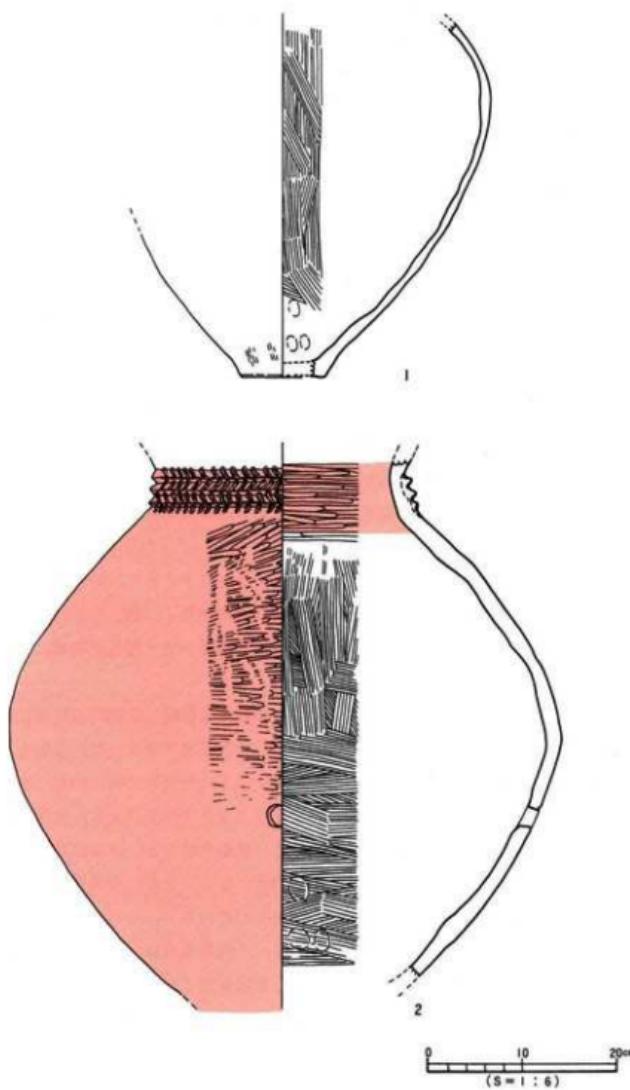
### 2. 祝谷六丁目遺跡（註1、松山市 1980 第51図、図版24・25）

祝谷六丁目遺跡は、祝谷地区の中央を流れる丸山川右岸の丘陵地上に立地する。弥生時代遺構は、竪穴式住居址1基と土壙10数基、壺棺2基が検出されている。このうち1号壺棺からは歯と貝製鋲が出土しており、注目されるものとなっている（下條 信行 1991）。1号壺棺は古墳の石室南より出土した壺棺で、棺蓋と考えられる壺形土器は墳丘構築時に削平され棺身の周囲にて出土している。

第51図-1 棺蓋となる壺形土器である。胴上半部はナナメに欠損する。埋葬時に意図的に欠損したものと思われる。体部形態は、肩部は張りが強く、胴下半部は張りが弱い。底部は一部が残存し、やや厚目の底部である。調整は外面はナナメ刷毛目調整、内面はタテ刷毛目調整である。

第51図-2 棺身となる壺形土器である。口縁部は埋葬時に意図的に欠損したものと思われる。底部は現状では欠損しているが、調査時の状況が定かでないため当初より欠損していたかは不明である。胴部は著しく中位が張り、中位下に焼成後穿孔（円形）が1ヶある。頸部は屈曲部に凸帯を貼り付け、凸帯上には刻み目（工具の押圧による）を施す。調整は、外面は胴下半部は磨滅し不明であるが、上半部はヘラ磨きとなる。内面は頸部はヨコヘラ磨き、胴上半部はタテ刷毛目、下半部はヨコ刷毛目調整となる。なお、体部外面と頸部内面に朱が塗れる。棺内からは、歯と貝製鋲（2点）が出土している。

以上が貝製鋲が削葬された壺棺の詳細である。これ等2点は、平野出土品に類例が少なく、また口・底部が欠損するなど時期決定に有効な部位を欠くが、棺身の頸部の刻み目凸帯文や棺蓋の体部形態より、弥生時代中期後半～後期前葉の間に属するものと考える。



第51図 祝谷六丁目遺跡出土遺物実測図

### 3. 祝谷1丁目出土資料

昭和51年、祝谷1丁目の道路拡幅及び駐車場建設において、コンテナ（ $60 \times 45 \times 14\text{cm}$ ）14箱分の土器が出土した。出土土器は弥生土器で、工事に伴う掘削にて掘りおこされ土壤中より採集したものである。出土地点や土層等、正確な出土状況は分からない（註2）。出土地点は、道後鶯谷町に接する場所で、遺跡としては道後地区に属するものと考える。また、白鳳時代の瓦を出土した湯の町廃寺跡に比定されている地点は100mと離れていない。出土資料は第52～55図で、以下その特徴を記述する。

#### 1) 弥生中期（第52図、図版20）

夔形土器（1） 1はL字形状の口縁部をもつ。端部は丸みをもつものとなる。

壺形土器（2～8） 2は外傾外反する口頭部をもつものである。口縁端部は下方に拡張し、頭部に指頭押圧の凸帯文を施す。3は胴部が球形に張るもので、頭部に工具による刻み目をもつ凸帯文を施す。4は口頭部が外反するもので、凸帯文上の指頭圧は2ヶ1組となり施される。5は頸脛部片で、頸部に断面三角形の凸帯文2本、脣部には円形浮文2ヶが施される。6は頸部片で、凸帯文（6本）上には工具による刻み目文をもつ。また、棒状の浮文がつく。7は口縁部片で、口縁端部は下方に拡張し、上端部には工具による刻み目文が施される。8は直立する頭部に外傾する口縁部をもつものである。口縁端面には、2条の凹線文が施される。肩部には、線刻文（記号）と思われる3条のタテ沈線がみられる。

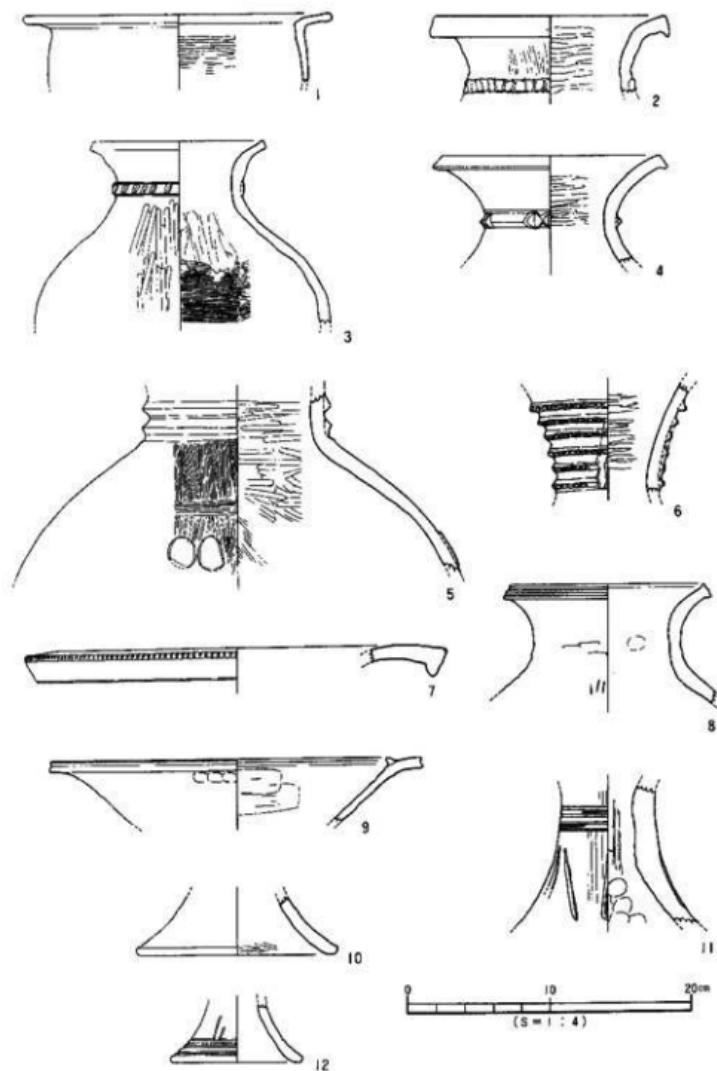
高壺形土器（9～12） 9は壺部、10～12は脚部片である。9は内側に貼り付けにより突出部をつくる。口縁端面はナデによる凹みをもつ。10はゆるやかに外反する脣部をもつ。脚端部が一部垂平となる。11は柱上部に4条のラ線状のヘラ描き沈線文をもつ。柱上部にはヘラ描きによる山形状の沈線文様がある。12は脣部に5条の沈線文と矢羽根状の沈線文をもつ。脚端部は丸く仕上げられる。

1～7・9・10は弥生中期前半、8・11は中期後半、12は中期後半～後期初頭に属するものである。

#### 2) 弥生後期（第53～55図、図版21～23）

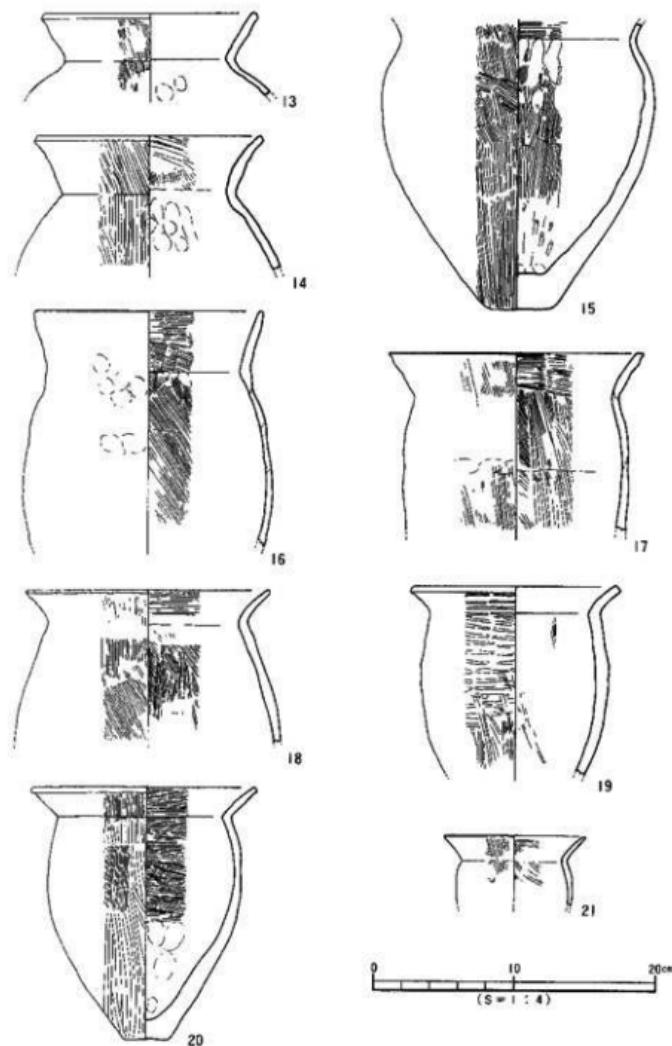
夔形土器（13～21） 13～15は中・大型品で口縁部が長く、肩部の張りが強いものである。口縁内面の稜が強いもの13とやや弱いもの14・15がある。16～18は中・大型品で口縁部が長く、脣部の張りが弱いものである。19は口縁部がやや短く、脣部の張りが弱いものである。叩き痕が著しく残る。20・21は脣部径が口径に対し小さいものである。内面に稜をもつ。13～18・20・21は刷毛日調整が主体となり、19だけが叩き技法が著しく看取されるものである。

壺形土器（22～29） 22～28は複合口縁壺である。22～24は、複合口縁接合部（以下「接合部」と記す）が、「コ」字状を呈するものである。22は3段の梅描き波状文、23はヨコ方向の直線文と波状文をもつ。25～28は接合部が「く」の字状を呈するものである。25はヨコ方向の直線文、26は直線文と波状文、27は波状文を口縁部に施す。27は直立する頭部には15条



第52図 祝谷1丁目出土遺物実測図 (I)

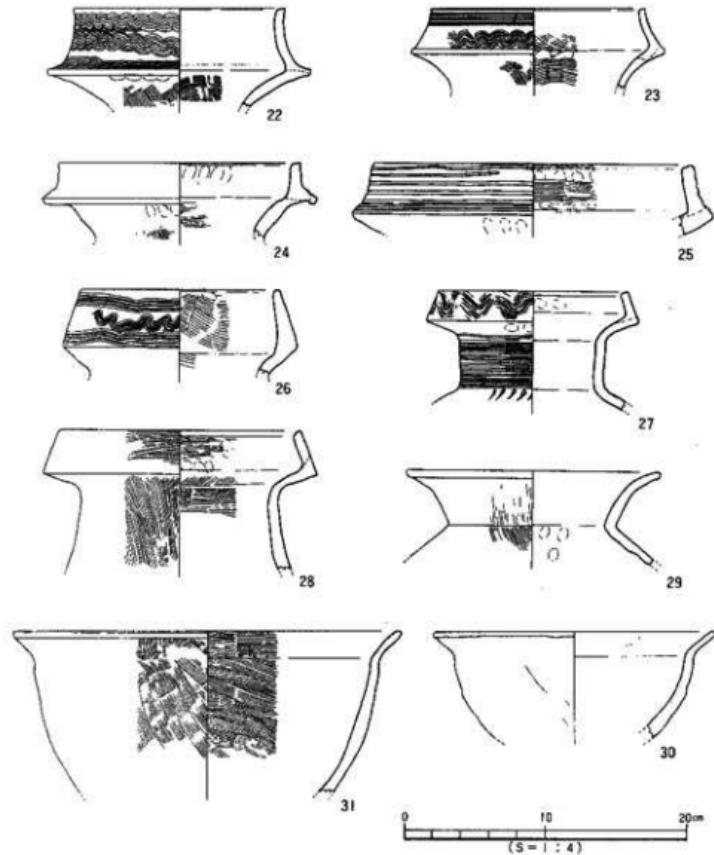
祝谷1丁目出土資料



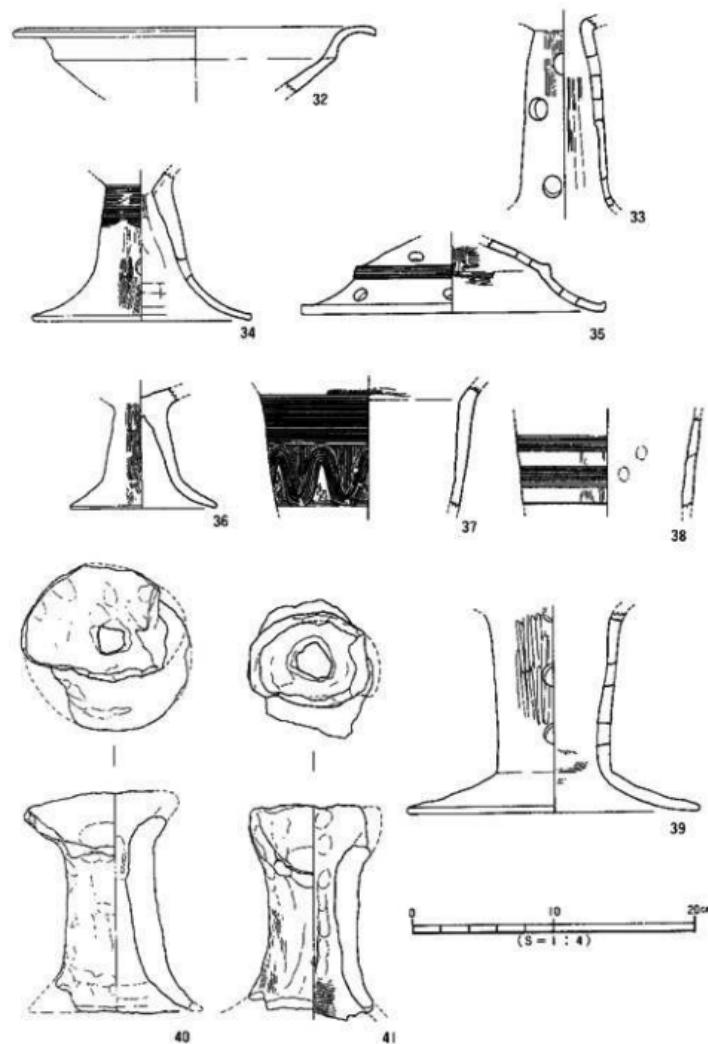
第53図 祝谷1丁目出土遺物実測図(2)

以上の直線文、肩部には刺突文を施す。28は内傾する長い頸部をもつ。27・28は平野出土の同時期資料とはやや異なる頸部形態をもつ。29は大きく広がる口縁部をもつものである。

鉢形土器（30・31）30・31は同形態を呈し、外傾して立ち上がる長い口縁部をもつものである。内面に弱い稜をもつ。



第54図 祝谷I丁目出土遺物実測図(3)



第55図 祝谷1丁目出土遺物実測図(4)

**高环形土器（32～36）** 32は環部片である。水平に大きく開く口縁部をもつ。33は脚柱部片である。大型の円孔（直径1.5cm）を三段に施す。34は脚部片で、柱上部に細沈線文を15条以上と、柱裾部間に円孔（直径1.0cm大）を施す。35は脚裾部片である。二段で大きく外反する裾部となる。上段は円孔（直径1.1cm）、上下段間に細沈線文、下段には円孔（直径1.1cm）が施される。36は脚部片である。ゆるやかに開く裾部をもつ。無文である。

**器台形土器（37～39）** 37は器台形土器の柱部と考えるが、やや異形態なものである。横描き沈線文間に波状文を施す。38は柱部片で、沈線文が3組以上施される。39は柱部～裾部片である。柱部に円孔（直径1.4cm大）が3段以上施される。

**支脚形土器（40・41）** 40・41は受部が傾斜するものである。器壁は厚く、粗雑なつくりとなる。

以上の13～41の弥生後期土器は、その特徴より後期末に属するものである。

祝谷1丁目出土品は、弥生時代中期と後期末の資料であるといえる。出土状況に不明な点があるが、出土地点周間に同時期の集落が存在することを想定可能とするものであろう。

#### 4.まとめ

道後城北遺跡群では、若草町遺跡（相原 浩二他 1991）で弥生後期末の墳墓が知られるが、墳墓の資料は多いとはいえない（註3）。また、平野内の墳墓は、平野南にある西野・土壇原遺跡（長井 敦秋 他 1979）が丘陵上に立地する以外は、低地に經營する事例が多数を占める。祝谷六丁目遺跡の壹棺墓は道後城北及び丘陵地上に立地する弥生墳墓の例としては稀少であり、貴重な資料といえる。加えて貝製鉗が出土したこと、松山平野内での評価にとどまらず、西日本という広い視野で評価される資料といえる。

祝谷1丁目出土品は、弥生中期と後期末の資料である。出土地は先述したが、道後地区に含まれる遺跡である。道後地区の中期資料は道後鷺谷遺跡に出土例があり、本事例を加え道後地区丘陵地における弥生中期の集落構造解明の一つの資料となるものである。弥生後期末の道後地区的状況は、道後姫塚遺跡では住居址が出土しており、丘陵地への居住化が明らかとなっている。本資料は、道後姫塚遺跡住居址資料（第56・57図）とは大きな時期差がなく、かつ出土品は完形品に近いものもあり、弥生後期末の道後地区丘陵地への居住が広く展開していたことを裏づけるものとして評価される資料である。

祝谷六丁目遺跡、祝谷1丁目出土資料は、道後城北遺跡群が弥生中期以降、丘陵地を居住域や墓域として活発に開発していたことを裏づける一つの資料として評価されるだろう。

近年、弥生～古墳時代における傾斜地での居住化が祝谷六丁場遺跡（宮崎 泰好 1991）や祝谷アイリ遺跡（梅木 謙一 1992）で明らかとなりつつある。今後は丘陵地上及び丘陵の傾斜地について調査を進めその構造について解明するとともに、低地にある集落との比較検討をし道後城北遺跡群の弥生集落について追求しなければならないだろう。

## ま　と　め

### 〔註〕

- 1 本遺跡は「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ」(松山市教育委員会 1987, p.33)にて、「32 祝谷遺跡」と呼称されているものである。また、「松山市史料集 第1巻 考古編」(松山市教育委員会 1980, p.557)にて「12 祝谷六丁目の土壙墓と住居址」という記述がなされている。近年、祝谷町では埋蔵文化財調査が多数実施され、遺跡名を「祝谷(字名)遺跡」としている。本調査地については、近年「祝谷六丁目遺跡」として文献記述されている他整理事業等において「祝谷六丁目遺跡」を使用している。よって、本稿では本調査地の遺跡名は「祝谷六丁目遺跡」として記述するものである。
- 2 森 光晴氏の御教示による。
- 3 本刊作成中に、松山市持田町にて弥生前期の土壙墓群が検出された。

### 【文 献】

- 下條 信行 1991 「松山平野と道後城北の弥生文化—西瀬戸内の対外交流—」『松山大学構内遺跡』 松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 松山市史料集編さん委員会 1980 「松山市史料集」
- 相原 浩二・栗田 茂敏 1991 「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 長井 敦秋・土房 隆子 1979 「西野田遺跡」「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書」 愛媛県教育委員会
- 宮崎 泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 梅木 謙一 1992 「祝谷アイリ遺跡」 御松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

### 遺物観察表一覧例 (梅木謙一・水口あさい)

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

**法量欄** ( ) : 復元推定値

**形態・施文欄** 上器の各部位名称を略記。

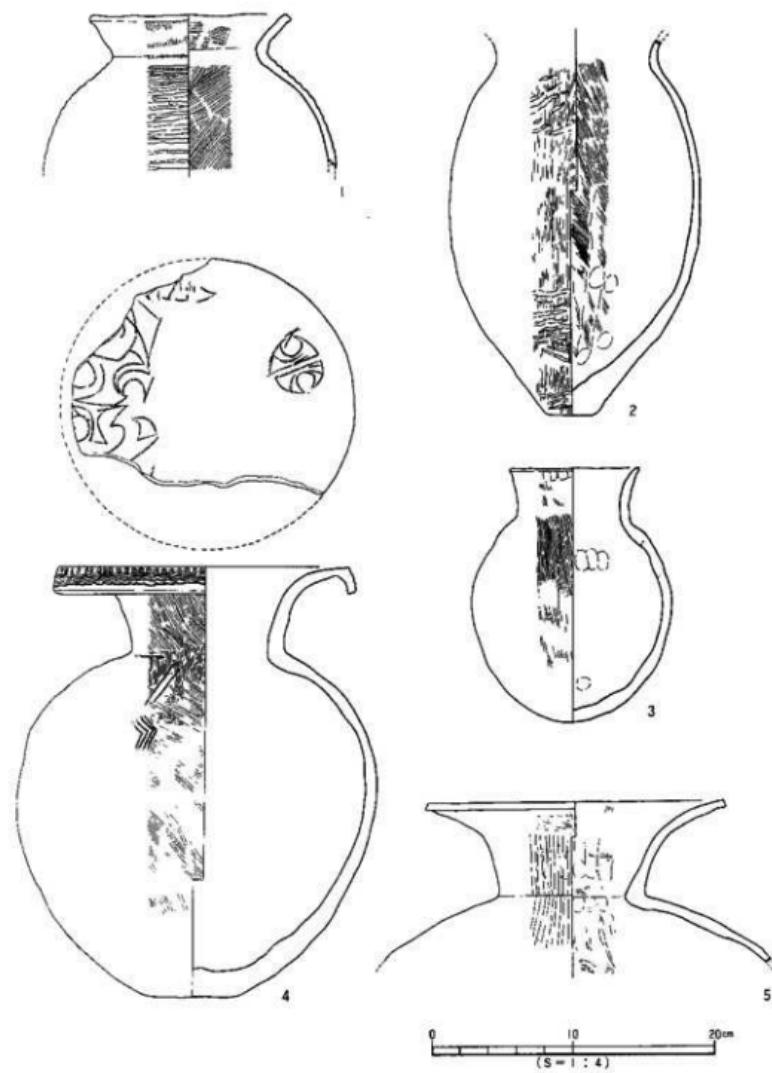
例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部～底部。

**胎土・焼成欄** 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

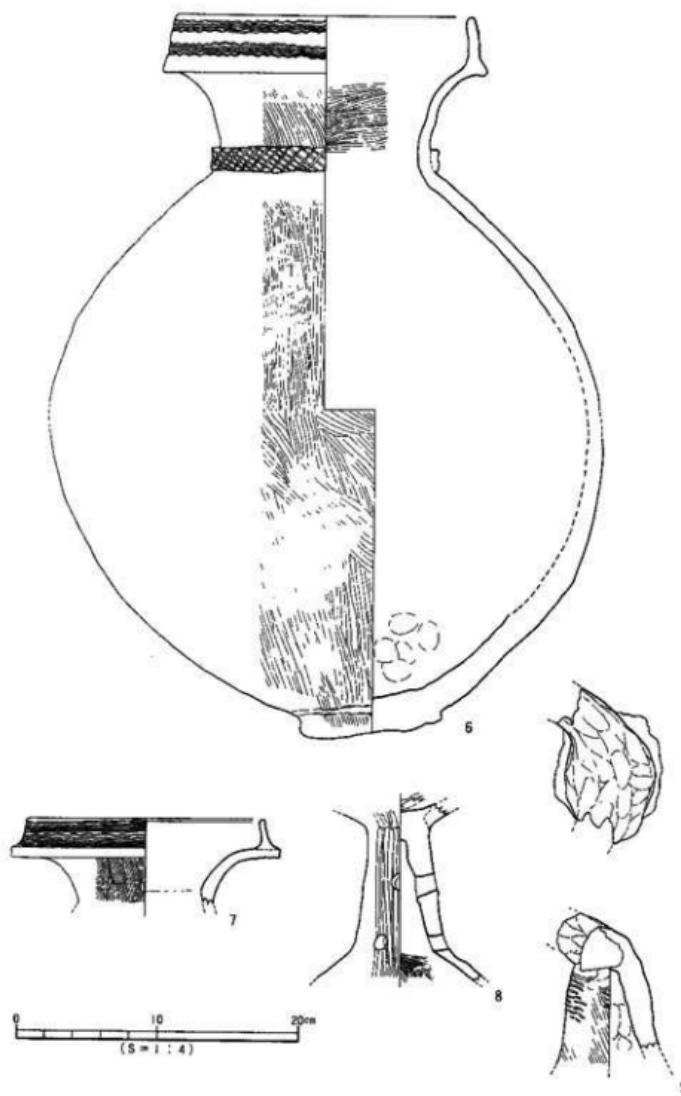
例) 石・長 (1~4) 多→「1~4 mmの大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。



第56図 道後姫塚遺跡出土遺物実測図 (1)

まとめ



第57図 道後姫塚遺跡出土遺物実測図(2)

## 祝谷地区の弥生時代資料

●表8 祝谷六丁目遺跡出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	土	直径(9.4) 残高 37.5	底部強く弧る。底部や中央 へ平底。側面部打ち欠き。	ハケ(ナナメ・マツツ)	ハケ(テテ)	黄茶褐色 黄茶褐色	石灰(II-8) 石灰(II-8)	黒斑	24
2	土	残高 34.6	底部内側。刃み目あり。燒 痕後守空。赤色顔料内面 壁。	1カキ(ココ)	④ミガキ(ココ) ⑤ハケ(テテ) ⑥ハケ(ココ)	赤褐色 黄褐色	石灰(II-8) 石灰(II-8)	24 25	

●表9 祝谷1丁目出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	土	口径(21.4) 残高 4.8	折り曲げ口縫。内面に縫を もつ。	ハケ→ヨコナデ	⑦ヨコナデ ⑧ミガキ(ココ)	明茶褐色 多褐色	石灰(II-2) 金ウンモ ○		
2	土	口径(16.4) 残高 5.5	口縫端部下方に鉈彫。底縫 による割み目をもつ凸唇。	⑨ヨコナデ ⑩ハケ→ヨコナデ	⑪ヨコナデ ⑫ミガキ(ココ)	黄茶褐色 黄茶褐色	石灰(II-8) 金ウンモ ○		
3	土	口径 12.0 残高 12.8	剝み目をもつ内唇。	⑬ヨコナデ ⑭ミガキ(テテ)	⑮ヨコナデ ⑯ハケ(ココ)+ナデ	桜茶色 桜茶色	石灰(II-2) 桜茶色 ○		29
4	土	口径(15.3) 残高 7.8	口縫端部下方に鉈彫。凸 唇は、部分的に擦痕(2 ヶ1組)を有す。	ナデ	ミガキ(ヨコ)	灰褐色 灰褐色	石灰(II-8) ○		29
5	土	残高 14.5	内縫を2本もつ。円形浮文 (φ1.4~2.7cm)3ヶ。商標 記複文(7条以上)。	ハケ	ミガキ(一部ハケ)	乳茶色 黒褐色	石灰(II-2) ○		29
6	土	残高 8.2	點付け凸唇6本。剝み目 と擦痕浮文をもつ。	ヨコナデ	ミガキ(ココ)	乳茶褐色 灰褐色	石灰(II-8) ○		29
7	土	口径(29.7) 残高 2.2	口縫端部下方に鉈彫。端縫 上端に剥み目をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色 乳茶色	石灰(II-2) ○		
8	土	口径(13.6) 残高 8.5	口縫端部わずかに上下に鉈 彫。縫縫には2組の擦痕。 鉈彫と想われる3条の縫。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石灰(II-2) 金ウンモ ○		29
9	高环	口径 26.2 残高 1.5	内縫に点付凸唇。 輪面ナデ凹み。	ナデ(マツツ)	カキ取り(ココ)	茶褐色 明茶色	石灰(II-2) 金ウンモ ○		29
10	高环	直径(12.6) 残高 1.2	輪縫は、底面縫をもつ。	ミガキ(テテ・マツツ)	マメツ(一部ハケ)	孔茶褐色 孔茶褐色	石灰(II-2) ○		
11	高环	残高 9.7	柱上部へラ洗縫4条。 柱基J部へによる山形文。	ミガキ(テテ・マツツ)	シボリ底 ナデ	深茶褐色 茶褐色	石灰(II-2) ○		29
12	高环	直径(8.4) 残高 4.2	矢羽根状のヘラ洗縫。 柱基ヘラ洗縫5条。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石灰(II-2) ○		29
13	土	口径(14.0) 残高 5.9	長い口縫縫。内縫に縫をも つ。	ハケ(9本/1cm)	マメツ	灰褐色 桜茶褐色	石灰(II-2) ○		29
14	土	口径(15.8) 残高 9.5	長い口縫縫	ハケ(6本/1cm)	⑫ハケ(4~5本/1cm) ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石灰(II-2) 金ウンモ ○		29
15	土	口径 4.6 残高 20.5	脇縫強く張る。唇縫厚い。	ハケ(5本/1cm)	①②ハケ(4~5本/1cm) ナデ	黄茶色 暗褐色	石灰(II-2) ○		29
16	土	口径(15.6) 残高 16.6	長い口縫縫。脇縫張り強い。 内縫に縫をもつ。	ナデ(指輪底調査)	⑫ハケ(ココ~8本/1cm) ⑬ハケ(ナメ~8本/1cm)	乳茶褐色 乳茶褐色	石灰(II-2) 金ウンモ ○		29

## まとめ

祝谷1丁目出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
17	甕	口径(19.0) 底高 12.5	長い口縁部。制器張り無い。 ⑤ ナデ ⑥ ハケ(タテ7本/cm)	④ ハケ(タテ7本/cm)	⑪ ハケ(ヨコ8本/cm) ⑫ ハケ(タテ6本/cm)	乳黄褐色 乳黄褐色	セ-リ-3	○	21
18	甕	口径(17.3) 底高 10.7	横幅の張り無い。内面に弱い棱をもつ。	⑪ ハケ・ヨコナデ 弱 ハケ	⑪ ハケ(ヨコ) ⑫ ハケ(タテ)	茶褐色 孔黄褐色	セ(セ-リ)金ウンモ	○	21
19	甕	口径(14.2) 底高 13.4	叩き成形。口縁部短かい。 内面に棱をもつ。	タタキ ⑤ ハケ	⑪ ナデ ⑫ ハケ-ナデ	黄灰褐色 灰灰褐色	石(セ-リ)	墨痕	21
20	甕	口径(15.0) 底高 17.7 底径 3.2	胴中段強く弧る。小さい平底。 内面に棱をもつ。	④ ハケ(タテ9~10本/cm) ⑤ ハケ(タテ3~4本/cm)	⑪ ハケ(ヨコ) ⑫ ハケ(ヨコ8本/cm) ⑬ ナデ	赤茶褐色 黄褐色	セ-リ-3	○	22
21	甕	口径(10.0) 底高 5.0	長い口縁部。内面に弱い棱をもつ。	ハケ(タテ6~9本/cm) -圓ナデ	ハケ(一部ナデ)	淡灰褐色 淡黄褐色	セ(セ-リ)金ウンモ	○	21
22	甕	口径(15.1) 底高 7.0	複合口縁。横幅波状文6本→7本→7条。	② ヨコナデ→施文 ④ ハケ(タテ15本/cm)	⑪ ナデ ⑫ ハケ(ヨコ5~7本/cm)	褐色 淡褐色	セ-リ-3 セウンモ	○	22
23	甕	口径(15.0) 底高 5.7	複合口縁。横幅波状文6条→波状文6条。	① ヨコナデ→施文 ② ハケ	⑪ ハケ-ヨコナデ ⑫ ハケ(4~5本/cm)	淡灰茶色 淡黄褐色	セ-リ-3 金ウンモ	○	22
24	甕	口径(15.5) 底高 5.4	複合口縁。口縁接合部下方に直下する。端合板取。	② ヨコナデ ④ ハケ(タテ10~12本/cm)	⑪ ナデ ⑫ ハケ(マツメ)	乳黄褐色 淡黄褐色	石(セ-リ)		
25	甕	口径(22.5) 底高 5.0	複合口縁。沈縫5条。	① ヨコナデ→施文	ハケ(ヨコ) 一部ナデ	赤茶色 赤茶色	セ 金ウンモ	○	22
26	甕	口径(14.1) 底高 5.9	複合口縁。横幅波状文4条→波状文4条→波瓣文4条。	マメツ 施文	ハケ(ヨコ4本/cm)	淡灰褐色 淡黄褐色	セ-リ-3 金ウンモ	○	22
27	甕	口径(13.6) 底高 8.4	横幅波状文5条→波瓣文15条以上→斜文。	① 施文 ② ハケ→施文	⑪ ヨコナデ ⑫ マツメ	灰茶色 灰茶色	石(セ-リ)		22
28	甕	口径(17.1) 底高 9.8	複合口縁。内面する無出。	① ハケ(ヨコ) ② ハケ(タテ)	⑪ ハケ(ヨコ・一部ナデ) ⑫ ハケ(ヨコ→一部ナデ)	乳白色 乳白色	セ-リ-3 金ウンモ	○	22
29	甕	口径(18.1) 底高 6.5	広口口縁。内面に弱い棱をもつ。	① ハケ(タテ)→ヨコナデ ② ハケ(タテ)・ナデ	ナデ	黄褐色 黑色・黒褐色	セ(セ-リ)金ウンモ		
30	甕	口径(27.7)	内面に弱い棱をもって折り曲がる口縁部。	① ハケ(タテ)→ヨコナデ ② ハケ(ナナメ) ③ ナデ	⑪ ハケ(ヨコ) ⑫ ハケ(ナナメ) ⑬ ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石(セ-リ)金ウンモ	○	
31	甕	口径(19.6) 底高 7.6	内面に棱をもって折り曲がる口縁部。	① ヨコナデ 弱 マメツ	マメツ	暗茶色 暗茶色	石(セ-リ)		
32	高环	口径(25.0) 底高 4.7	大きく外反する口縁部。	② ヨコナデ ④ マメツ	⑪ ヨコナデ ⑫ マメツ	暗茶褐色 暗茶褐色	セ-リ-3 金ウンモ	○	
33	高环	底高 13.5	長脚。円孔(φ1.5cm)4ヶ3段以上。器壁高い。	ミガキ(タテ)	ナデ	淡褐色 淡褐色	セ 金ウンモ	○	
34	高环	底高(15.0) 底高 10.6	柱上部西縁直面15条以上。 円孔(φ1cm)4ヶ。	④ ミガキ(タテ) ⑤ ハケ(タテ)	⑪ レボリ版 ⑫ ナデ	灰灰茶色 灰灰茶色	セ-リ-3 金ウンモ	○	23

## 祝谷地区の弥生時代資料

祝谷1丁目出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
35	高环	底径(21.0) 残高 2.2	有底高輪。段部取り付け西 部、各段部に円孔(Φ1.1cm)。 ナメ→施文	⑩ハケ ⑪ナメ	淡黄褐色 淡褐色	白灰(1-3) ○		23	
36	高环	底径(10.5) 残高 5.5	外反する高輪は細かい。 組合式。	ハケ(タチ10本/cm)	ナメ	淡茶褐色 淡茶褐色	白灰(1-3) 金ウンモ ○		
37	箱口	残高 8.7	器口とそぐる。飾括縦施文 20条→接舷文7~8条。	施文	ナメ	淡灰褐色 灰褐色	白灰(1-3) 金ウンモ ○	23	
38	器内	残高 6.5	沈継文6条、3段以上。	マメツ	マメツ	淡褐色 淡茶褐色	白灰(1-3) 金ウンモ ○	23	
39	器口	底径(20.0) 残高 14.3	円孔(Φ1.1cm)3ヶ2段以上。	ミガキ(ナメ)	マメツ	乳白色 乳白色	白灰(1-3) ○	23	
40	支脚	口径(11.0) 残高 15.6	底部に焼附する。 基盤小さい。	ナメ(接舷施文)	ナメ	暗茶褐色 暗茶褐色	白灰(1-3) ○	23	
41	支脚	口径(9.0) 残高 12.3	底部は焼附する。 基盤厚い。	ハケ→ナメ	⑩ナメ ⑪ハケ	海紙茶色 海紙茶色	白灰(1-3) 金ウンモ ○	23	

●表10 道後姫塚遺跡出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	釜	口径(13.2) 残高 11.0	叩き抜法。底部色く變る。 内面に弱い膜もつ。	⑩ハケ(タチ8本/cm) ⑪ヨコナメ ⑫タクキ(一部ハケ)	⑬ハケ(タチ10本/cm) →ヨコナメ ⑭ハケ(ナメ7本/cm)	青褐色 黃褐色	白灰(1-3) ○		
2	釜	底径 3.5 残高 26.7	瓶頭で厚く小さい平底。叩 き抜法。口跡部欠損。	ハケ→タタキ	ハケ(10本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	白灰(1-3) ○	無記	
3	釜	口径 9.0 残高 17.8	蝶形の体部。	ハケ	⑮ヨコナメ ⑯ナメ	淡茶褐色 淡茶褐色	白灰(1-3) ○	無記	
4	釜	口径 20.5 残高 30.5	丸みのある平底。口跡部 竹葉文と波文5条。口跡 内面と体部に焼附。	ハケ(11本/cm)	⑰ヨコナメ ⑱ハケ→ナメ ⑲ナメ	青褐色 黃褐色	白灰(1-3) ○	無記	
5	釜	口径(21.0) 残高 11.3	外反する口部部。痕部内面 に弱い膜。	⑳ハケ→ヨコナメ ㉑ハケ→ミカキ(タチ) ㉒ハケ→ミガキ(タチ)	㉓ハケ→ヨコナメ ㉔ハケ→ナメ ㉕ハケ→ナメ	淡茶褐色 淡茶褐色	白灰(1-3) 金ウンモ ○		
6	釜	口径 20.8 残高 51.2 底径 10.0	突出する手底。11棒部波状 文5条2段。痕部凸凹→斜 筋子目文。	ハケ(5~6本/cm)	㉖ココナメ ㉗ハケ(ヨコ) ㉘ナメ	褐色 褐色	砂粒 ○	七点引 出目文	
7	釜	口径(16.8) 残高 6.0	口縁部横波状文6条2段。 裏蓋な施文。	㉙ハケ(10~11本/cm)	㉚ヨコナメ ㉛ハケ→ヨコナメ	青褐色 淡褐色	白灰(1-3) ○		
8	高环	残高 12.5	円孔(Φ1.1cm)4ヶ2段。 痕部は弱い膜をもたらす。	㉜ミガキ(ナメ) ㉝ハケ→ミガキ(ナメ)	㉞ナメ ㉟ハケ(10本/cm)	素褐色 淡褐色	白灰(1-3) ○		
9	支脚	残高 10.6	支え下2本。叩き抜法。 接舷施文。基盤厚い。	ナメ・タタキ・ハケ	ナメ	淡茶色 淡茶色	白灰(1-3) ○	無記	

## 第6章 調査の成果と課題

本刊では、道後地区的2遺跡、祝谷地区的1遺跡についての調査報告と祝谷地区出土の弥生資料についてその紹介を行った。以下、その成果と課題を各地区に対して記述するものとする。

### 道後地区

**弥生時代** 道後地区では、低地の道後今市遺跡と丘陵地の道後姫塚遺跡が代表的遺跡として知られるところであった。

低地では、これまでの調査等より西側の道後地区と城北地区の境界地（道後地区的西端部）において平形銅劍が発見され、南側では前期の土坑や中期後半の竪穴式住居址が検出されている。道後地区的南半部は居住地域であることが明らかとなっている。一方、北側の祝谷地区との境界地は、河川の氾濫原であり砂層および旧河道が検出され、居住地としての機能は有していないかったものと考えられていた。今回の調査地は道後地区的北西部にあり、旧河川の氾濫地域であることが想定されていた。よって今回の9次調査はその裏付けと平形銅劍が出土した道後櫛又遺跡は調査地の南西90mにあり、平形銅劍埋納遺構の関連資料を追求することを目的的としていた。調査の結果、弥生時代と特定できる土壤は検出できなかったが、同地が中世にいたって生産可能な土地になったことを確認したことは間接的ながらも同地の弥生時代以降の土地利用を解く資料となるものであると考える。くわえて調査地は弥生時代、旧河川の氾濫原であったことが充分に考えられ、同地が集落の北端に位置することが推定されるものといえる。さらに埋納地が集落の居住地よりやや離れた外縁に選地されたことを想定する一つの資料となるものではないかとも考えている。

丘陵地においては、丘陵上及び傾斜地での居住が前期末から後期末まで活発であったことを道後鷺谷遺跡と祝谷1丁目、道後姫塚遺跡等より判断される。丘陵直下の土地は道後鷺谷遺跡や道後今市遺跡の北東部での調査により、その一部は旧河川の氾濫原であったことが明らかになっている。よって居住を丘陵地に求めざるを得なかったという立地条件が今回の調査においても追従されるところであった。

**古墳時代** 5世紀～6世紀前半の竪穴式住居址が道後今市遺跡の南部と道後姫塚遺跡で確認されている。これ等の集落立地は弥生時代中期後半以降の居住地と同じ選地であり、同地域に安定的に居住していたことを示す資料であろう。今回の2つの調査では、遺構の検出には至らなかったが、同時期の遺物が出土していることより、調査地周辺に居住地があったことを示唆する資料といえ、今後は調査において参考資料となるものである。一方では、今回の調査においても前期の資料は未確認であり、道後地区的古墳前期の集落様相を知るに至らなかった。今後の調査に期待したい。

### 祝谷地区

**弥生時代** 祝谷六丁場遺跡、土居窓遺跡、祝谷アイリ遺跡の調査より前期末～後期前半の集落が丘陵地上に展開していたことが明らかになっている。祝谷大地ヶ田遺跡は、祝谷地区の低地部が中期前半に安定した土地でなかったことを示す資料となり、さらには丘陵地での居住が必然的であったことを推定させる資料の一となるものであろう。また、祝谷六丁目遺跡資料は、中期後半～後期前葉における墳墓形態を示す資料であり、これは道後城北遺跡としても数少ない資料であり注目されるものである。貝製剣の出土は、祝谷六丁場遺跡の平形鋼劍出土とも関連するところであり、祝谷地区的集落構造の分析と再評価を求められるものといえるだろう。

**古墳時代** 後期古墳が丘陵地上に存在することが古くより知られ、近年の調査により傾斜地に居住地があることも明らかになってきた。祝谷大地ヶ田遺跡出土の土師器は、周辺の丘陵に居住地があることを示す一つの資料となり、5世紀後半以降の丘陵地や特に傾斜地での居住地開発の分析と検討を提示するものとなった。

**古代～中世** 祝谷本村遺跡では古代～中世の生活関連遺構が確認されており、祝谷地区での集落經營の一部を知るにいたっている。今回の祝谷大地ヶ田遺跡は、祝谷本村遺跡の上流地にあたる。祝谷大地ヶ田遺跡出土の資料は、中世の集落が祝谷本村遺跡よりも上流域にて集落を展開していたことを示す資料となるものである。今後の調査では、祝谷地区的古代～中世の集落形態をも明らかにし、弥生～古墳時代との比較分析を進めなければならないだろう。

以上、今回の調査及び既存の資料より、集落の立地（居住地の選地）という視点で遺跡の展開を考えてみた。道後・祝谷地区的丘陵地が、旧河川と関係し丘陵上及び傾斜地に居住が強く求められていたことが一部ではあるが明らかとなつたと考える。一方では、道後今市遺跡南部や城北地区の低地においても集落經營はなされており、今後はこの両者の集落内の動態分析と両者の関係を解明することが課題であると考えている。

なお、本刊作成にあたり公立学校共済組合道後宿泊所にぎたつ会館には、資料の実見や作業上の配慮、愛媛大学下條信行氏、森 光晴氏には助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

# 写 真 図 版

## 写真図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67  
ニコンニューFM2 他  
レンズ ペンタックス67 75mmF4.5 他  
ズームニッコール28~85mm 他  
フィルム プラスXパン・EPP  
ネオンパンSS

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュー45G  
レンズ ジンマーS240mmF5.6 他  
ストロボ コメット/C A-32 2灯・C B2400 2灯(パンク使用)  
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウェイトスタンド101  
フィルム 白黒 プラスXパン4×5 カラー EPP4×5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

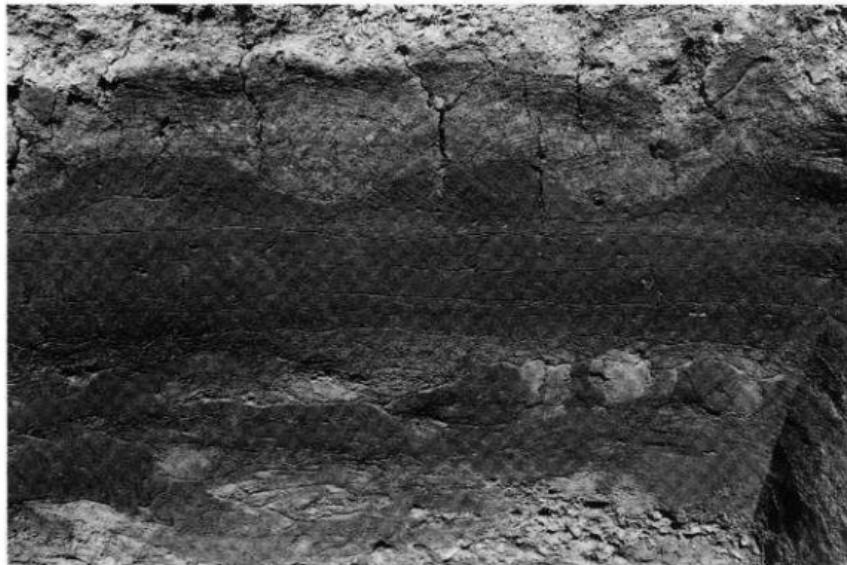
引伸機 ラッキー450MD  
ラッキー90MS  
レンズ エル・ニッコール135mmF5.6A  
エル・ニッコール50mmF2.8N  
印画紙 イルフォードマルチグレードMRC

4. 製版 150 線

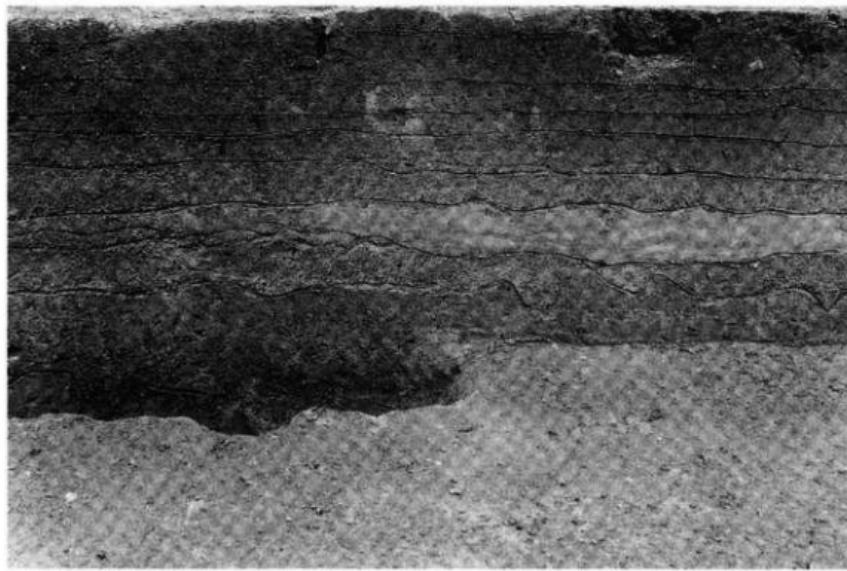
印刷 オフセット印刷  
用紙 マットカラー110kg

【参考】『埋文写真研究』V o l . 1 ~ 4

(大西 朋子)



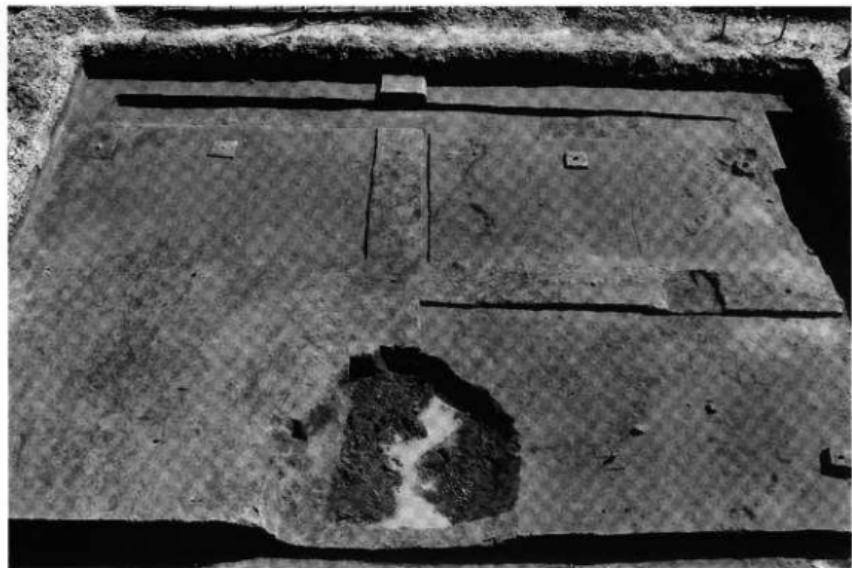
1 調査区北壁土層（南より）



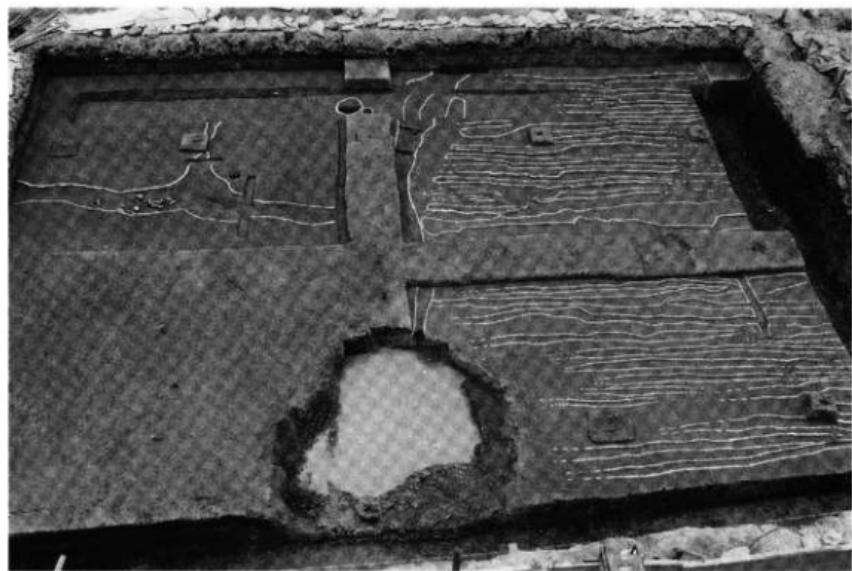
2 1 区ベルト南壁土層（北より）

道後今市遺跡9次調査地

図版二



1 遺構面1検出状況（北より）

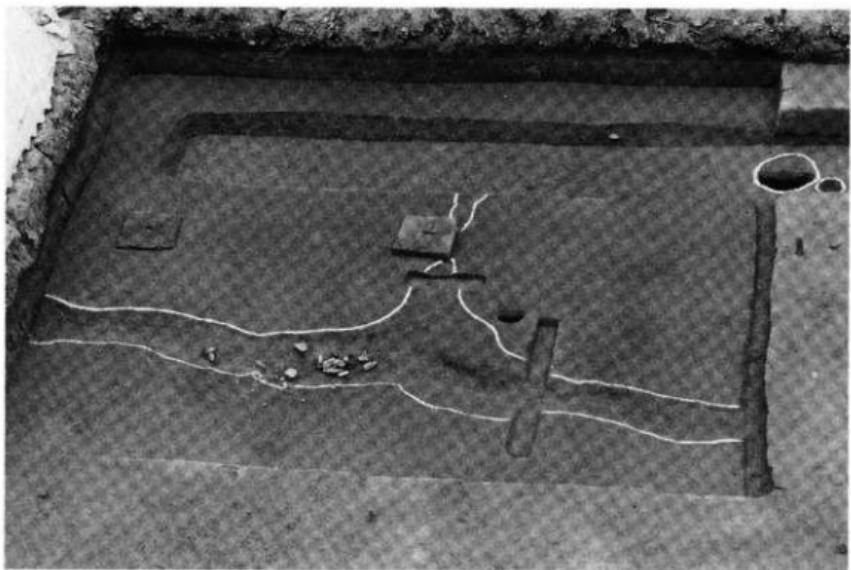


2 遺構面2完掘状況（北より）

## 道後今市遺跡 9次調査地



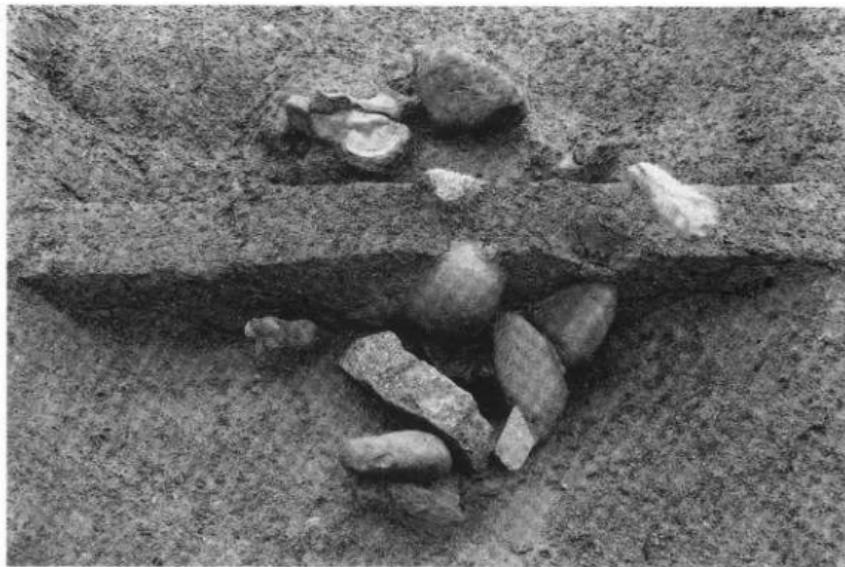
1 3区遺構面2完掘状況（西より）



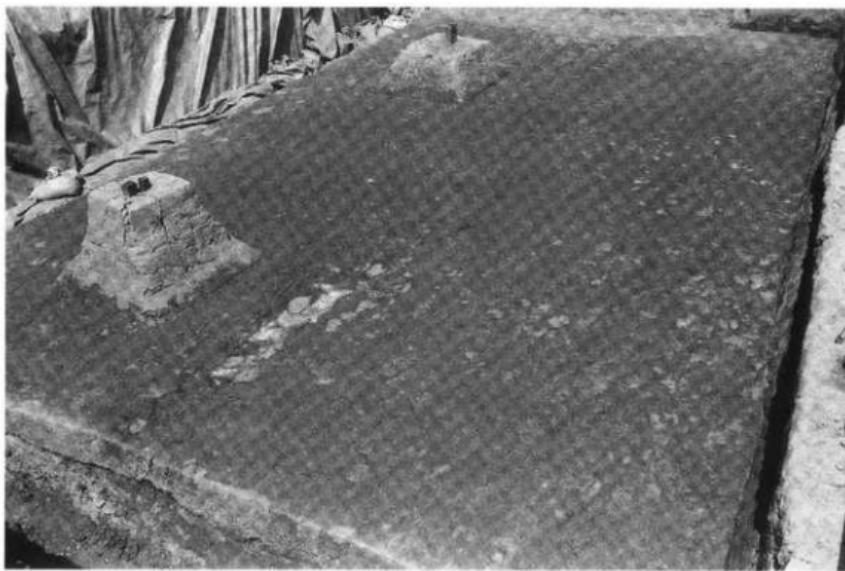
2 4区遺構面2完掘状況（北より）

道後今市道路 9 次調査地

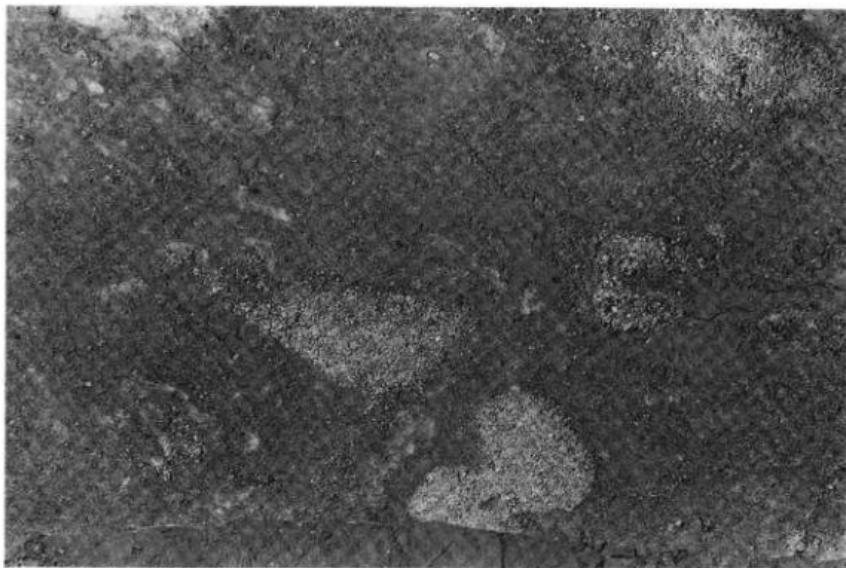
図版



1 4 区 SD1集石遺構（西より）



2 1 区造構面4 検出状況（南西より）

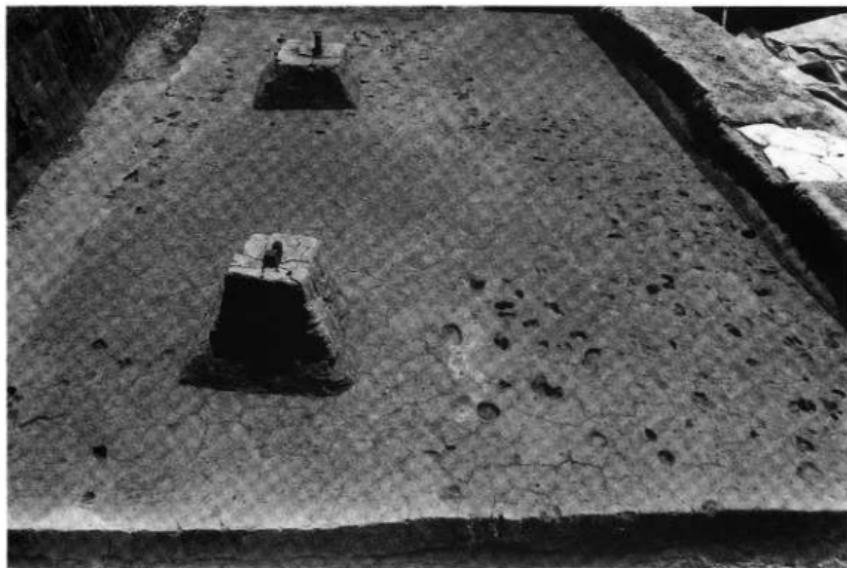


1 1区遺構面 4 足跡検出状況（北より）

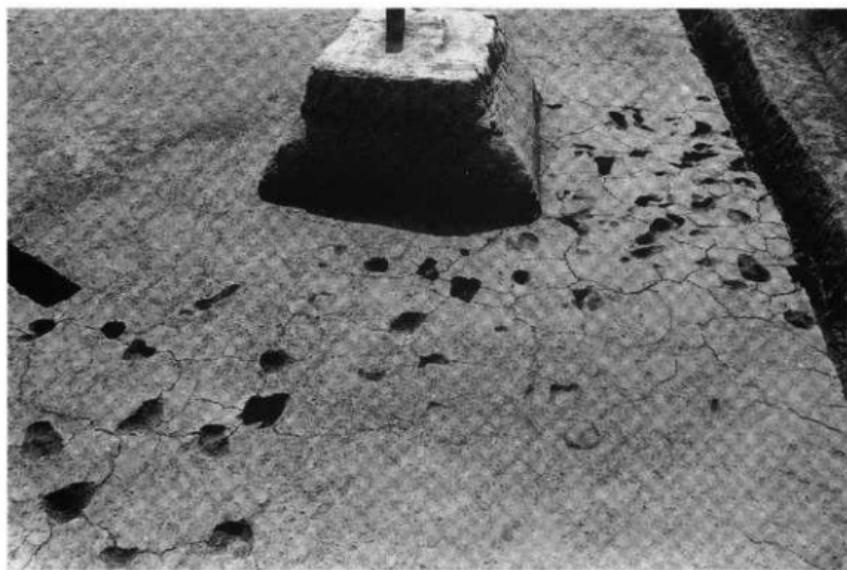


2 1区遺構面 4 足跡完掘状況（北より）

図版六



1 1区遺構面4 完掘状況（西より）



2 1区遺構面5 完掘状況（東より）

道後今市遺跡 9次調査地

図版七



1 1区造構面 6 完掘状況（東より）



2 完掘状況（北より）

図版八



48



25



45



37



36



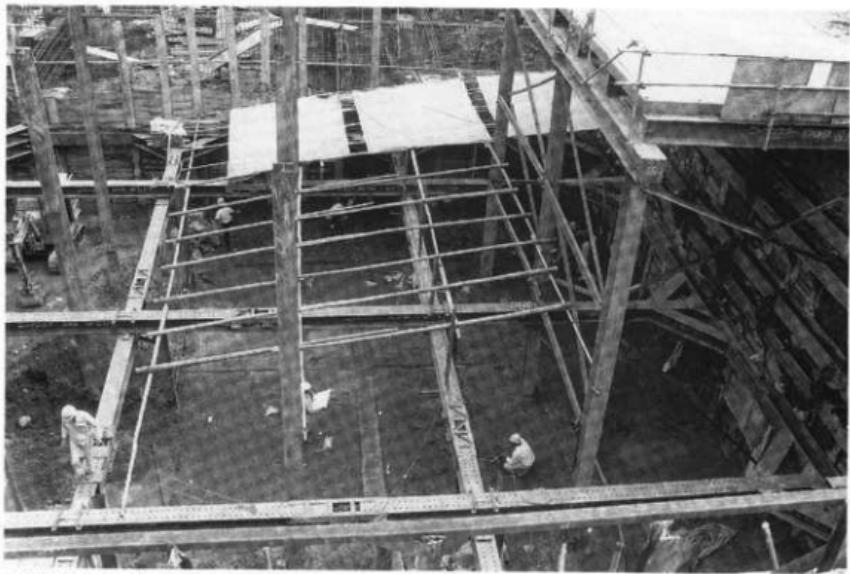
35

1 出土遺物

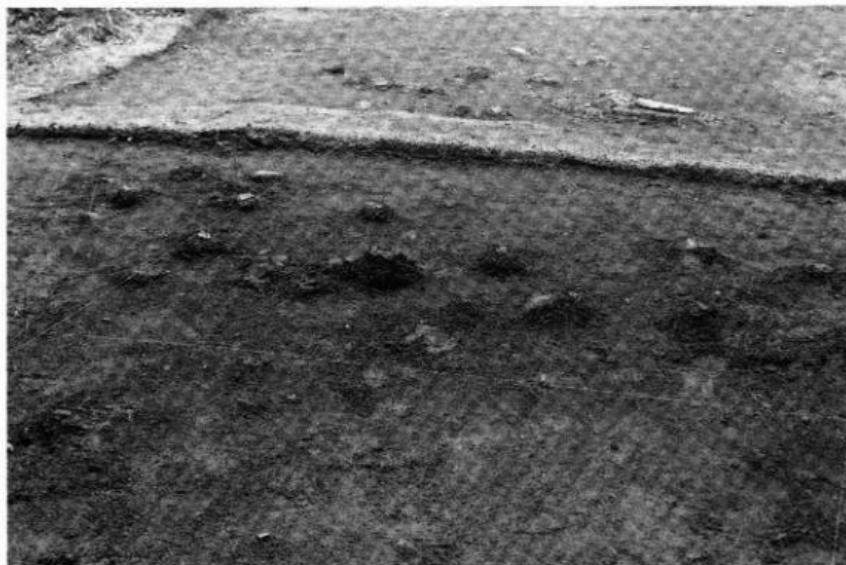
## 道後鷺谷道路



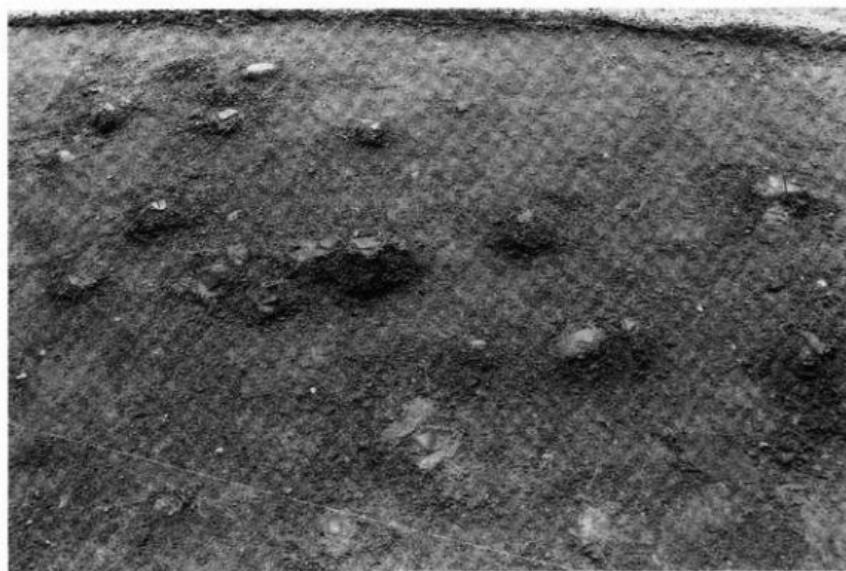
1 調査地全景（北西より）



2 調査区全景（北より）



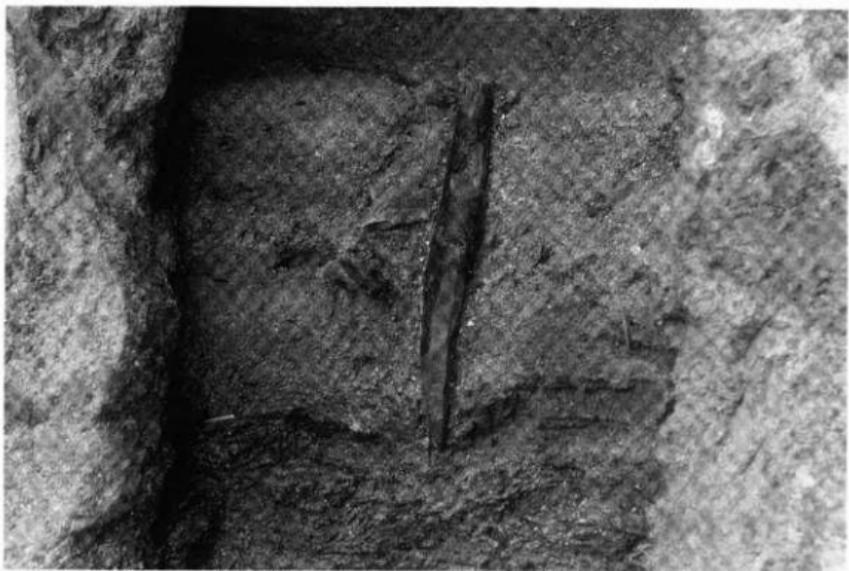
1 遺物出土状況遠景（西より）



2 遺物出土状況近景（西より）



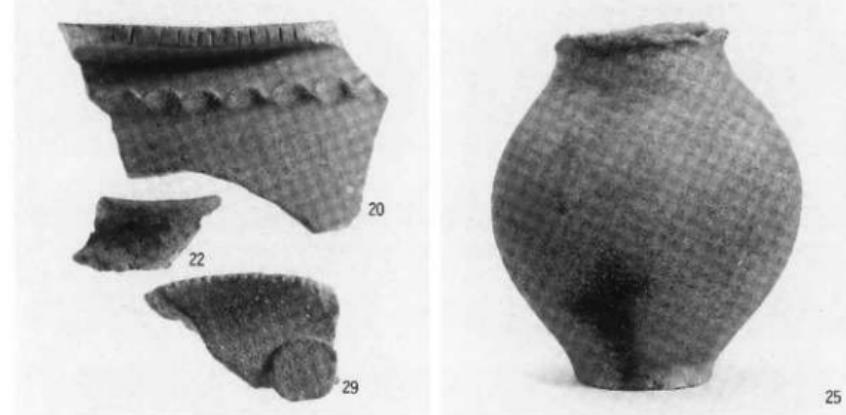
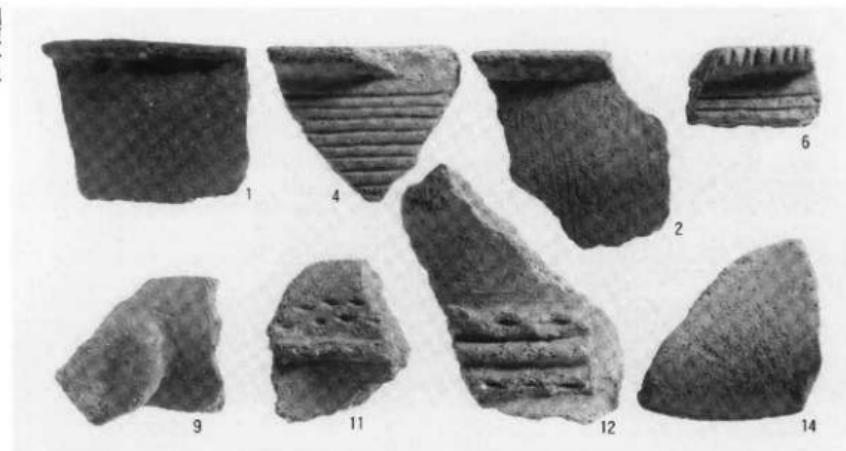
1 SXI 遺物出土状況（南より）



2 木杭出土状況（西より）

道後營谷遺跡

図版  
一二



1 出土遺物 ①

## 道後塗谷遺跡



33



34



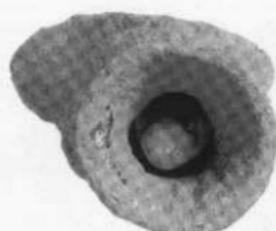
31



36



35



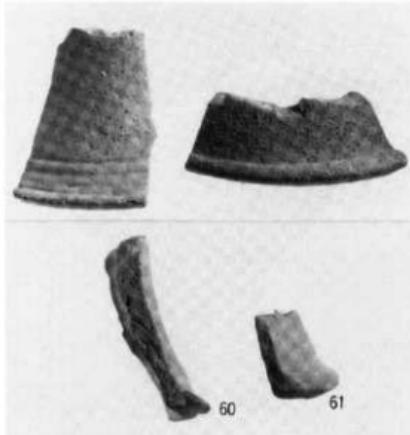
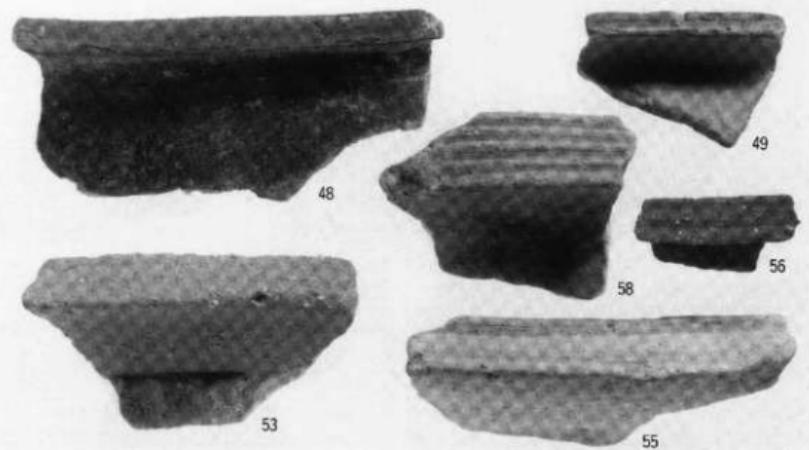
43



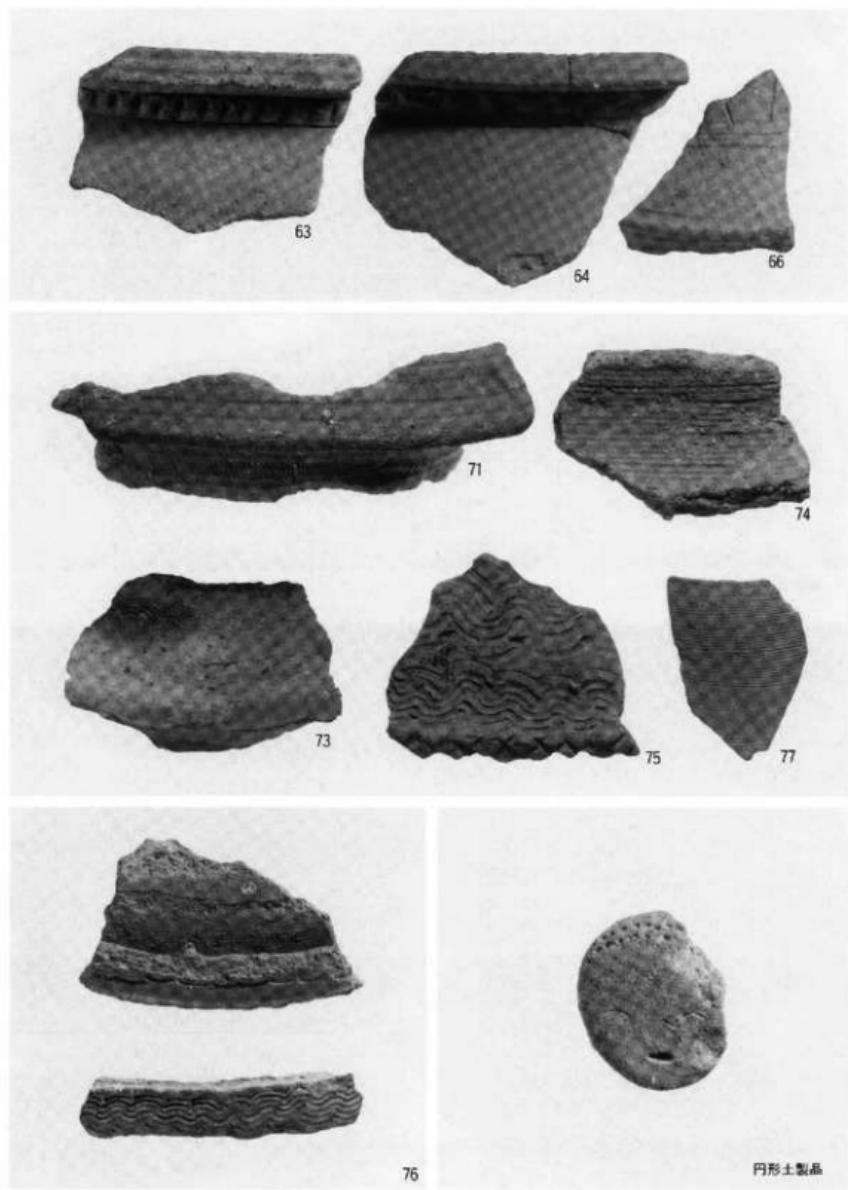
42

道後燒谷遺跡

圖版一四



1 出土遺物 ③

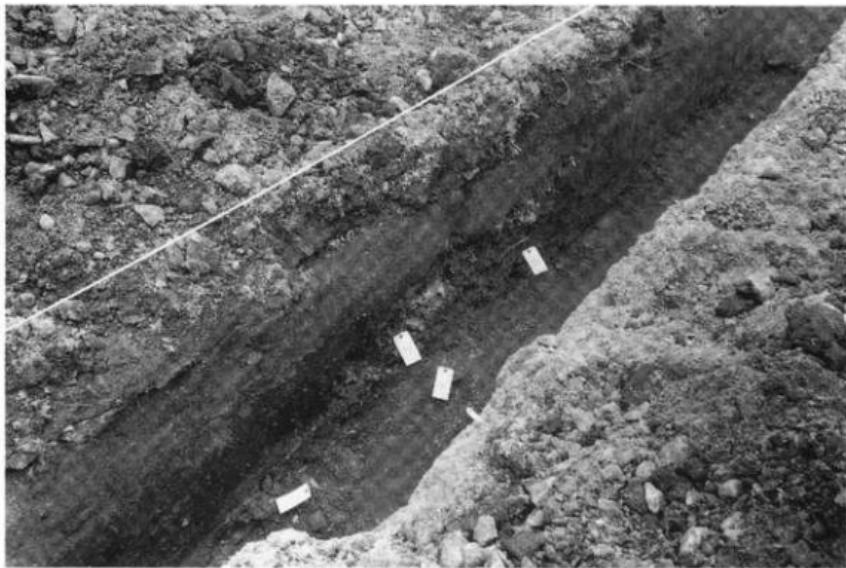


1 出土遺物 ④

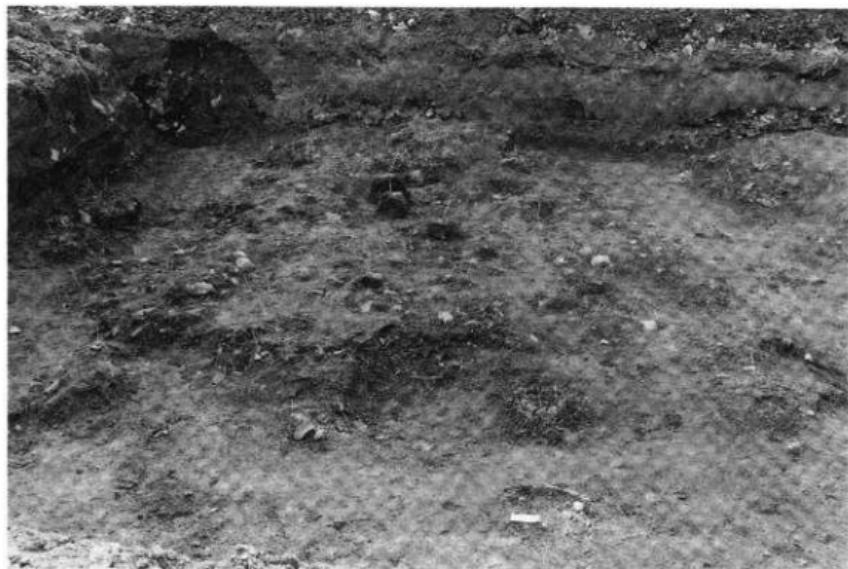
円形土製品



1 調査地近景（北より）



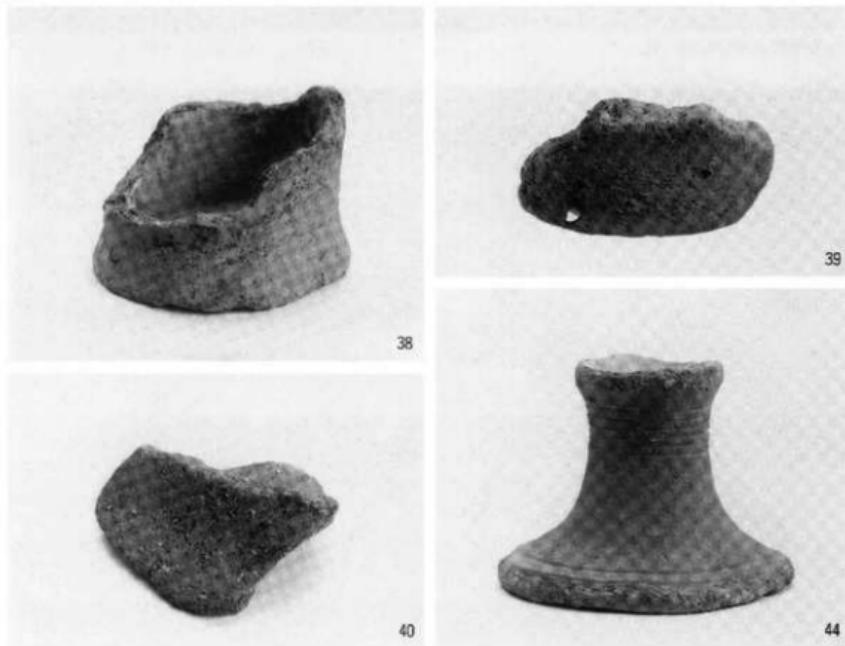
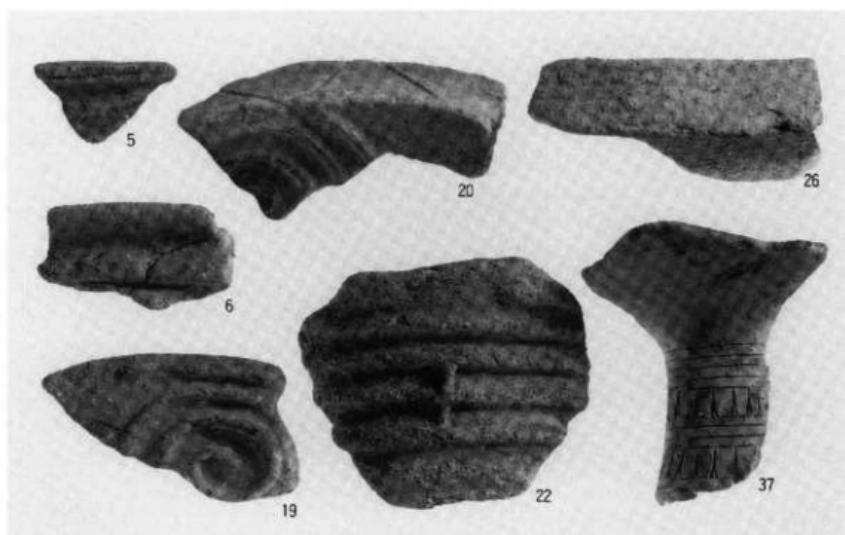
2 土層（南より）



1 遺物出土状況遠景（北より）

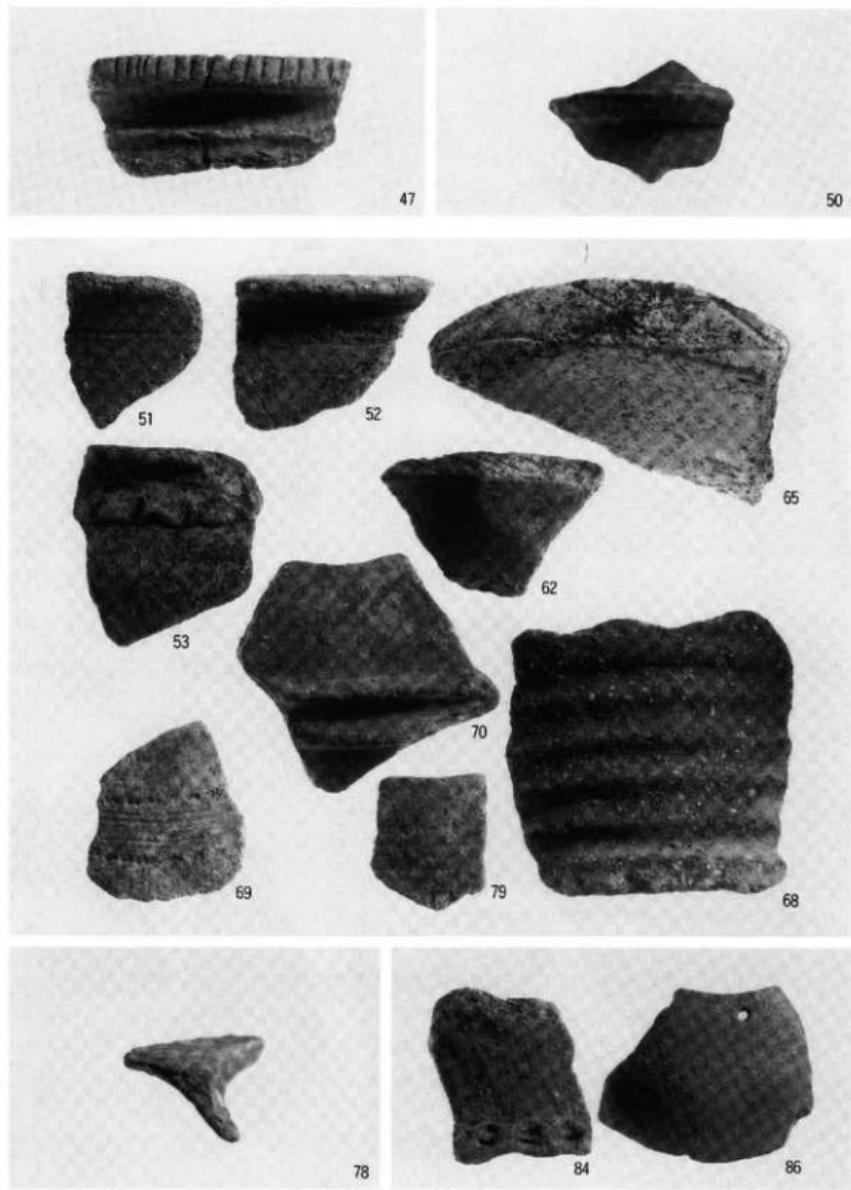


2 遺物出土状況近景（東より）



1 第Ⅲ層出土遺物

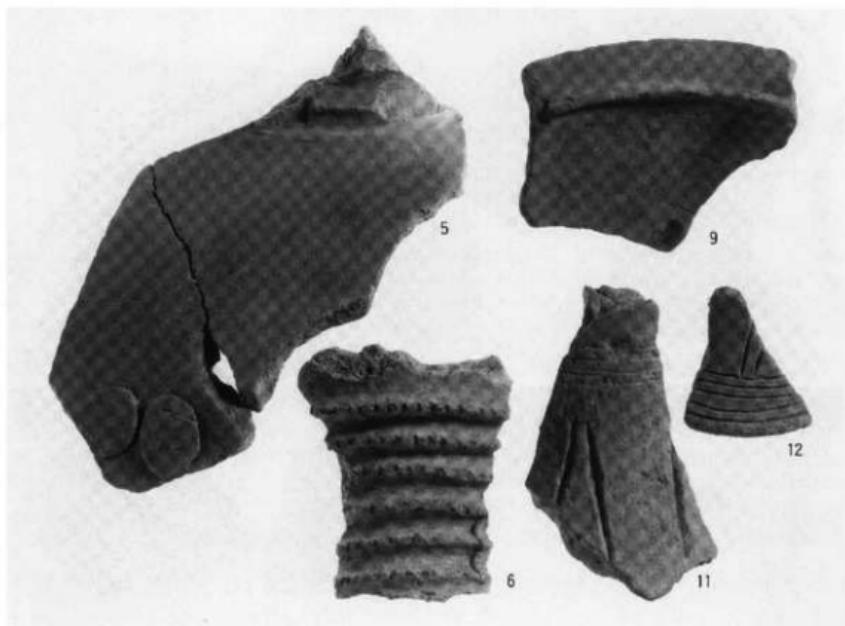
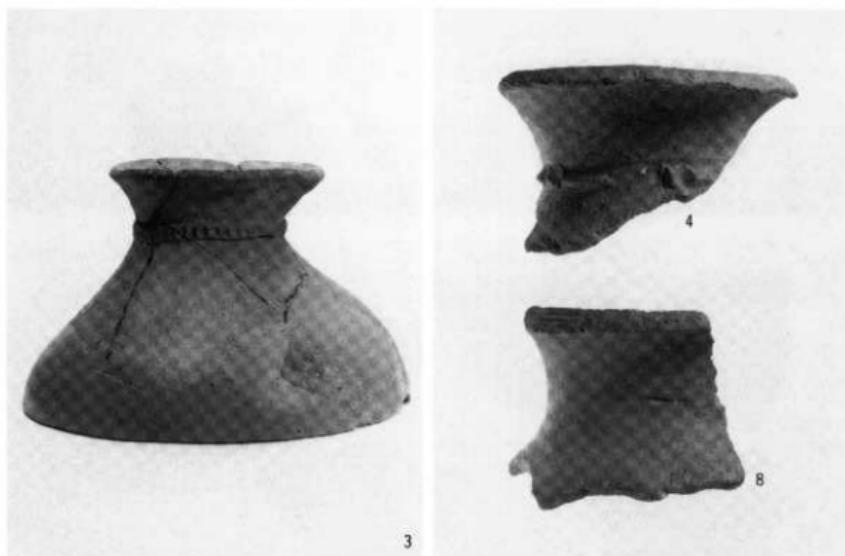
## 祝谷大地ヶ田道路



1 黒色粘土(47,50)・第IV層(51~79)・表様(84,86)遺物

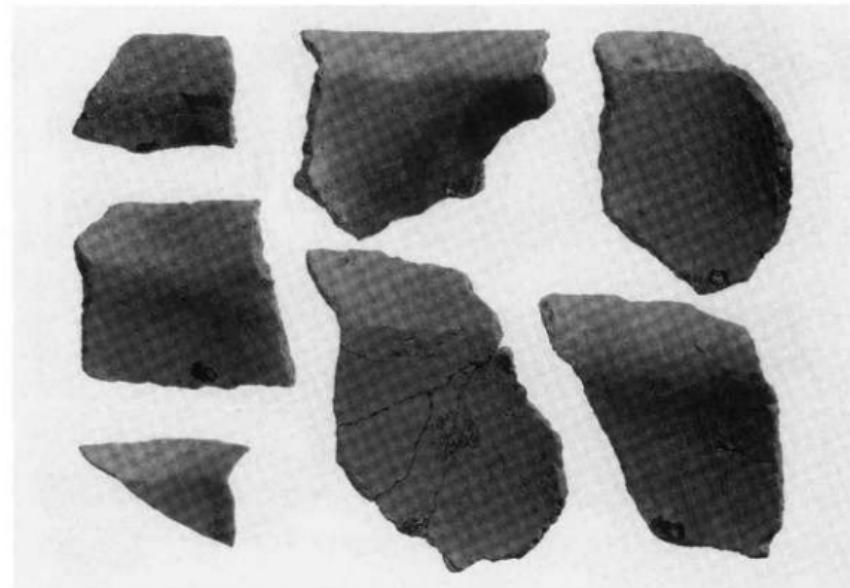
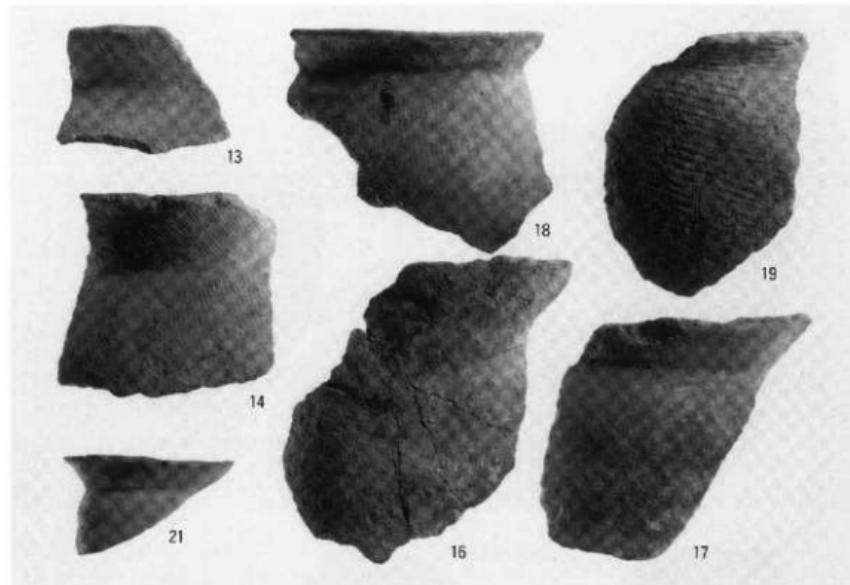
祝谷1丁目出土遺物

圖版二〇



1 祝谷1丁目出土遺物 ①

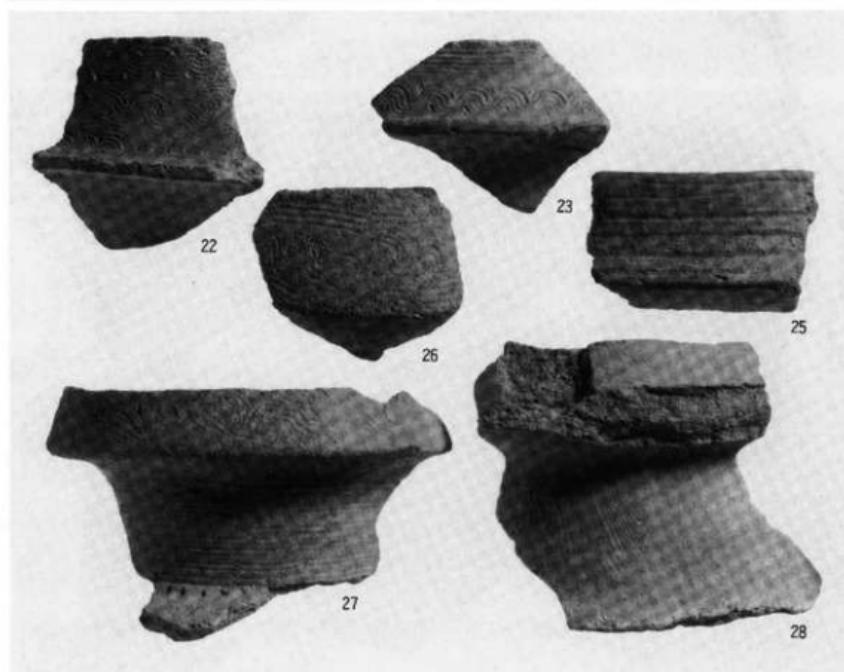
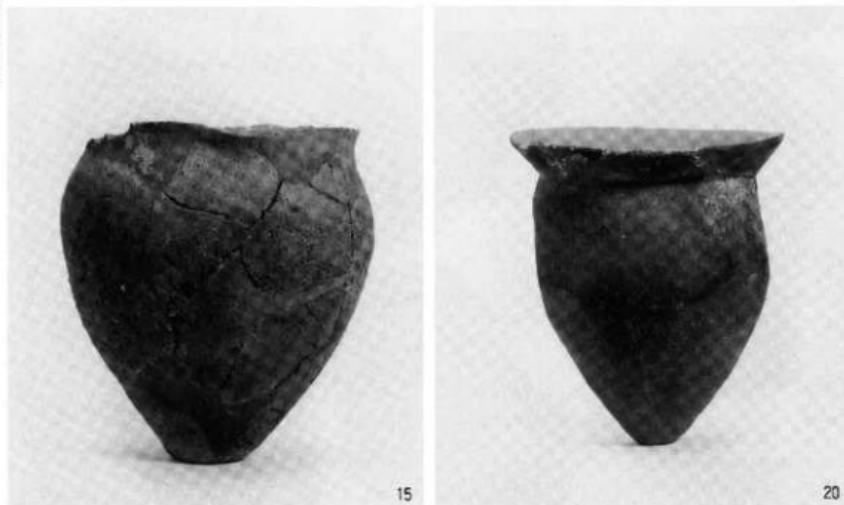
## 祝谷1丁目出土遺物



1 祝谷1丁目出土遺物 ②

祝谷 1 丁目出土遺物

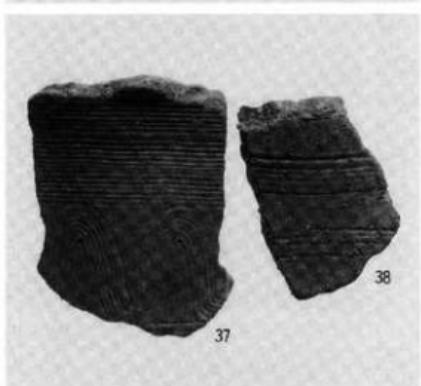
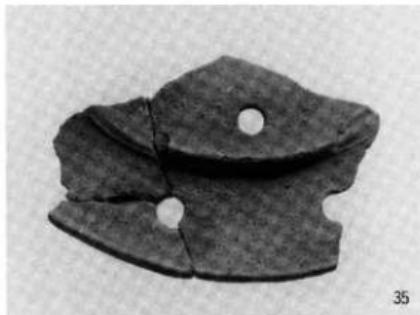
圖版二



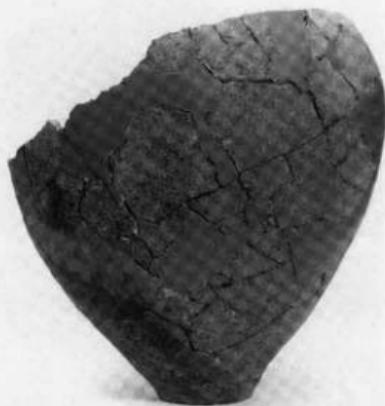
1 祝谷 1 丁目出土遺物 ③

祝谷1丁目出土遺物

図版三



1 祝谷1丁目出土遺物 ④

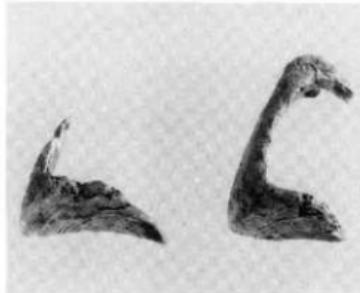


1



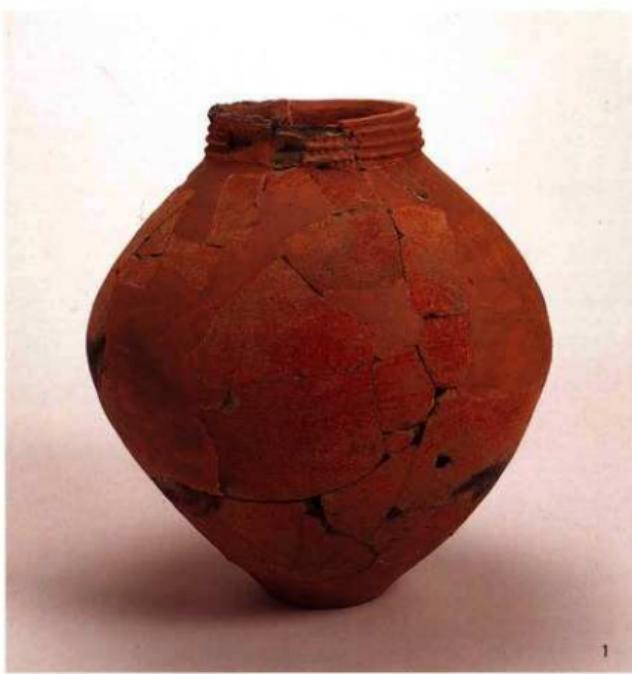
2

1 祝谷六丁目遺跡壺棺 ①

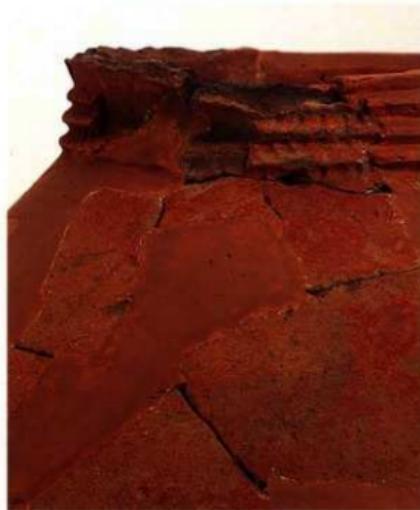


イモ貝殻





1



1 祝谷六丁目遺跡壺棺 ②



松山市文化財調査報告書 第37集

## 道後城北遺跡群 II

---

平成6年2月1日 発行

編集 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7-2

TEL (0899) 48-6605

発行 財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南康院町乙67番地6

TEL (0899) 23-6363

印刷 原印刷株式会社

〒791 松山市山越4丁目8-15

TEL (0899) 24-8823

---